

よ。」と踵を返すを、追懸くる様に背後より「こうまた新道を經師屋だらうの。」と「憚様、こゝに膝松と申すものの候ッ。」と平手でびつしやり膝頭の蚊を叩きて、登音軽くふいと去る、其後影の見えずなるまで、婦人は遙に目送しつ、此方を見向きするくくと来て盲人の前に、膝を合はせて踏ひつ、「富の市さん、嘸前刻は驚いたらうね、實はお前さんの心底を私が些少見届けたいため、一寸茶番を遣つたばかり、悪氣ぢやあないから堪忍おし。其かはりね、お前が生命懸のお頼みは、今夜といふ今夜こそ、私が確かにうけこんだよ。式三獻のお儀式でも、今から稽古をし置くが可のさ。」

十一

「へい、其では何かい、全然盗人は茶番かね。」と富の市は口を曲めて苦笑せり。婦人は頷き「お前さんもね、何處にか眞個の盗人が、お前さんの様な、眼界の見えない、弱蟲を捕へて、刃物三味する様な、時代な奴があるものかね。そりや演劇氣のある盗人なら格別さ、眞盗らうと思へば張倒しやあ其迄だものを。」と憚る色なく打微笑む、富の市は眉間に皺「何の、人面白くも無い、私あまた眞個かと思つたに。」とさも苦々し氣に謂ふを聞きて、婦人は氣の毒な思入あり。「だから謝罪つてるぢや無いか。しかし嘸吃驚したんだらう何様にかねえお前さん。」富の市は頭を掉り

「否、何も別に腹を立てはせぬが、嘘ぢやといふので落膽した、私は殺されると思つて喜んで居たものを。」婦人はこれを聞きて獨り頷き「そだよ、富の市さん、實はお前さんの其心底を見たいと思つて、其で彼の若い衆を頼んだのさ。」盲人は懷疑の面を上げ「其はまた何した次第だい。」「あい問はないでも謂ふ處さ。他ごとでもないけれど、それはお前さんが折入つて、私にお頼の一件ね、いざこざはさらりと廢して、まあ手ツ取疾く謂へば斯だらう、お前さんが何の因果かあの上杉の嬢さんを戀してさ、生命懸で思込んだが、何しても願が合はないと、そこで思切られないで切なくて我慢が出来ず、首でも縊つて死たいが、むざくと逝くのは嫌だし、と謂つて壽命の盡きるまでは、待つて居られず、何うぞして人に殺されて死たいが、殺してくれる者は無しで、一返何のことあ無い、さもし業だが望を遂げて、其を思出に、自殺をして、言譯をするとか斯ういふことだね。煎じ詰めた處がさ。で何がなしに私に其手曳をしてくれといふお前さんのお頼なんだ。けれどこりや迎も出来ない相談で、對手が如彼身分だから、金子づくでは不可いしさ、仕方がないから私が腕で、殺生をするんだがね、そこさ富の市さん、彼の嬢だつて、いまお前さんにナンされちやあ、まあ何様ならう、え、何うするとお前はお思ひだ。其成行は知れてるね。だから私もこんなことを請合つた上は、また私だけに覺悟はして居る、お前さんもまた其氣で居ておくれでない、私が酷く迷惑するよ。つまりお前さんが口でおいひの通り、彼の嬢を抱いた



ら其場を去らず、川近なれば身を投げようし、山なら首を縊らうし、家であつたら斑猫でも飲むやうに、固く定めて置いて貰はなきやあならないので、實際其が出来ようかと、其で今夜前刻の様が一番探を入れたんだがね、感心したよ、お前さんは何がなし唯死ぬことを喜んでるね、それほど迄に思ふんなら、可よ、しつかり、屹と、私が承合つた。長い間待たしやあしない、追付け、彼の嬢をお前さんに渡すから樂にしておいでなさい。」と天聞く地聞く、人の聞くを憚る色無き婦人の言、富の市は色動きて、眞に嬉氣なる笑を洩らし「唯、難有うござります、何にもいはぬ、これぢやく。」と手を組合はせて婦人を拜み「したか姉様、お前の腕で。」「何、お前、今ぢやく世の中が開けてらあな、きはどい處へ出て来るやうな、武者修行も居ないから、そりや案じるにやあ及ばないが、何しろ仕種がきはどいからお前さんも覺悟をおしよ。」「唯それはもう。」と誓ふに似たり。「む、それで可、而してちよいとお前さん。」と手にしたる團扇以て、渠が耳と、吾が口とを蔽ひつ、打囁くこと殆んど五分時「ぢやくあね、其氣で、い、かい。」「何分にも。」と富の市はいそ／＼として身を起しつ。絃月落ちて、星輝き、一帶の靄野面を限りて、眼界の盡くる處に、撫肩の情乎せる盲人の姿見えすなれり。「あ、戀は切ないものだねえ。」と何思ひけむ、件の婦人は悵然として天を仰ぎ、凄冷極無き兩眼に、露がほろりと一雫。心はいかなるものやらむ、夜目にも著き膚の色一團の雪闇夜に在り。

十二

頬の肥少し落ちたり。瓜核形の生際揃ひて、額襟許清かなるが、洗髪の毛筋通りて風に鬢の毛の亂る、も風情あり。氷肌玉骨、見るから涼しき中年増、明石縮の前垂して、白縮緬の蹴出無雜作にほのめきぬ、其全幅の風采を擧げて、すべてこれ鐵拐磊々たる様見えつ。

呼留めたる下婢は小走りに近附きて、「お島さん。」「はあ、また御催促か、恐れるねえ。」と憚り無く言放てり。下婢は前に進み、「恐れるたつて来てくれないぢやくあ困りますね。奥様が今日はお演劇を見に行くていのに。」髪結のお島は片頬に笑み「なんの見られに行く氣だらう。お前さん處の御新姐の天窓はね、鬢附と漆で捏上げたんだから恐れるよ。其上お前さんあの顔ぢやくあ、私の手で結つたのは配合が悪いね。矢張あのそれ何とかいふ髪結ね、一個一錢と謂ふ、唾で叩いちやくあ撫で着ける人さ、彼の人に結はせるのが相應だあな。お前歸つたらさうお謂ひ、お島と謂ふ髪結はね、結ひたい方は頼んでも結はせて貰ふが、嫌な人のお頼みでも御免蒙るツて、可いかい、あばよ。」と素氣なく見返りもせでさつさつと行く、後に下婢は呆然たり。此髪結奇骨あり。容貌は然く艶にして、然も其術に妙を得たり。嘗て東京の花柳社會に持囃されたるものなりしが、新橋の藝妓小俊と謂へるが、或人に落籍されて其妻となりつ、も、共に此地に移れる時、我髪を結は



すべき者に島ならではあらじとて、田舎に同行を勧めけるに、お島もまた世に小俊の髪ばかり結心地の好きはあらず、一日に一回づ、小俊が緑髪を解かざれば、寝心悪しと爾謂ふなり、殆んど端倪すべからざる事實ありて、東京に於ける此髪結が、一月數十金を得べき収入を、瓦礫の如く打棄てて、落籍される小俊に隨行し、去年の春、ともに此地に下りしなり。尤も己が氣に入らざる髪結を養ふばかり榮耀の絶頂にある藝者なれば、よし黄金の數十枚を以てこそせざれども、其よりはなほ一層の、自由と待遇を、此髪結に與へ居るなり。

されば毎朝小俊が枕痕紅透肉一分の時其寢亂れ髪を梳ることの他に、何等の日課なく職業なき鐵拐無類の婦人なれば、眼中天地なく、はた人もなく、其一地方を平呑して殆んど恐るゝ色も無き、其名は四方に聞こえつゝ、土地の豪農富家の婦女、皆幣を厚くして、お島の手を煩はさむことを欲すれども、前段下婢に向ひて謂へりし如く、己が氣に向かざる者は、一櫛とても容るゝことなく、我なさむすと欲すれば、伏屋に住ふ賤の女をも、自から進みて髪結ふなり。然もあらむ新橋の一刻千金の名妓が頭髮を治せむとて、故らに配所の月を見るものなれば、其の金錢を以て思ふまゝに渠を煩はすことを得ざるほど、土地の婦人は皆すべて、お島が手になる島田、丸鬚、銀杏返やはた何々を、己が頭に頂くを、一方ならぬ榮とせるなり。

さてお島は呆然たる下婢を見棄てて、急足に三町ばかりとある小路の角家の、軒傾き柱朽ちた

る、矮屋の前に至りて、板戸のがたゝとさしむを開け、「旦那、可うござんすか、入つても。」と門に立ちてぞ音なひたる、内より無愛想な男の聲、「誰だ。」こはこれ二上秋山と謂ふ、青年の畫師の佗住居。

十三

「さあ、また大變に散かつた、おやく、紙やら筆やら組やら、恐ろしいお座敷だこと、何處を踏んで通りませうね。」と髪結のお島は部屋の数居越にイみて、入りもやらで呆れて居る。

實に六疊の一角は散かりたるなり。狭き此の一角には、火鉢と、土瓶と、組と、醬油樽と、瓶と、徳利と、洋燈と、机と、本箱と、堆き書籍と、亂れたる紙片と、凡ての文房具と、勝手道具と、衣類とを容れて、殆んど餘地無きに、主人公は疾病ありて、夜具にくるまり座中に寝たれば、蓋し足を容るべき寸地とてもなかりしならむ。

枕に就ける主人公は、年紀二十三の壯俊なり。其肩は秀で、其鼻は隆く、白面朱唇の好男兒、これぞ二上秋山なる。沐浴せざるに垢染こそしたれ、寝て罷こそ茫茫たれ、犯すべからざる品位ありて、然も猛からぬ人物なるが、「跨いで入れ、構ふことあ無い。」と寝返りもせで、最無愛想にも言へり。



「あい、そんなら御免遊ばせよ。」と髪結は小腰を屈め、手もて其邊等を片附ながら、火鉢の前に座を占めつ。壘は破れ壁落ちたり。座に着きて髪結は帯の間より縞珍に鹽瀬の裏着けたる、女持の煙草入を取出して、「さてと先づ、一服頂きたいものだがね、煙管は相變らず詰つて居ようね。」  
「うんや、此間お前が通して行つたツきり、吾あ口が不味いでな、ちつとも飲まんから通つて居る。」  
「さう、そりや不可いねえ。」と浮かぬ顔。「詰つちやあ居ないと謂ふのに、何が不可いがあるものか。」  
「そりや煙管の通つてゐるのは嬉しいけれど。」とお島はあどけなく男を見つ。其ま、菜刀豆の煙管を取りて、火鉢の中を覗き込み、「あれ、此火鉢で蚊燻をしちやあ、不可つて謂ふのにさ。」  
「何だ、お前、來なり早々人様の御病氣の、お見舞も申さないで、叱言ばかり謂ふ不躰千萬な。」  
「でもこりや可んだから、お客様のある時ばかりお使ひと申すのに。」  
「家へ來るお客様はお前ばかりだ、誰が此様處へ來るもんか。」  
「はい、おつしやる通りだね。道理で火の氣も無いやうだ。」と煙草を詰めて試みつ、「おや、火種もなんにも無いね。」  
「早附木早附木。」  
「何處にあるの。」  
「何處か其處等にあるだらう。」  
「酷いお客様あしらひだことねえ。」  
「御主人は御病氣さ。」  
「結構でございます。」とお島は笑ひながら早附木を擦りて一服吸ひ、「途中ちやあ可けれど、内で飲むのに早附木では不味いのねえ。」  
「さう思つたら、火を起すだ。」  
「次手にお茶でも入れませうかね、ほい、憚様だ。」と四邊を見て「焚附は無いかしら。」  
「炭に石油をぶつ掛るさ。」  
「亂暴だね

え。おや御用意の可、此處に油壺が。」と手に取りしが、一滴も無きに柳眉を擧めて、「こりや些少もありやしないよ。」  
「晩に油屋が來るから可、洋燈から口移しと遣れ、雜作は無い。」と秋山は自若たり。

兎角して火は出來たり。お島は更めて一服吸ひ、また一服を吸附けて、「秋さん、上げませう。」と差出すを、青年の畫師は取らむとせず、「欲か無い。」と膠無き挨拶、お島は身を斜に枕に居寄りて、「可からお飲みよ、飲まさなきあ肯かないよ。」と吸口を推附けて、秋山が唇に齧らしたり。秋山は眉根を寄せて、「實に亂暴だね、酷いことをする。」と詮方なしに一喫せしが、案外に味よければ、含みたる煙管を放たず。お島は其顔を右瞻左瞻で、「不味かい。」無言なり。「まだ熱があつて不可の。」秋山はなほ黙す。お島はじれて、「何うだつてばさ。」秋山莞爾として、「もう、一服。」

十四

秋山が、然ばかり無邪氣なるに、お島は唯譯も無く微笑まねつ。「憎らしいね。」と優しく睨みて、また一服吸附けながら、「其様に煙草が旨い様だと、病氣はもう快方んだね、些顔でも剃つて爽然なさいよ、髯だらけだわね、汚穢しい。」  
秋山は掌以て頬の邊を撫試み、「む、垢と毛で以て何だか苔でも生えた様だ。剃つて貰らつたら快然して好からうが、内にや剃刀が無いからな。」  
其



處に御脱心があるものかね。ちやんと合はして持つて來たの、實は顔でも刺つてあげませうと思つて一寸お邪魔をしたんだから。」とお島は懷中より手拭に包みたる一挺の剃刀を取出して温湯を器に汲み取り、秋山が寝たるまゝ、お島は己が膝に枕させて、衣の汚るゝも厭ふ色なく、靜かに剃刀を當て始めつ。

爾く隔て無き二人が交情は、如何なる關係を有するものぞ。秋山は年紀下なり、然れどもお島の弟にあらず、お島は年紀上なり、然れども秋山の姉にあらず。姉弟にあらずしては何等血統の親あるにあらずしてあかの他人の男と女が、其睦まじき間柄は、一双の痴蝶ならでそも何ぞ。否々、決して渠等二人はさる肉體の關係を有する者にはあらざるなり。現社會の男女間、豈單に野合と、夫婦と、密通と、この三者のみに止まらむや。二人は一種親密なる信友にありしなり。但しお島は秋山を心密に未來の夫と戀りしのみ、お島が畫師を戀初めし其順序の如何なるかは、別に茲には説かざるべく、唯戀しきがゆるゑに戀せしのみ。渠は苔咲き、花去りて、葉櫻の意氣なる姿、今二十五の年紀に到るまで、男と云ふもの當て眼中になかりしが、東男と諺にも謂ふなる故郷の東都に於てせて、去年の春小俊とともに此地に下り來りし後、一日、一時、一場合に、秋山を思初めたる、それぞお島が初戀なりける。

天爵の尊き者はこの賤しむべき社會に處して、多くは生活の下級に在り。秋山は東京なる美術

學校の卒業生にして、繪畫の何たるかを知り得て餘ある者なれども、未だ自ら足れりとせず、靜かに閑地に閉居して、想を養ふ人物なるが、収入とてはあるにあらず、學資を給する者も無ければ、目錄、行燈畫に腕を屈して、辛くも其日を支ふるのみ。渠が實家は商賈にて、資産を有するものなれども、親も兄も秋山が、筆と腦髓との職を欲せず、算盤と前垂を業とせむことを強ふれども、渠が頑として肯かざるより、怒りて資金を投ぜざるなり。

されば秋山は固より衣食住の満足を欲するにはあらざれども、大なる缺乏よりパンと水にすら窮することあり、其弱點をお島が認めて、交るに難き秋山と、自由に相會することを得るに到りて、お島其目的の一段落に達したるは、五六ヶ月前のことなりき。

爾來ものに着け折に觸れてあらゆる實情の熱血を灌ぎしかば、秋山も心解けて、他の男子に對してもものいふよりも此婦人に向ひてものいふことの、遙かに親しく且つ隔なきまでとはなりぬ。世の人の多數は朋友に向ひて磊落なれども妻と姉妹にあらざる婦人に對しては故らに内端なるものなるに、獨り此の秋山は、親よりも、兄よりも、出入の魚屋に向ひてよりも、お島に對する方却りて隔心なく、介意なく、恰も、姉か、母親か、はた細君かの如きものなりしなり。



上杉の令嬢小夜子が、人に對しては端肅なる婦人なるにも關はらず、母と其祕藏せる黒猫とに對しては、何等の價値なく、あどけなき嬰兒たるに過ぎざる如く、二上秋山の世馴れざる、他人に對してはわけもなく面を赤むるほど、内氣の人物なるに、獨りお島に會しては、恰も場所なれたる遊客が藝者に於けるかの如く、無頓着に、無雜作に、色氣も見得も打棄てたる親しき中に、五六ヶ月の長き時間を過しながら、(未來の約束)など謂ふ如き、程度の低き愛情は、よし、婦人の方には其希望のありたるにもせよ、兩個の間には寸毫も成立たで唯姊として、弟として、弟として、姊として渠等の愛は續きにき。

然るに其日お島が訪ひ來りしより旬日ばかり以前なりしが、秋山は言を正し、姿を改め、何の道理ありて然は我が缺けたるを補ひ、窮するを救ひ、物品に、金錢に、はた衣類に、なほ且つ眞情に、我に親切を盡すかを、お島に向ひて問へりし事あり、勿論それまでに秋山が然る事を問ひたりしは幾度と謂ふ數を知らざりしも、お島は其都度片頬笑みて、「何だねえ、眞面目になつて子供に癖に生意氣だよ。」ぐらるな處にて冷然たりしが、其時の秋山が辭色は普通ならで、殆んど問ふといはむより、詰るといふべきほどの氣色なりしかばお島は其を機會に心を決して、辛うじて、強ひて、斷念して、遂に秋山が未來の妻たらむと欲することの、己が、終生唯一の希望なるよしを、淡泊に打明けた。噫、お島が、失望はいかなりしぞ、秋山は斷然これを辭したるなり。

辭したる秋山の口實は、到底動かすこと能はざる、有力なる言なりしを以て、お島は敢て強ふるを得ず、其まゝにして黙して止みつ。談笑常の如くなりし、其翌日もまた其翌日も、常に變らで音信れしが、何の變りたる素振もなく、秋山も亦意に介せず、交情は依然として舊の如くに打續きつ。恚て此日に到りしなりけり。お島は唯、「顔でも剃つて上げようと思つて。」來たりたるよし口には謂へど心に期することありけむ、膝に秋山を枕させて、何か物語をなしつ、も靜かに髻を剃りたる間に罪の無き秋山は、お島の膝に仰向きたるまゝ、すやくと眠りたり。

寢顔は一入煩惱の種、お島は掌にて剃刀の切を試みたるまゝ、男の顔を瞻りつ、しびる、膝の重量も忘れ、身も忘れ、世も忘れ、恍たるもの久しかりしが、何思ひけむ愁然として其玉の如き白き胸に細き手先を差入れつ。

一室寂然、そよ吹く風に書散らしたる紙片少しく動く時戶外の戸をがらりと開けて、一聲高く、「魚屋でいーいー」

秋山は此聲に驚き覺めて、唯見れば其膝を枕とせる、お島が我を見詰めたる、多根多情の眼中に、ほろりと涙を湛へたり。秋山は思はず、「おや。」お島は慌しく背後を向きて、「肴屋さん、今日は何だい。」

肴屋は節を附けて、「え、鮪に、鰈、鯛に、鰯、鱈、鱈、きすに、はうぼう、はんぺん、



蒲鉾は如何様で。「ふう、嘸また高價いんだらうねえ、——貴下。」と秋山の天窓を下ろして、手拭片手に身を起しつ。格子戸より半身を差出して、「ちよいと其鮪を作つてね、鯛を煮魚にしてもらはう。それからね、お前一寸御苦勞だが、此先の酒屋へ行つてね、可のを五合、直といつて来ておくれでないか。」魚屋は嫌に笑ひ、「へひ、覗いてましたぜ。」何だ不景氣な。」と一つなぐられ、「御樂み！」と言棄てて、魚屋は驅出したたり。お島は枕許に引返して、「何うする、何のお祝だ。」と呆顔の秋山を、ちつとみて莞爾笑ひ、「あの、別離の盃をしようねえ。」

十六

器什は甚だ不完全ながらも、暫時世話女房に浮身を裏したるお島の手には、兩三種の料理、鹽梅成りて、酒肴を間に相對しつ。盃を上げむとして、秋山は稍躊躇せり。「お前、何か、別離の盃だと謂つたな、何ういふ譯だ。」と懸念氣なり。「何ね、夫婦別離の盃をしようといふのさ。私がつい此間變な言を謂出して、お前さんも氣が悪からうし、私も何だか氣になるから、これをね別離の盃にしよう」と謂ふの、而して夫婦だけは取消しだよ。」と顔の色をも動かさず、秋山もまた自若として、「む、左様か、そりや何より結構だ。お飲まう、酌いでおくんな。」無雜作に盃を差出せば、お島は爛徳利を取上げつ、少し言淀みて、「あの、お前さん。」「え、何だ。」「斯う謂つ

ちやあ未練のやうで、お前さんにはお恥かしいが、私は未だ斷念められないよ。」と口籠りつ、顔を赤めぬ。

秋山は瞪れる眼に、疑の色を宿して、「何故。」「何故でもさ、だからねお前さん、後生だから、もう一返あの件を謂つて聞かして頂戴な、念のためもう一度聞きたいよ。」と謂ふ聲少しく震へたり。秋山は其意を得ず、「あのことツて、何?」「あら、私をお前さんが女房に出来ないツていふ譯さ。」と極悪げに俯向きぬ。

秋山は額を撫でて「ふむ、可いぢやあ無いか、もう分つてる癖に。」「だ、けれどもさ。」「そりや已だつて何もお前を嫌ふと謂ふ……まあ可いぢやあ無いか、分つてる癖に。」お島はなほ、「だけれどもさ。」秋山は天窓を搔きて、「困つちまふ喃、何うも、改まつちやあ言悪いもの。」「可いぢやアありませんか、誰も聞いてるやあしないから。」「だつてお前が聞いて居る。」

お島は淋しく打笑ひて、「そんなこと謂はないでさ、何の男の様でも無い。」「む、ぢやあ謂はう、お前を嫌ふと謂ふ譯ぢやあ無いが、他に其吾が少し、……まあ可いぢやあ無いか、分つてる癖に。」「だつてもさ。」「困るなあ、何うも吾が其他に少し、思つてる、女があつて、……まあ可いぢやあ無いか、分つてる癖に。」と困する顔をお島は曇りたる眼に屹と視て、「眞個かい。」秋山も屹となれり。「む、眞個だ。」



慥て二人は無言なりき。良ありて秋山は、「何も許嫁といふんぢやあ無し、約束をしたといふでもなし、むかうの女は吾といふものを知つてるか、知らないか、それさへ分らない位だけれど、何ういふもんだか、大方因業といふんだらう。お前の親切は吾が知つてゐる、こんな意氣地の無いものでも、何時か恩返をする時もあるらう、から、まあ長い眼で見えて居てくれ。」と秋山は歎息せり。お島は顔を上げ、「何の、つまらない、恩もなにもあるんぢやあないわね。可よ、分りました。しかしね、私はこれで少時来ないよ、今日も宅から出る時は、立派に笑つてと思つたけれど、顔を見るとまた未練が出るからね、何うせ末長く一所に遊んぢや欲いけれど、夫婦になりたいといふ心がなくなるまで、私はね、行をする氣でお前さんに會はないよ。此間談した緋の浴衣ね、ありやお前さんの綻も縫へないやうではと思つて、雑巾から稽古をし出して、手初に縫つて見たがね、よくはならないけれど出来る内のお三どんに持たして寄越すからしつけを取つて着ておくれ。而してね、秋さん、勉強は嬉しいが、毒だといふから夜更をおしでないよ、大變身體が弱るツさ。」と謂ひつゝ、お島は俯向きたる男の顔を差覗きぬ。

十七

秋山は腕を拱き、「それぢやあ、多日来ないつもりか、吾も淋しいが、仕方がない。」唯、私だ

つて来ないぢやあ居られないけれど、顔を見ると直ぐ未練が出るから、まあ何うだか知らんが辛抱をして見ようと思ふよ。「む、それも可からう。」と秋山は水の如し。お島もまた淡泊と、「だがね、来たつて我慢が出来なけりやあ、また何時でも談話に来るよ。」「そりや可さ。」

此に於てお島は屹と改まり、「それでは思切るから、さあおあがり、一盃注ぐよ。」と少し震へつ酌しけるを、秋山はぐつと干して、「ぢやあ思切つてくれ。一ツあげよう。」唯、「と盃を受取りて充溢と注いで貰ひ、掌に据ゑて、盃を唇に齧らす時、これをこそ終生の希望としたる、式三獻の盃ならで、我戀ふ秋山と再び戀情を以て見えまじき、誓の酒と思ふにぞ、豫て期したる事ながら、お島は身も世もあらねぬ思、願くはこれを一滴の鳩毒として、此ま、肉體を殺したきまで、情激し、胸迫りて、氣丈の婦人も、我知らずはらくと落涙しつ。「笑つておくれでないよ。」と、横を向きてソト眼を拭ひ、やがて振上げた其顔は、酔へるにあらで臉赤く、稍着すみたる満面にはあはれなる笑をぞ湛へける。

黒猫

鐵拐渠が如き婦人にして、さほどまでに思ひ詰めたるお島の胸中はそもいかなりけむ。秋山もまた秋山なり、妖艶婀娜たる恩人が、生命を賭したる戀情を冷然として勿付けたる、其心中を推すれば、渠が戀すて婦人に對する至情いかばかりか切なりけむ。座は少しくしらけたり。恰も可、戸外に音なふ婦人の聲「もし、一寸伺ひます。」お島は内より、



「あい、誰方。」「私はあの、上杉から参りましたものでございますが。」と富の市の眞似をするお三どん、格子戸を開けて赤ら顔をつつと出し、お島を見附けて、「あれ、髪結さん、今ね、貴女のお宅へ伺ひましたが、此方にお出だと聞いて参りました。お忙がしうございませうが、何卒今日中にお嬢様のお髪を一つ片蔭になつてからで可うございますからね、是非と斯様におつしやりました。」と早口の口上旨きものなり。

お島は機嫌よく承知して、「唯、直に参ります。」「それでは何卒。」「これは憚様。」「左様なら。」とお三は歸れり。

「それではお前もう歸るか。」と秋山は淋しげなり。お島は縋子の帯をぎうと撫で、「他なら斷つちまふけれど、上杉のお嬢様たといふから、念入で結つて上げるんだよ、秋さん、島田が可からうね。」「え！」

「あばよ、お奢んな。」と言かけて、手酌で大きなのにぐいと引懸け、威勢よく座を立つ時、はらりと溢る、後毛を、二三本白齒に噛み、「あ、つまらない世になつた。」と悄然とし崩折れたり。

「お島。」と秋山が鋭き一聲、ハツとして笑顔「秋さんお大事に。」と戸外に出づ。

「もし、間違つたら御免下され、お島さんではござりませぬか。」と濁りたる聲に呼懸けられ、夢中に道を行きたるお島、不圖心着けば眼の前に影の如き盲人一人、色の蒼きがイめり。

「おや富の市さんか、よく気がついたね。」富の市はにやりとして、「えひ、香と足音で分りまする。」「嫌だねお前猫見た様に。」富の市はといきを吐き、「あ、猫になりたうござります。もし、何時畜生になれるのでござります。」「眞晝間、何だい、まあ、日が長いからお急ぎでない。」「愆て三十分の後はお島既に上杉の一室に在りて、お小夜の髪を解き居れり。」

十八

「癖直しの湯を、三や。」其膝に黒猫を抱き、片手に新聞を廣げつ、お島に髪を解かせたりし上杉の令嬢は、今顧みて下婢を呼べり。お小夜の命の下にお三は癖直しの湯を持ち來りしが、例の饒舌りた好なれば、其ま、には立去らず、中腰になりて何か談話懸けられむことを待ち居れり。恰も此時髪結は鏡に映るお小夜の顔の、眉の間に一片の雲懸りて、浮かぬ色あるを認めたり。お島は一寸櫛持てる手に、口の邊の汗を拭ひ、「もし、お嬢様、御風邪氣でもございますか、何だかお色艶が悪うございますね。」お小夜は、「否、別に。」と氣の無き返事、下婢は、「ぞと膝を進めて、髪結さん、まあお聞きなさい。」「はあ。」「お嬢様は如彼なことをおつしやいますけれども、否別に處ちやあございませんの、何だつてもう如彼ぢやあ人間業ではございませんね、お嬢様は何がなし蛇にお魅込れなすつたも同一ですよ。」「へい大變だね。」と髪結は聞耳立てつ。令嬢は聞



くに堪へざる不快の色あり。「三や、またかい、もう其様事いつておくれでないよ、氣味の悪い。」  
下婢は手を舉げて令嬢の言を排し「あらお嬢様、何でも斯様ことは誰にでも話して氣を霽します  
方が可うございますよ、黙つて考へてばかり居ますと、鬱して塞ぐんでございますよ。ねえ、髪  
結さん、まあ聞いて下さい、聞かないたつて聞かしますよ。」聞きますとも！おほ、。「他ぢや  
あ無いんですが、あの富の市ね、彼がもうすつかりお嬢様に惚れてるんでね。」「あれ三や、お前  
何をいふのだね。」「否、ようございますよ、唯、何も彼奴が惚れたからつて貴方の恥にはなりま  
せん。それでね、髪結さん、はじめの内はお茶を飲んぢやあお嬢様のお顔を見てね、怨しさうな  
聲で猫に成りたうござりますツさ、まあ其位で済んで居ましたが、段々嵩じて来て此頃は毎日來  
ますよ、而うして誰も構ひ人がございませぬのに、案内もなしにのそりと這入んぢやお座敷に  
坐つたり、お廊下にぬつと立つて居たり、お庭の松の樹の下に悄乎と立つて居たりね、宛然本氣  
ではありませんの。人間もこれ恥を知つて内こそ、外聞も介へば、遠慮もする、氣の毒な心も  
あり、人の眼顔も見えますけれども、彼の盲人の様な怪物染て來ちやあ、からも無茶ですな。  
あれでもつと非道くなりますとね、破風口から出入をしようも知れませぬ、其がと謂ふと皆お嬢  
様の故なんで、お氣の毒なはお嬢様で、何でも蜘蛛の巢にでも取巻かれていらつしやるやうな氣  
がしませう。奥様をはじめ私どもでも快心持で御膳さへ頂かれませぬ位です。其がね、何か亂暴

でもするなら巡査様にも申されますし、物貰か何ぞなら追出すといふ法もあるんですけれど、唯  
知己の内へ遠慮なく入込むといふばかりなんで、手の着けやうもありません。もう、何が何だ  
つて此位嫌なことはありますまい、え、髪結さん何とか仕様が無いものでせうか。」お小夜は談  
話を聞くうちに、富の市を眼の前に見る心地して、顔の色一入變りぬ。髪結は何思ひけむ、事  
も無げに打笑ひ、「何そりや譯の無い事でござりますよ。でもね執心といふものは恐いもので何  
様事をしようも知れませぬが、可いことがあるんです。それお内の後の山ね、彼處に祠がありま  
せう。一寸小さな鳥居のある、ありや誰にでも聞いて御覽なさい、有名な縁切神様なんで何様執  
念の深いんでも、直兇詛で縁が切れて仕舞ます。何もね面倒なことは無いけれど、少し遣り悪い  
のは、夜で、人の見ない様にしなけりやならないので、思はれてる婦人が自分の髪の毛をね、十  
筋繫いで、あのそれ小さな鳥居の柱と柱とに結へて置いて、真中からぶつ切り切つて後を見ない  
で歸りますとね、もう何もわけやありやしませんさ。」と真しやかに物語る、口の旨さに令嬢は心  
動ける状見えつ。「真個かい。」髪結は肚の内、「來たな。」

## 十九

猫 黒  
「髪結さんか。」唯富の市さん、もう來てゐるね、今夜は徒足をさせないから、先へ行つて待つ



ておいで。「そんなら山の祠の前で。」「追附嫁を渡して遣るよ。」

樹立を潜る月影に、陰々たる男女の蔭は、恠てぞ左右に別れたる。婦人は髮結のお島なり。寂  
寞として寢静まれる、上杉の裏門際に、渠は寢音を密めつ、彼方、此方を徘徊し、或は踞ひ、  
或は佇み、物待顔に見えたるが、やがて垣根に身を寄せて、破れし透間の處々、差覗き、内  
の様子を伺ひたる、時正に丑満なり。お小夜は靜に寢返りして、重げなる頭を擡げ、蚊帳の外に  
影暗き燈火の影に透して、唯見れば弟の秀松は、我に枕を並べつ、愛々しき寢顔を仰向けて、  
前後も知らず熟睡せり。

お小夜はこれを見遣りつ、眞白く細き手を翳して、密に寢息を伺ひて、心の内に領きつ、  
枕搔遣り、蒲團を押退け、前袂合はせてするりと起き、弟の寢顔を見返りながら、蚊帳を挑げて  
衝と出でたり。

一室を隔てて隠居所には、母と祖母とが一つ蚊帳に、早夢みつ、あるなるべし。次の室には下  
婢が晝の疲勞に居汚なく、切齒の音聞こえたり。

お小夜は手早く帯引緊め、傍なる床柱に夜半を守る肌の守護を、手に取りて打戴き、轟く胸  
に袴と納めつ、洋燈の心を一際細めて、そとまた蚊帳の裡を覗けば、秀松の他愛もあらで寢ねた  
るにぞ、心易しと動悸を靜めて、縁なる障子に手を懸けぬ。

「はてなあ、もう娘が出さうなもの。」と思はず、咳く女髮結、「何うやら晝間の様子では、思込んだ  
あの口振、伶俐な様でもまだ小兒、如彼に盲人に附絡はれて、食事も細るといふほどなり、あの  
禁厭は最期の良藥、屹度一服吃つとは、この黒い眼で睨んで置いたが、邪魔が入つたか、それと  
もまた眼ざとい隠居に氣を置いてか。」とびつたり寄添ふ小袖垣、身を打凭たして傾きたる、眼前  
に人音、驚くお島、遊び歸か壯者一人、さも怪しげに我顔をぢつと見るにと胸を衝き、ぎよつと  
せしが左あらぬ體、「もし、何時でございませうね。」「あれもう一時。」と、一杵の鐘に耳傾けてお  
小夜嬢さすが心の急がれつ。一足踏出す縁の端、背後にはたりと寢返る音、はツとして引返す、  
蚊帳の内には秀松が、岸破と夜具をぞ踏脱ぎたる。

「秀ちゃん、風邪をひくよ、秀ちゃん、暑いかい。」言葉無し。「よく、寢てるのね。」恠謂ひつ  
つお小夜は秀松の露したる胸に蒲團を着懸けつ、裾をおさへ、肩を叩きて、再び蚊帳を潜出でぬ。  
前刻には心慌てたれば、お小夜は其夜の潛行につきて、豫め用意をなし置くべき、最も必要な  
ることを忘れてたりき。渠は今急に思出でて、影暗き燈火に對し、其手は震ひ、其膝は戦きながら、  
寢亂髪の一筋、二筋、打敷へつ、拔取れり。其數十筋に満てる時、透しては結び、透しては結び、  
最長やかに繋合はせて、四邊を數々見廻しながら、白紙の中に疊み込みて、しかと帯の間に挟み  
つ。蓋しこれ常人の所爲にはあらず、既に既に意識の幾分を缺けるなり。



お小夜は此事をなし果てて、決然として身を起し、此度は躊躇はで縁に出で、豫て心構したりけむ、少しく開懸けたる雨戸の間より、斜めに、其身を抜かむとせり。天地沈々、唯一つ細き蚊の聲す。あゝ、祖母よ、母よ、弟よ、早く悪夢より覺め來らずや、汝が女は今正に悪魔の犠牲にならむとすと、運命の神は囁くなり。

二十

時に老夫人の咳の聲は、期せずして一度令嬢を躊躇せしめたれども遂に何等の効も無く、お小夜は庭を忍び出でたり。

裏木戸を後に見も返らず、家よりは行程凡そ八町餘を隔てたる山の祠に行く間の、路は狭く野は廣し、夏草彌が上に繁茂して地盤に網を織なしたれば、歩行に馴れざる令嬢のともすれば足を取られて躓くこと數々なり。追手の懸る身にはあらず、何後暗きこともあざざれども、人目を忍ぶと謂ふ點の始終心にあることなれば、月影戦ぐ雜草にも、梢を渡る風の聲にも、一方ならず心を置きて、足さへ地に落着かず、うはの空行く其姿は、暗裡何者かの操るありて、渠を導くに髣髴たり。

次第に里を遠ざかれば、犬の聲さへ絶えたるに、別けて人らしき者の此世にあるべき氣勢も見

えず、四顧寂然月沈々、時に塙を驚かされて羽音高く宿鳥の茂林の中に騒ぐのみ、もしそれ平時に於てせむか、深夜の此景を想ふだに、纖弱彼が如き令嬢は猶且つ寒心すべきなり。然るを單身人目を忍びて、今此場合に在るを見ても、お小夜が如何に富の市を忌み且つ恐れしかを推するに餘あらむ。お小夜は少なくとも教育ある婦人なり、教育ある婦人に向ひて、三更無人の境に至り、縁切神の祠に詣でて、鳥居の柱に女の髪十筋繋ぎ合はせたるを結び渡し、其中より切棄つる、これを深祕の咒詛法と謂ふ、お島の放言にも程こそあれ、然るを智識あり思想ある婦人にして爾き迷信に陥りたるは、蓋し富の市の獸慾を滅殺すべき手段に窮せるに因れるならむ。

彼の盲人がすべて此の社會に處する道を棄つる、人形の動くが如く、はた幻影の浮ぶが如く、上杉の家に出入する所爲の如きは、以下か、以上か、何にせよ、既に人類の列外に出でたるものなり。野獸か、淫蛇か、なほ腕力を以て制するを得、人にして然も野獸と淫蛇と其行爲を等しく、精神的に人を殺さむとする者に至りては何とも手の着け様なきをいかにせむ。

母はお小夜のために神明を祈りて惡魔の退散せむことを欲すれども能はず、お小夜が懊惱、不快、嫌惡の念に堪へずして、疾病ある人が藥とだに謂へば其甘酸を擇ばざる如く、お島の勸告に従ひしかば、これを迷信といはばいへ、其の情實に憐むべきなり。

お小夜は殆んど一文字に漠たる廣野を横ぎりて、良半時間の後は山の其祠ある處に達したり。



令嬢は一呼吸つきて不圖後前を胸はせば、月は、いよ／＼白く、森はますます／＼暗く、踏來し道も分かたぬまで野草秀でて荒涼たる、三更寂寞の山中に唯我身ばかりなるを心着きて、思はず身の毛悚立ちつゝ、夜寒の風を肩を抱きて慄然としてイミたる、左手の小笹の戦げる音に、啊呀と見返る眼の前に、青く瘦せたる盲人一個杖に縋りてイメリ、お小夜は一目見て蒼くなりぬ。  
舊來し道へ三反ばかり、すりしか、這ひしか、轉びしか、令嬢は我にもあらで地上にはたと俯伏しながら、動かぬ身體を起さむものと草に縋りてあせりたる、兩手を無手と取扼られ「きやつ」と叫びて振拂ひ、夢中になりて驅出す、帯を捕へて追縋れば、ずるりと解けてひらめく裳、雪の白脛、散る紅、緑の黒髪地に敷きつ、物に躓き倒るゝ處を、取つて押へて猿轡、小腕ひしと捻曲げつゝ、四邊を見廻はす女髮結、其時顔色凄然たりし、お小夜の耳に口をつけて、力を籠めたる聲細く、「お嬢様、堪忍なさいよ。」

二十一

叫ばむとする其口は布以て固く壓せられ、支へむとする其腕は紐もて厳く縛められ、身動せむもならざるに、胸中無量の煩悶は波打つ胸に露れて、取亂したるお小夜の姿、死なで足許に横はれるを、お島は冷かに瞰下しつゝ、「富の市さん、おい、もう可から出て來なよ。」「應」と答へて

富の市はひよろ／＼と歩み來りて、お島の傍に立停まれり。「む、もうちやんと好くして置いたよ。それ。」と富の市を押遣れば、懷疑深きは盲人の癖、とかうして其犠牲の違はざるかを試みつ、確かに其と打領き、「お、お島さん。」「何うだい、違ひはあるまいね。」「唯もう全然お嬢様で、もうこれぢや。」と地に平伏し、お島をぢつと伏拜み、「難有うござりまする、難有うござりまする。」と呼吸も忙しく喘ぎたり。

爾時お島は言葉を改め、「でね、お前、約束だ、あの件は忘れまいね。」お島の言は嚴かなりき。富の市は謂ふにや及ぶと、眉宇に冷かなる笑を帯び、「え、御念には及びません。あれを見て下されまし。」と指さしたる傍に、一本立てる松の樹の西へさしたる枝よりして一條の繩のわがねたるが蛇の懸れる如し。お島は見るより莞爾とし、「い、覺悟だ。」富の市は得色あり。「何の、脱落があるものか。山だからお前さん首を縊ることにはいたしました。」といふ聲常を失はざりき。髮結は身を起して、「ぢやあもう手放しにして渡してやらう。」と一間ばかり身を退さりぬ。盲人は美人に膝行寄り「もしお嬢様、御堪忍下さいまし。貴女は嘸まあ何様にか、私がお嫌でございませう。蛇より蝮より、毛蟲より、一層お嫌でございませう。それはもう私が眼が見えませぬでもよく存じて居りまする。お氣の毒で、お可哀さうで、おいとしくてなりませぬが、何うぞ斷念める譯には參りませぬ。恐しい夢を見たと思召して下さいまし、もう／＼直ぐ此場で私が申譯に死すか



ら、後で少しも執念は残しませぬ。目出たう成佛をいたします。いやしかし天罰で、畜生道へ落ちて何様苦難を受けませうやら、未來が思遣られます。何の未來は扱置いて、此世から私は早人間ではござりませぬ。さもし畜生でござります。はい、畜生でも地獄の責苦でも、此、此、此胸の苦しさにくらべものになりませぬ。」と富の市は両手以て、肋骨の高く秀でたる、蒼黒き胸を搔開けて、お小夜の顔に差しぬ。お小夜の身體はびくりと躍りて、千筋の黒髪皆動けり。然もあらむ未だ瞑したるにあらざれば。人は來りて渠等を處せよ、獸は出でて、渠等を食へよ。然れどもお島に成算ありて、社會が容れざる罪を犯すに、最も便利に安全なる、天の時と地の利を擇びつ。お小夜は遂に救はれざるべきか。遙かに眺めて雲かと思ゆる、一團の森の茂れる處、お小夜が家の邊にて、鴉の鳴く聲頻なり。蓋しこれ惡魔が得意の時。

二十二

毒蛇あり、月下叢に玉を絡ひて紅舌忽ち一閃し、露將に落ちむす時、お島は急に呼ばはりたり。「お待ち！」「え、。」と富の市は振仰ぐ、其時の其顔には、さすがの髪結も寒さを感じぬ。胸を抱きて一足進み、「一寸、お待ち、餘り何だから其猿轡だけ取らうぢや無いか。」富の市は慌てし狀にて、「而して……」と危む色あり。「否ね、お嬢様もとても生きちやあ居まいから、こゝで遺言を聞

かうと思つて。」

謂ひつ、お島は猶豫はで、お小夜の口を結びたる、手拭を解かむとせり。富の市は其手を押へて、「人を呼ぶ、人を呼ぶ。」髪結は冷笑ひ、「何の、お前、キヤツといつたつて可愛い聲だもの、誰が聞く奴があるもんか、八町四方聞こえた處で、もう彼は一番鶏だよ。其様な心配をおしでない。」「でも、其は。……」となほ氣遣ふ。髪結は一聲強く、「はてお島が後見たわな。」富の市は口をつぐめり。

お島は手早く手拭を取棄てつ。月に透してちつと見る。お小夜は眼を眠りたり。無念の涙臉に溢れて、睫に露を宿しつ、凄然として蒼白き、頬を掠むる後髪ははらくと草に亂れ散きぬ。新月の眉稍擡みて、固く口を結びたる、唇の色あせたりき。

「おや！」お島は思はず驚きて、胸に手を載せ試むれば、呼吸は絶えしにあらざりけり。悪汗膚を沾ほして衣は水を浴びたる如く、胸は夜露に冷かなり。

「お嬢様々々。」とお島は一聲呼びたるが、お小夜の寂として音無ければ、再び耳朶に口を寄せて、「もし、お小夜様、お嬢様。」呼べば纔に頷きぬ。

猫 黒  
「堪忍して下さいよ。私は大變なことをしたんです。もう此様亂暴なことをしますからには、其だけの覺悟はしてをりますから、別に申譯はいたしません。何ぞおつしやることでもございます



なら、承つて置きませう。富の市も直後で死んで申譯をしますさうで、萬事お察し下さいまし。私もまた屹と申譯をいたします。ね、分りましたか。お嬢様、もし、お小夜様、あれまた。」

昏々としてまた永き眠に陥らむとする、お小夜の肩を揺動かし、「これ、お嬢様、もう、しつかりなさいまし。よう。」と心臓を貫く聲。令嬢は再び徐ろに頷きぬ。「可うござんすか、え、さあ、何ぞおつしやる事がございますなら、お島が屹と聞きませう。」とどつと其顔を瞻れるが、風にも堪へざる手弱女の手さへ足さへ縛られたるに、一方ならず激昂したれば、何か謂はむと欲する風情に、唇のみは震はせども、ものいふ聲も出でざるにぞ、お島は太く困じたるが、傍に喘ぐ盲人に向ひて、「富の市さん、一寸、お待ちよ。私が可と許すまではねお嬢様に指一本でも指すと肯かないよ。」盲人は濁れる聲を絞めて、「唯。」「可いかい、屹とだよ。」と念を推して、お島は一散に馳行きつ。

とばかりありて歸り來れり。お島は手にせる手拭に清水を浸し來りしなるを、お小夜の口に絞り込み、肩を腕に搔抱きて、二三度上下に動かした。がつくりといふ音聞こえて、咽喉に通ると覺しきに、力を籠めて名を呼ば、「あ。」と幽に應じたる、お小夜は無事を恢復せり。

髮結は力を得て、「お嬢様お氣が着きましたか。」お小夜は細く眼を睜き、木の根に我を縛したるまゝ、半身を膝に抱起したるお島の顔を瞻りつ、犬の如くに蹲ひたる富の市の賤むべき面を見

つ。更に皆をお島に返して、「繩をお解き。」音調の深刻なるに、お島は思はず恐れ入り、「はい。」「さあ、繩をお解き。」でも、貴女。」否、盲人のいふことを肯くからさあ。」其顔白く、月蒼し。

二十三

眼に渠を見ることだに、恐怖の念に堪へずして、毎に殆んど絶せむばかり忌嫌へる富の市に身を任せむと謂出でたる、令嬢の言には、お島も驚駭に打たれたり。髮結は唯茫然として、多時お小夜を瞻りぬ。

時に再び口を開ける、令嬢の聲は凜として、「よう、繩をお解きつてば、遁げられないのは知つて居るから、屹と世話は焼かせないよ。」お島は其辭色の決したるを視て頷けり。「唯、其では此様な厭氣なものももう打棄つてしまひませう。」と直ちに縛を解懸れるに、傍聞せる富の市は内心頗る穩ならず、「これ、其様いふ事をして何する氣ぢや、私は眼が見えぬぞ、これ、而して腕力も何にも無いで、お嬢様にだつて力盡では合はない。突飛されりや其までぢや、後前不見をしてくれるな。」と言忙しく氣を急りてお島の袂を曳動かす。髮結は其手を拂ひて、「何だね、意氣地の無い。任せたもんだ、黙つておいでよ。私が胸にあるからさ。」と快くお小夜の禁縛を解放せり。令嬢は喰入りたる繩の痕の疼痛を忍びつ、「富の市さん。」盲人は前に擦出でて、「唯。」と地上に



蹲まりぬ。

お小夜は襟を正くし、「私はね、何ういふものか始めからお前の顔を見る毎に、ぞつとして、慄毛が立つて、始終夢を見ちやあ魔されて、思出すと身震がする位だつたよ。」富の市は肩をすぼめて小さくなり、「唯、唯、おつしやります通り、私もはや定めし左様でござりませうと存じて居ります。」それだから、お前の心も知らないでは無かつたが、何うしても快く會つて談話をすることも嫌だつた。そりや私のやうな者を、あれほどまでに思つておくれたもの、憎いとは思ひません。同一ことなら私の方からお前を思ふやうにしたいと、何度思つたか知れないけれど、大方向が合はないとでもいふのであらうか、到頭斯様ことになつてしまつて、お前はかりか、お島までを大變な罪人にしなけりやなりません。聞きや、お前も後で死ぬさうだが、實に私は可哀相だよ。」謂ふ言毎に富の市はがつくりと頷きけるが、堪らず涙を流しつ、「唯、恐入りましたござります、其お志で満足をいたしたうござりまするが、何うも辛抱がなりませぬ。猫とも犬とも思召して、御了簡下されまし。これまでになりませぬ先に何の位思切らうと存じましたかも知れませぬど、何うしても斷念することが出来ませなんだ。」と啜泣して身を震はせ、「私も、私も、我身ながら愛想が盡きました。因業な者でござります、因業でござります。」

お小夜は恰もこれを慰むるものの如く、「可よ、身體だけお前に上げるよ、自由になつて上げう

からお前勝手にするが可、しかしね、私も口惜いし、恥かしいし、二度と人に顔は合はされなから、もう覺悟はして居るの。」と愁然として俯向きたる、お小夜の心中を推すれば、痛苦いばかりのものならむ。遁ぐればこそ追ひもすれ、走るものこそ捕へもせめ、今愆く身體を投出して、自から組に上りたる犠牲の殊勝なる、ことの意外に出でたるに、お島は慚悔措く能はず、傍より口を挟みて、「お嬢様もう何にも申されません。富の市さん、私は此處にや居られないから一足前へ死に行くよ。お嬢様も如彼におつしやるから、遁げも走りもなざるまい。後見はいるまいから、宵の口としてお開きにするよ。」と後退りに二足三足、衝と身を起こして走らむとするをお小夜は顧みて、「お待よ。」「唯。」とお島は立停まる。

令嬢は言葉靜に、「これ、お前が行つちやあ不可いよ、もう縛られちやあ居ないから、お前さへ居なけりや、私は死ぬまで抵抗するよ、さうでないよ、遁げる道があるものを富の市に身を任しちやあ、おつかさんに濟みませんと思ひます。」

二十四

お島は止むを得ず引返して、令嬢の背後に來り、それぢやあ何處へも参りません。今貴女に抵抗されて、富の市の願が合はないやうだと、約束が反古になりますから仕方がない、此處に附い



て居て、彼が思を果させませう。私も貴女が左様いふお志だと知つて居りや、斯様ことにはしませなんだものを。今謂つたつてはじまらない、ぢやあ富の市さん。「おい。」と富の市の立懸るを、お小夜はしばしと搔拂ひて、「お待ち、一寸謂つて置きたいことがある、お島や。」と見返れば髪結は其背を撫でながら、「はい、何でも承りませう。而して身に合ひますことならば、其をいたすまで死にますまい。」「それぢやいふがね、あの聞いておくれ。」と謂ひつゝも蒼然たる兩の頬に、少しく紅を潮したり、「今まで誰にも謂はなかつた、恥かしいが私はあの心に思つてる方があるんだよ。」髪結は擦寄りぬ。盲人は顔の色を變へつ。

令嬢は決心したる罪人が佛に懺悔をなすが如く、敢て憚る色あらで、「もう、私もこゝで命が無いものだから、謂はないでしまつては、何時が世になつたつても、其方は、汲知つては下さるまいから、一生の思出に、こんな可哀相なものがあつたと、お島や、お前の口から言傳へておくれでないか。」と語り終りて聲を飲む。髪結は太くために動かされつ。「あら、まあ、そりや何うもお察し申さなけりやなりません。實を申せば、私も何處かの人を生命懸けて思込んだんでございませうが、お聞遊ばせ、其人がね、ひどく私を振付けました。唯、それですから私も世の中が厭になつて、生効もないと落膽しました矢先、あの富の市が貴女のことを私に頼んだので、あゝ、矢張り私と同一境遇貴女を思つて其戀が遂げられない、其切なさは何様であらうと、同一思に引較べて、

何うせ私も死たい身體、此廣い世界にも富の市が貴女を思ふのと、私が或人を思ふほど、強いものはあるまいから、私が合はないかはりに、せめて同情の人にでも、其望が遂げさしたいと、かう思つてしたこと、可かい、富の市さん、お前に私や思もなし、金でもなしに、かういふ惡黨になつたのも、明かしていへば左様いふ譯、お嬢様もお聞下さい。全然其に違ひはないので。其を今お聞き申せば、貴女も私達と同一様に、誰かを慕つていらつしやるとね、眞實お察し申します。いゝ、加減に私もこゝらで善心に立返つて、貴嬢をお助け申したいが、それぢやあの富の市に濟みませんから、彼が貴女を思切らない内は、何うしてもお遁し申されない、それがまた御存じの通りの執心で、とても斷念るんぢやあござんせぬ。天地がひつくり返らないうちは所詮駄目ですから、貴女も覺悟をなさるが可。しかし其貴女の戀つていらつしやるのは、何處の誰方でございます。貴女ほどのお方に思はれて、今まで打棄つて置いて、そんなに苦勞をおさせ申したのは、ま、何といふ罪造りだらう。憎らしうございますよ。おつしやい。私が承つて置いて、其男の胸盡を取つて思ふさま苛めた上で、一生男寡で立てて貴女のお墓へ香花を手向けるやうにいつて遣ります。もしも肯かなけりや私も何の道死次手、其男を突殺して、冥土へ連れて參つて貴女にお渡し申ませう。さあ、お嬢様、誰だか聞かして下さいな。」と人事とは思はれざるまで、熱し詰めて拳を握れる、髪結の志に、お小夜は生死一髪の間にも、淋しき微笑を含みつゝ、「飛だ



ことをおいひだね、そんなこと、しようたつて出来るわけぢやないけれど、そんなに身を入れて背いておくれなら、私も嬉しいねえ。他の方ぢやあないの、お前は知つて居まいけれど、二上さんと謂ふ。「え。」あのね、秋山さんといふ畫工なの。」

お島は聞くより倒れむとせり。いかなればよ、蒼くなりぬ。活きたるものとは思はれざるまで。

二十五

お小夜が最後に打明かしたる戀人の名の二上秋山を聞くよりも、お島は愕然と色を變へて、ものをも謂はず、身も動かさず、胸に手先を差入れつゝ、良少時亂雑なる萬感の胸を衝く疼痛を押へたるが何思ひけむ決然として、令嬢に打向ひ、「お嬢様唯今其を承つて少しく思はくがござんすから、まあ落着いてもう少し此處におつとして居て下さいよ、何様なことがございまして、喫驚なすつちやあ不可せん。お騒ぎ遊ばしちやあ不可せんよ。可うござんすか。」と物あり氣なり。令嬢は悪怯れず、「可よ、どうせ私はあの助らない覺悟だもの、何處へも行きやいたさないよ。」お島は下への端を手繰りて、しつかりと腹を緊め、相對せるお小夜を隔てて富の市との中を遮り、「富の市さん、ちと唐突のお願だがね、頼みだ、お嬢様を思切つておくれでないか。」言の餘りに意外なるに、富の市は吾が聞耳を怪みて、「え、何ぢやと、お島さん。」「い、えさ、お嬢様を、お

小夜様を、お前、思切つておくれと謂ふのさ。」

随かに其聞誤りにあらざりしを、自から確めたる富の市は呆果てたる顔色にて、「お前さん、今になつて、そりや何、何を謂ふのだ。」「さあ、今になつて謂ふのだから、私がお前に頼むんだよ。ね、私がお前に頼むんだ。人に頼まれたことがあつても、頼んだことは根からねえ、私がお前を頼んでお願ひだ、何うぞ、ま、謂ふことを背いておくれ。これ後生だよ。」

富の市は何がなしに頭を掉りて、「嫌でござります。」「唯さ、そりや嫌なのは知つてるがね。實はそれ前刻もお前に謂つた通りもとく、私が大それたお前の頼を背いたといふのも、ね、もう斯うなつたら何も彼も明かしてしまふが、私や秋山といふ畫工に惚れてね、可かい。そりや随分苦勞もしたさ。すると其畫工がいふには（吾は外に思つてる婦人があつて、其を思切ることが出来ないからお前は女房に出来ない。）と斯ういつて私を振つたわね。さて其婦人は誰だといふと、餘の人ぢやあない、お小夜さんだ。私も餘り口惜いから、斯ういつちやあ江戸ツ子の名折れだがね、戀の道にや愚痴にもなるさ、嫉い！と思つて居た處へ、丁度持込んだお前の頼、一層のことやつつけて、私も死なうと自棄になつて、斯様いふことにしツちやつたが、今お嬢様の遺言を聞いて見ると、矢張り私と同一様に、畫工に戀をしていらつしやるので。私は別に人の様に急に善心に立返つたといふでも無いが、何だかお嬢様が可哀相になつて來たよ。何故だといふのに、ま、お



前も考へて見ておくれ。私のやうなお轉婆は、此方から推懸けて、惚れた男に談話もしたりさ、人に聞かして惚氣もしたり、ま、くだらないこつても散々嬉しい思ひをしたしさ。お前だつて、そりや嫌はれてるのは承知の上でも、づう／＼しくお嬢様をつかまへて、猫になり度と謂つたこともあるだらう。私もそれ豫て澤山惚氣を受けて、受け賃なしに聞かされてらあね、そこへ懸けちやあ可哀相なはお嬢様だ。胸の裂けるほど思つて居ても、御身分が御身分だし、内氣で優順いと來て居るから、人に向つて謂へやせず、男に言葉を交はしたこともないのだらう。其切なさにかて、加へて、朝から晩まで夢にまで、お前に苛められ通しぢやあ無いか。ほんとにこりや瘦せてしまふね。其上お前、蚤にも喰はさない、かよい身體を、今夜のやうな目に逢はされちやあ、生命も縮まつただらうぢやないかね。私の胸に引較べて、お嬢様の心を察すると、私やもう堪らないよ、これが何もお嬢様が他の男に惚れてるなら、私は些少も構はないが、私が惚れてると同一男だもの、まあ何の位切ないかは、私に推量が出来ようぢやないか。え、富の市さん、お前も些少あ察しておくれ。」と次第に聲をうるませたり。

二十六

お島は切なる胸を撫でつゝ、「ね、富の市さん、今いふやうな次第だから、お嬢様は立瀬がない

わね。其上まだお前にひどいことさしちやあ天道様も餘りだから其お心で、私にこんなことを謂はせるやうになすつたんだらうと思ふよ。お前も私が約束を變へたと思つては、嘸まあ不足ではあらうけれど、神や佛の思召しだと我慢しておくれなね、富の市さん後生だよ、よ、よ。」と涙に曇れる眼を拭ひて、唯見れば富の市は彼方向きて、聞かむともせで嘯けり。

お島は其肩に手を懸けて、「まあ、さうしたものであるまいわね。お前は盲目だし、力はなし、此ま、お嬢様の手を曳いて、私が此處を遁げちまへば、それつきりのことぢやあ無いか。わけもないことだけれど、一旦約束をしたものを、さうしちやあお氣が濟まないから、事を分けて頼むんだ、何卒、これを簡しておくれ、後生だつてば、拜まぬばかりにしてるぢやないか。」と心を籠めたる聲震へり。

富の市は冷かに傍なる枝に垂しある、彼の繩を指さして頭を左右に打掉れり。お島はハツと胸を打ち、「む、そりやさうでもあらうけれど、皮肉なことを謂はないでさ。」富の市は冷然として、「聞耳は持ちませぬ。」と取附島はあらざりき。

お島は屹と打案じ、「無理ではないさ、お前の心は知つてるから、無理とは思やあしないけれど、何うしても可哀相で、お嬢様は遣られないよ。ね、後で、ゆつくり相談もしようから、まあ今夜の事はこれまでにしといておくれよ。」富の市は傲然として、「何と謂つても駄目でございます。」



いかんしても動かすべきやうなきに、お島は齒切をして身を震はし、「え、何うせうねえ、何うせうねえ。飛だことをしちまつた。む、そんならお前、私が、手、手を附いて頼むから、お前、不足ではあらうけれど、私を女房にしておくれ。私がお前の内儀さんになつて、一生實を盡して遣らう、夫にして大切にしておけるから、不足はあらうけれど、其で我慢をおしでないか。」と固く富の市の手を取りて、誓ふが如く謂出したる、我を身代の窮の極、お島は血を吐く思なり。富の市は冷笑ひて、「嫌だ。」とばかり冷かなりき。

お島は失望の身をあせりて、「そりや、お前、餘りだ、餘りお前因業だ。」富の市は聲太く「應、私は因業だ。」と再び傲然として冷笑へり。

お島の顔は蒼くなりぬ。「それぢや私が此處で死で、お前に約束を變更する、其言譯をしようから。」富の市は鼻ではじき、「お島さん、何といつても駄目なんだ。私は何うしても思ひ切れない、譬ひ死でも斷念ない、もう何にも謂うてくれるな、聞かぬ！」と兩手に耳を塞ぎぬ。

お島はこゝに於て術盡きたり。満腔の意氣を聲に籠めて「富の市さん、ぢやあ何うしても背かないね。」其肩を扼りぬ。右手に觸るゝは懷裡の剃刀。富の市は死力を出してお島の手を搔拂ひ、「え、！面倒な。」と衝と立ちてお小夜に飛附かむとしたりしトタン、枯木の如く僵れたり。

「あれえ！」と戦く令嬢を、お島は馳寄りて左手に抱き、

「もう、心配を遊ばすな。ちつとも早く歸りませう。」と扶起して一足、二足、歩出でたる背後の方に、「おのれ！」と凄く唸る聲、二人の思はず見返る時、ひよろ／＼と起返れる、富の市の胸よりして、血はたら／＼と流れたり。打視遣りつゝ、物凄き微笑を含みて、鮮血に染める剃刀を紙に拭ひて懐中せる、お島は渠を刺したるなりけり。

富の市は血聲を絞りて、「猫になるからさう思へ。」と唸くが如く叫ぶとともに、ばつたり地上に僵れたり。

恰も此時、麓の方に鱗々と、引來りたる腕車一輛、ばつたりと桿棒下ろして、「小俊様。」「あい、鐵どん御苦勞だつた。」と暗香一脈、袂を捌きて、軽く地上に下立つ婦人。「遺書を見て驅着けたが、手後になりやしなにか不知。」と山を望みて打仰ぐ、殘月高し、杜鵑一聲。

二十七

猫 黒 「誰だ、く。」私だよ、秋さん、一寸開けておくれ。私だよ。秋山は聞覚えある聲なれば、枕頭なる早附木を擦りて、二分心の洋燈を點け、「開けて見な、鍵は懸けちやあ置かない筈だ。」「おや、さう。」とまた二三度がた／＼と押せば開くに、「餘り盗人を馬鹿にするね。」と敷居を跨ぎて背後を顧み、「お嬢様、さあ此方へお入りなさいまし。」「否、私は……。」と口籠りて、逡巡する婦



人の氣勢。秋山は心着き、「誰ぞお連があるんかい。」

「何ね、一寸その。」と事も無げに答へつ、「可うござんすよ、お入り遊ばせ、あら何のまあ。」と戸外に出で、引張る様に手を取りて、矢庭に連込む、婦人の顔、端無く畫工と面を合はせぬ。意中の人と、意中の人、お小夜は消えも入りたき風情、畫師は俯向きて無言なり。

お島は無頓着に室に通りにて「あのね、秋さん、寝てる處へ推懸けて、恐入るが、お座敷を一寸借りるよ。物好だつちやあない、お嬢様を無理に誘つて朝顔を見に行かうとつて、此様に早く出て来たの、廢止ば可のにさ。するとお前さん、路で悪漢に巫山戯られて、私もお嬢様も此體だ。やうく切抜けて遁げて来たがね、私や可けれど斯う髪が破れちやあ、お人柄なお嬢様が何處へも行かれやしないから、段々明るくはなつて来るし、人に見られると魅まれた様で極が悪いから、此處で束ねて上げようと思つて、お連れ申したんだよ。」

事態を秋山に欺き告げて、お島は殆んど茫然として、我がなすまゝに身を任かせたる、お小夜の髪を結始めぬ。髮結ふ狀の平然たる、恰も人殺をなしたることを、忘れしもの如くなりき。恚て氣を籠め、手を盡して、我が心に満足するまで、多くの時間を費しつゝ、遂に一個の鬘を造れり。

結上げたる髪の出來に、お島は殆んど見惚れつゝも、傍なる秋山を盗み見て、何思ひけむほろり

とせしが、氣を取直すと思しめて、切なき笑顔を装ひつ。前刻に山にて奪ひたれば、裳長く取亂せる、お小夜に下締を解與へて、後に廻り、前に立ちて、其身態を繕はせつ。

然りし後秋山に、盲人のこと、山のこと、お小夜のこと、吾がこと、前刻に山にて演じたる、活劇の一切を、渠が愕然とし、啞然とし、はた悚然としたる間に、言急に要を摘みて、順序を亂さず物語りぬ。秋山は餘のことにいふべき言を發見し得ず、穩ならざる顔色にて、お島の面を瞻るのみ。

お島は少しも騒ぐ色なく、「でもね、後で誰にも迷惑を懸けないやうにしてあるから、些少も心配をおしでないよ。お嬢様一寸これを。」と傍に有合ふ鏡を取りて、令嬢の手に渡せり。お小夜は何心なく不圖見れば、こはいかに丸鬘なりき。「あれ。」とお小夜の面を蔽ふを、お島は快よげに打視遣りて、「惜いねえ。秋さん、疎末におしだと罰があたるよ。もし、お嬢様、それで何卒堪忍して下さいまし。秋さん可愛がつてあげておくれ。如彼に瘦せなすつたわね。可いかい屹とだよ。」と謂ひもあへず、懷裡の剃刀取る手も見せで、岸破と咽喉に突立てたり。

啊呀と驚く、秋山、お小夜、前後を忘れて左右より、犇と抱きて取纏れる、二人の手と手とを我手にて、お島は互に握らせつゝ、二人の顔をぢつと見詰めて、痛手に屈せぬ聲清しく、「浮氣をすると肯かないよ！」爾くお島に宣告されたる、新夫婦は、手負に縋りて、死したる如き顔を見



合はせ、途方に暮れて茫然たる、戸外に婀娜な婦人の聲あり、「御免下さい。」

二十八

「お初にお目に懸ります。唐突に伺つて失禮でございますが、私は小俊といつてお島の義姉、お憂慮には及びません。まあ後でゆつくりお談申しませう。」と行儀正しく挨拶して、血に驚かぬ江戸子氣象、慌てず更に騒げる色なく、お島の背を搔抱きて、「島ちゃん、私だよ。眼が見えないかい、私だよ。」と眞實籠れる聲聞附け、幽に兩眼を睜きて、落入る如く頷けり。小俊は耳に口を吻け、「あのね、お前の遺書を見たからね、まだ了簡が若いやうだ、出来たら意見をしようと思つて、驅附けたがもう晩かつたよ。山には富の市の死骸ばかりさ。で、つつきり此家と目星を着けて、引返して来て門口でね、様子は残らず聞いて居たよ。何やら舞臺が變つたやうだが、よくお前、お嬢様をお助けた、それでこそ島ちゃんだよ。可よ、後は私が引受けて、お二人の縁を結ばせて、めでたうにしようから、何にもお案じぢやあないよ。可かい、分つたかい。」お島は瞬もせで仰様に小俊の腕に凭たれながら其顔を凝視めたるまゝ、固く握れる剃刀をはたと落して、胸の邊に掌を組合はせつ。鮮血颯と迸りぬ。

小俊は手早く下を引出して、お島の疵口を結びつ、顧みて秋山の膝に泣伏したる、お小夜

の背を片手以て靜かに撫擦り、「お、上手に出来ました。可愛らしい丸髷だこと。島ちゃん、お前の一世一代の髪だ。感心に旨いのね。よく結つておあげだつた。惚々するよ。旨く結へたよ、もし。」と秋山に打向ひ、「貴下も、お島の心を汲んで、彼が一代の志、氣を入れて結つて上げた髪ですから、此後何んことがあらうとも、お嬢様の丸髷を結替へないやうに願ひます。可うござんすか。」と凛として面を正せる小俊が一言、胸に徹りて秋山は、お小夜の肩に手を加へ、ものをも言はで俯向きぬ。小俊は見つ、打領き、「島ちゃん、これで心残りはあるまいね、ね、心残りはあるまいね。」と、眼を瞑りて、空を仰ぎ、涙を齒にて嚙留めつ、凛々しき眉根擡みける。

時に唇を戦かせる、お島は殆んど蟲の呼吸にて、「姉様。」と呼びたるが、絲より細く聞こえたり。小俊は心を取直し、笑顏をお島に振向けて、「唯、何だい。え、え、心残りがあるか？ なむ、秋山に死水を取つて貰ひたいのだらう。何の未練らしい。」とくひしばる。お島は形ばかり頭を掉れり。

小俊は敏くも心を得て、「ぢやあ何が心残りなんだい、さあ私にお肯かせよ、よ、島ちゃん。」と小俊は吾が妹を愛憐の情に堪へざるものの如く、お島が冷たき左の頬に暖かなる頬を差寄せたる鬢の後毛はらくとお島の額を掠めけるを、手負は色褪せたる唇に力なく啣へつ、最後の聲の幽にも、「姉様、姉様。」「あいよ。」「髪が壞れたねえ。も、も一度結つて上げたいけれど、え、じれつたい！」と合掌せる手の強ばりて動かざるにぞ、氣を苛ちたる氣丈の婦人、血はまた颯と流



れつ、がつくり弱るありさまに、小俊も今は堪りかねて、犇とお島に抱着き、「え、人様の手前につけ、やうく堪へて居るものを、そ、そんな事を謂つてお泣かせだ。島ちゃん、私はね、一生もう髪は結はないよ。束髪で暮すから、心配しておくれでない。」謂ひたる時は早く既にお島の膚冷渡れり。小俊は心を取直し、「ぢやあまあ、ともかくも一旦内へ歸らうね島ちゃん、さあお立ち。」と恰も生きたる者にもいふが如く、死骸を抱へて立上れば、名残を惜まむ、惜ませて。と取着くお小夜と、秋山を、小俊は故と押隔て、「御推量は申して居ります。また出直して参つた上で、よいやうにいたしませう。私に任かせてお置きなさい。」と謂ひつゝ、戸外の車夫を呼び、「鐵どん、島ちゃんを乗せて行くんだ。そしてね、病人だから、母衣を下すんだよ。」

二十九

ために身の瘦の見ゆるまで執念くも附纏ひて懊惱不快限無かりし富の市は、任俠なるお島の手に殺されつ。お島はまた一切の葛藤と紛紜とを双の肩に荷ひて逝けり。

小俊はまた意地に強く、涙に弱き、所謂苦勞人なるものにして思ひ遣さへ深ければ、萬事を引受け周旋して、容易くお小夜と秋山との戀より成れる縁を結ばせ、母にも祖母にも異議なからしめて、今は唯良辰を待つばかりとなしつ。お小夜は心の闇より出でて麗はしき天日を見るべくならぬ。

りぬ。

唯懸念なるは一個黒猫のあるのみなり。母が魅せられはせずと危ぶむまで寵愛したりし黒猫をお小夜が俄に忌嫌ふやうになりたるは、山にて富の市が最後の時、「猫になるから左様思へ。」と怨毒極無き鬼語を發したるをお小夜が耳にせし以來なり。

富の市が口癖の如く成りたりし謂へりしは、常にお小夜の膝にある、此黒猫に他ならず。然も執念深きこと渠が如き富の市が、死して猫にならむと識したる、盲人の言を腦に印し肝に刻むまで恐ろしと聞きて遂に忘るゝ能はざる令嬢は、いかにして膝下の黒猫を視る毎に一片の懸念なかるべき。

要意の周到なる小俊が、無言にて家出したるまゝ、人の娘の身の一夜を他に明したるお小夜の心苦しさを推して自ら母の許に送り届け、即座に始終を打明かして直ちに萬事を取絡め仔細なくして歸りし後、お小夜は我を慕ひて裾に袖に絡はり着く黒猫を拂ひ退けて衝と身を彼方に避けたるぞ、令嬢が猫に對する悪感情を、人に言露はしたる最初なりき。

爾來日を経るに従ひて黒猫と令嬢との間は次第々々に隔り行けり。母も太く怪しみぬ。秀松も怪しみぬ。

食事に或は物語に一家一室に談笑する折の如きも猫ののそくと入來ることあれば、「あれ」と



お小夜は座を起ちて人無き處に避くるなり。然る時は猫もまたさも怨めしげに令嬢の起行く後を視遣りつゝ、大なる身體を持餘すが如き風情にのさり〜と追行くなり。

今までは同一器の食物をさへ別ちたるに、俄に彼を忌嫌ひて敷物をだに同一せざるお小夜の冷かさを怨むにや、黒猫は母夫人或はお三の手になりたる餌を食はず、牛乳を飲まず、一粒一飲の食をも口にせずして、餓ゆれば山を獵り鼠に求めて、蛙とも謂はず、蚯蚓とも謂はず、見るもいぶせき蟲どもを啣へ來りて、床の間、座敷、蒲團の上、所嫌はず、嚙散らし、食荒して、更に憚る色見えず。其状恰も令嬢が手づから彼に食物を調へざる其ツラアテになすものの如くなるに、畜生とは謂へ、憎むべきフテやうかなと、果は上杉の一家を舉りて彼の黒猫を顧る者だにあらずなりぬ。黒猫は次第に厭ふべきものとなりて誰一人言葉を懸くる者さへ無きに、唯のそり〜と室の内を徘徊し人を見る毎に一種陰險なる眼を輝かしてさも輕蔑したらむ如く睨みつゝ、追へば急には立去らで彼の恐るべき毗を返しつゝ、じろりと見てはした〜と歩行出しつ。殺すにも殺されず、追へども去らぬを持餘しき。一日黄昏のことなりしが奥の方に異様な物音するに、母親の驅行きて、唯見れば彼の黒猫の箆笥より二三種の衣類を取出して、喰裂き、搔破り、踏蹂りて、玉に取りつゝあるなりけり。

三十

今黒猫が裂破りたるは、紅の下着、白小袖、お小夜が婚姻の支度にとて此頃特に新調したる三枚重の曠着なりき。縁には時ならぬ紅梅散りて噓碎きたる衣の切は庭に散れて薫りたり。座敷の内には雪なす白無垢、袖断れ、裳綻び、綿をも長く掴み出して、落花狼藉、雪紛々、唯焼染めたる蘭香の一室を籠めて馥郁たる、思懸けなき出來事に、母は啊呀と打驚き、壘を荒く踏鳴らして、叱！叱！と追立つれど、纖弱き女性と見落しけむ、黒猫は唯頭を廻らし、じろりと流眊に懸けたるのみ、敢て驚ろく色もなく、然もなまけたる音調以て、蔑する如くに一聲鳴き、悠々と尾を曳きて、徐かに縁側に歩み行く、人も無げなる振舞に、母は有合ふ物指を手に提げて「おのれ。」とばかり二足三足追懸くれば、また横顔を斜めに見せて、片眼をギロリと輝かせる、黒猫の見脈に、黄昏時なり薄闇ければ、母は思はず悚然として、其ま、其處に立寄りぬ。

怒りしことを見聞せるお小夜は身を縮め膚を寒くし、今は黒猫を忌嫌ふよりも寧ろ恐るゝ様にはなりぬ。特に最も憚るべきは、お小夜が厠に通ふ毎に、必ず黒猫の附隨ひて用の果つるを待つこと是なり。尤も此頃には別に飼猫と謂ふにもあらず、また餌を與へて飼へばとて猫はこれを食ふにあらず、前段既に説けるが如く、蚯蚓なり、蛙なり、蝨なり、油蟲なり、隨處自から

黒猫



求め來りて、餓を凌ぐといふ様なれば、朝出でては正午歸り、夕に出でては夜半に入り、何時と極まれることあらで、出沒測り難けれども、唯令嬢が恐るゝ厠に通ふことある毎に、何處とも無く歸り來りて厠の周圍を覗ふなり。

然ればお小夜が何時にても小用を達に行く毎に、母なり下婢なり弟なり、附隨ふを常とせしが、一夜、夕立ありし後なりき。時は丑滿と覺しきに涼氣恰も秋の如く、手足頻に冷かなるに、お小夜は例になく小用を催し、堪難くなりけるが、見れば弟は熟睡せり、晝の疲勞を察するにぞ下婢を驚かさむも不便なれば、無理に唯一人手燭して縁のはづれに、庭に面せる厠にこそは到りけれ。星一個見え、二個見え、颯と吹込む風恐ろしく、手以て小窓を引閉てつ、身を窘めたる折こそあれ、厠の外なる叢をのうと踏來る音聞こえつ。ざわ／＼と木の葉搖ぎて、葉末の雫雨の如く。お小夜は慄と襟許より氷を浴びたる心地して、齒の音も合はで戦きつ、急ぎ開けむと手を懸けたる、トタンにとんと何物か戸に打附かる音凄まじきに、「あれ」と身を退き耳を澄ませば、ぎしぎしと爪を研ぐ音。

心地死ぬべく恐ろしけれど、幼なく聲を揚げて救も呼び得ず、胸搔合はせ膝を合はせて石の如くに身を堅め、消なば消えよと念する折から、何時の間に廻りけむ、足音は最初聞こえし叢にまた響くと覺えし、岸破と小窓の障子をはづして電火飛入る黒礎あり。

同時にお小夜は我を忘れて、厠の戸をば推外して俯向けざまに遁出でたる裳のあふりに燈は消えたり、闇中唯見る二點の星。

三十一

黒闇々の手に捕へられてお小夜は寸歩も移し得ず、恰も底知れざる穴の中に引入れらるゝ心地して氣の遠くなり行く程に我を壓伏するものある如く、肩に千鈞の重量を感じてばつたり板の間に片膝突く時、恐るべき勢ひを以て我胸に猫の飛着きたりと感ぜし後は暫時前後も知らざりけり。良ありて心着けば手燭あり白く青く廊下を照らして母は背後より我を抱き、前には弟の秀松起ちて、守刀を抜放てる九寸の金蛇手中にありて板敷の彼方此方に血の印したる滴々赤く、兩戸一枚庭に倒れて、築山の樹立深々と夜寒の風身に染みて燈火瞬くこと頻なり。我姿はと不圖見れば卷帶姿のしどけなきを、悪夢の裡に着崩して胸も乳も露はなるに、恥ぢてお小夜は頭も擡げず、其ま、臥床に昇入れられて一夜介抱受けたるが夜の明くれば幾分か恐怖の念も薄らぎつ。思へば猫が昨夜の如き振舞も、我に弱點のあればとて、恐ろしと思ひたれ、怪しとも迷ひたれ、これを黒猫を、我寵愛せし時代に於てせむか、昨夜の如き場合には無二の友の我れを守るに、却りて頼母しくは思ひしならむ、深夜に我を慕ひ寄りたればとてことなしと思へばそれまでなり、フ



テテツラアテをなすが如き畜生の素振は憎むべきも俄に待遇の異なりたる手の裏返す我があしらひ、如彼境遇にならむには人なりとてもいかにして好き心地のなすべきぞ、分けて畜生の淺間しさ、着物を裂き且つ破りしも怨むとすれば不便なり。彌子瑕の寵の衰へしは王が情の浮薄に因す、我過てりと令嬢が、愛情再び燃え出でつ。

然るにても彼の時以來黒猫はいかにせしと母に問へば、秀松が御身の叫べる聲を聞いて日頃勇武の生立より愛玩措かざる短刀を其夜も抱きて臥しつゝありし、得物を片手に驅到りて一刀斬着けつ、廊下に點々たる血を残して其の儘行衛知れずとなり。

あはれ今一度歸り来よ、寵を再びして更めて我感情を試みむとお小夜の思ふこと切なるに、母はまた爾く黒猫の傷きたるまゝ、ちらとも姿を見せざるに、一方ならず懸念を抱きて其復讐を恐る意あり。秀松はまた秀松にて憎むべき彼の黒猫を殺し盡さずやはと逸るにぞ、ともあれ黒の所在を知らむと近隣の村人に旨を含めて其の所在を探らせしに、一日二日は音信なかりし、三日めの夜に入りて何某といへる者息せき来りて復命すらく、猫は後の山の祠の前なる富の市の殺されたる跡、死骸を葬りし土饅頭の上に、記念の松の下に闇中眼を輝かして小犬の如く蹲り、人を見るや、爪を研ぎ背を聳かし唸ること牛の如く、傍に寄ることも得ならずと。

この恐るべき報道は遂に其夜の中に彼のお三を走らしたり、下婢は恐怖の念に堪へて今はハヤ

一時も居たゝまらずなりけるなり。

猫は富の市の墓に在りと、これを聞きてお小夜は絶せむとせり。活ける黒猫と富の市の怨霊との間には何等かの關係ありて存すること最早蔽ふべからざる事實となりぬ。然して黒猫が、蚊帳の裡の美人を襲ひて、富の市のために其全力を盡せしは其後三日ならざりしなり。

三十二

風無く、雨無く、星も無く、暑氣重く胸を壓して最寝苦しき夜なりき。お小夜は其夜も例の如く秀松と枕を並べて同一蚊帳に打臥しつゝ、愛々しき眼と蓄の唇、睦まじやかに打語りて少時時を移す程に、弟は先づ寝ねたり。お小夜はとかうの物思に眠りもやらず覺めも果てで、うつらうつらとなしたるが、團扇使ひの手の疲れて、少時我を忘れつも不圖心着けば、寝汗し。暑さに我は堪へざりけむ、何時とも知らず乗出して、衣紋寛ぎ肩白く胸も露顯になりけるにぞ、見る人とはなけれども、獨自から心に恥ぢて思はず四邊ぞ見られたる。

蚊帳の外に黒き物體あり。燈影明滅の内に蹲ひてちつと此方を透し見るは疑も無き黒猫なり。

と見る時黒猫は鞠の如くに飛上りて蚊帳の裾にあふりをくれ其身を麻布にくるめたるまゝ、はたとお小夜に飛着きしが、此時疾く令嬢はあなやと其身を交せるにぞ猫は空しく引返してぐるりぐ



るりと蚊帳の周圍を馳回ること七八回、然せる間に燈火僵れて直ちにふつと消えたる後は、闇中  
唯一陣の腥風ありて猫の所在を告ぐるのみ。

お小夜は生きたる心地も無く枕の上に打伏して一心唯恐怖の念に占領され、救を求むる元氣も  
なく、定まる運命を待つのみなりし、時に弟秀松が肩以て此方に擦寄りつゝ、お小夜の袂に顔  
推入れ、力を籠めて取絶るに、さては前刻より眼を覺まして猫の襲ふを知れるから助を我に求む  
るならむとお小夜は心に思ふのみ、弟の上に其身を蔽ひて犇と抱緊め呼吸を殺しつ。富の市の執  
着も猫の怨恨も我のみならず、嘗て釣棹にて盲人の額に疵着けたりしも弟なり、過般短刀以て黒  
猫を刺したりしも秀松なり、皆姉を思ふ弟の優しき意思より出でたるなれば我身を取りも殺さば  
殺せ、弟のみは助けたしと意中に念ずる佛の御名。

猫はますく猛り立ちて一度は一度より一層烈しく蚊帳を目懸けて飛蒐る、死敵を遮る布一重、  
鋭爪毒牙次第に迫りて蚊帳越ながら令嬢の黒髪に爪を加へて搔撈るに到りしかば、我を忘れて秀  
松を力の限り抱緊めつゝ、聲も幽に「秀ちゃんや。」と唯一言を交へしのみ、蚊帳の内は  
寂としつ。猫は最後に一躍して一聲凄く唸ると齊しく蚊帳の釣手一隅切れてばざりと冠れる網の  
魚、免れ難なき犠牲を電光一過咄嗟の間、星の如き眼に認めて「あ。」とお小夜が絶叫に續きて起  
るをたけび鋭く、「畜生！こらッ。」と秀松が蚊帳の裡より驅出でて何かは知らず室内に擲ちたる

音凄じかりし。「母様、母様、母様。」とさも勇ましく呼ばはりたり。

恚て燈火來り、母來り、祖母來りて、刺されたる黒猫と刺したる秀松とを發見しぬ。勇武なる  
少年は猫を恐れしにはあらずして、實際姉の袖の下に機を熟するを待ちしなりけり。

悪魔の使者は殺されぬ。今はハヤ何物も秋山と、お小夜と二人が戀を妨ぐるものなかるべし。

然れども、然れども知らず、社會一般の者のなすが如き衾をともしする結婚を渠等はなせしや、  
はた否や。



ねむり看守



「何故かな、唯正直一方で、あくせく仕事をするものが、得て貧乏をするといふのは、私が談話もそれぢやて。何でも内にやあ筆筒なし、お茶棚なし、夜具、蒲團は勿論なし、五徳土器に灰を入れて、灰だよ、炭とはゆかない、灰を入れて、其炭團の缺を松葉で挟むといふお所帯。」

家賃の滞りが五月にもなつちやあ、差配も黙つては居ないで、とうとう店立を食はすことになつた。他に行く處はあらう理由なし、困るのは知つてゐるが、此方も家業ぢや、仕方がない。氣の毒だが立つて貰ひましょ、全で借金形を付けて貰はないでは、お互に冥利が悪いで、何も千兩の形に編笠一蓋ぢや、無いものを出せと、まあ、此方でも無理をいはない代に、鍋なり、俵なり、土瓶なり、内にあるものだけ置いて行つて貰ひたい、が、これは道理ぢやと思つて肯いてくれんでは困る。立つた後へ米屋が来ようが、薪屋が来ようが、それは此差配ぢやんと引受けた、何處へ引越したか、行方が知れませんか、かういつて追拂はう。さうすりやあ、お前さん達は借金の肩ぬけた、首玉へ繩を着けようといふものはなくなるから、大きに助からうではないか。そこで

身軽になつて、あとはそれ夫婦共稼で、稼ぎ次第、好い芽が出たら其時は綺麗すつぱりと、私處のお拂ひなさい。それまでは何處でお目に懸らうと、いや、御機嫌よう、お暖で、お寒うござるな、お精が出ますか、とそれ挨拶をするやうになつて見れば、私を恐がつて遁げ隠れなさるに及ばずか。いままでの敵が替つて、別懇となるわけであつて見れば、私も嬉しい、お前さん方も悪い氣はしますまい、で、雙方よし、こんなめでたいことはない。めでたい、めでたい、めでたい、一ツ祝うて立つてくれ。またそれうか／＼日を延ばして、他の借金取に取占められると、何うしてせち辛い世の中だ。私のやうな、こんな氣の善いことをいふものはまたとは無い。あとは引受けるから案じないで少しも早く、さつさ、めでたくあけて下さい。

と差配殿辯じたね。

夫婦は唯ましく立立てられて、煙に巻かれて、はい／＼難有う存じます。旦那様のお蔭で、とお禮の百遍も言つた上に、何うせ、がらくたにや違ひないが、件の、それな、五徳土器、炭團の缺、松葉の火箸まで、そつくり置いて、家をあけて、ぶらりと晩方に戸外へ出た。むかし和尚の阿房拂にやあ、傘一本附いたもんだが、この夫婦下駄一足ないので、草履穿のすた／＼あるき。

身に附いたものといつたら、襪褌衣服に手足ばかり、お荷物がといふと女房の懐に居る乳香兒で、もう乾意いから、大きな聲もし得ないで、クツクツと泣いて居る。それに何だつたとよ。女



房がの、心配やら、寒いやらで、血の道でわるいと来て、眞白な顔が、お天気模様も降りさうなり、薄暗くはなつて来るで、酷く蒼いが、美しい女さ。服装が目立つて穢いほど、手足や、顔はまた際立つて綺麗なんだ。眉のはつきりした、口のしまつた、目の涼しい、髪濃いの、こいつをばらはらと亂してしよんぼりしたのが、たしか原町だといったよ、何家かの木戸の瓦斯燈の其洋燈に火が入つて、ぱつと赤くなつて、黒ふすぼりになつて、フイと消えたあとへ来て、立ちどまつて、大儀さうに呼吸を吐いたが、足許が危いからよろ／＼して、垣根に掴まつて、ガツかり俯向いたのを、亭主がぼんやり瞠めながら、二人とも黙然。

何でもこの邊に舊この亭主が世盛の時、大層恩を被せた壯者が植木屋をして居るさうで、五年ぶりとかで先々月ひよいと出くはした。

おや！旦那様と、忘れないで、聲をかけてくれた位だから、他の者のやうに、落目を見て傍を向いて、知らぬ顔をして通り過ぎるやうな男でない。

頼んだら世話もしてくれよう、相談相手にもなつてくれよう、一晩ぐらゐ泊めてもくれよう、と、差あたり行く處がないので、こゝへ気が着いたので、よろ／＼しちやあ石につまづいて、爪先を痛がつて、泣顔をする女房を引張つて、こゝまでは来たんだが、唯「卯之」と聞いたばかり、知つたばかりで、姓は何やら、番地は何やら、いや一向に亭主知らないの。

来る道でもちよい／＼彼處此處聞いたにやあ聞いたんだけれど、植木屋の卯之とばかりでは少しも分らず。

また何うして彼處あたりは木戸が出張つてて、住居が深いから、豆腐屋が喇叭を吹いてあるかうといふ處だもの、一寸伺ひますとやるのに、なか／＼聞づらい。

立つてても仕方がないから、もう少し向うの方を探して見よう、婦人の足なり、お前は酷う疲れてなり、一所に歩くにはあたらなで此處に立つて待つてくれ、ついで一廻行つて探して来よう。

といふので、女房を立たして置いて、亭主はやつとせいで駈け出した。角を曲つて見えなくなる時分にぼつりと降出したのが、夜一夜降り通さうといふのだから、空は眞暗、あのまた秋雨といふものが、いやに冷たくつて淋しいんだから、何處でももう寂然して、まだ宵の口だけれど、ぱつたり引籠つて人聲もしない。

豫て其の引込思案な、遠慮深い質の處へ、この雨を持込んだから亭主は唯ハヤ氣ばかりめいつて、其こそ大きな聲でものを聞くことも出来ないで、うろ／＼まはりながら、びしよ濡になつて戻つて来て、きよろ／＼見ると、暗い、其木戸の隅に、しよんぼり女房は立つて待つて居る。せつせつといふ胸を撫でて、



可いから可いから、大丈夫だぞ。今直にめッけて来る、もう見着かりさうになつて居たんだからッて、また駈出した、見當も何にもなしにな。

それがといふと、可哀相に、亭主の身になつて見れば、自分が効性がないから起つて、疾つて女房を宿なしにして、夜夜中人の軒下に立たして置き、雨の凌も着けて遣ることが出来ないものを、面と向つて傍に居て、其苦しむのを見て居られないから、それで唯かけつりまはつて居るのだが、女房の身になつちやあ、かういふ體裁で、暗い、淋しい、雨の降るなかに、一人は心細い。可いからせめて一所にでも居て貰ひたいと思ふので、

あなた、あてがございませぬのなら、降るのに探すのはおよしなさいまし。

ツていはれたので、堪らなくなつて泣出したさうな。

そんなに見限つてくれることはない。確に此邊に違ひないのだから、今に知れる。もう一時辛抱してくれ頼む。

といふので、三度めに駈出さうとする時、悲しい聲で女房が。

二

恚く語りかけた時、藪の裡より此處に通ずる落葉の徑に蹙音して、やがて人聲近づくに、年

老いたる看守は弗と其口をつぐみぬ。

「や、野原だ。」

「い、景色の處だな。」

と此徑少し坂なるを、上より早足に下りたるは二個の學生なりき。一人は大學の制服つけて杖を携へたり。いま一人は鳥打帽を頂き、綿厚き羽織の袖を打重ねつ。眼鏡懸けたるがあたりを見て。

「おや、この池は何うしたんだ。」

「水の色が紫だ。む、宛然油繪だ。」

口早にいひかはして、つと引返せり。おもひがけず一群の囚徒ありて、背合せ、さしむかひに、ずらりと芝生に憩ひたればなるべし。

三

「は、は、は、は、此方でも遠慮をしたが、むかうでもはづして行つた。いや、何でも世の中はさつき配の言種ぢやないが、お互だよな。ま、其氣でお前たちも聞くが可いさ。そこで其女房だ。」



あなた済みませんが、私はもう立つては居られませんよ。

と絶入るやうな細い聲で、一言言つたかと思ふと、くづれるやうにべた／＼と横になつて、兒を抱いたまゝ、仰向いて、足を竦めて僵れてしまつた。無理ぢやあない、四五日碌に食る物もあてがはず、それに疾つてる處を、この寒さと、この雨ぢやあ、堪つたものではないものと、亭主はどつきり胸に來て、口も利けないで、遁げるやうにまた駈出した。今度は何あつても、「卯之」が所を探しあてずにやあ置かれなない、仕方なしに氣を引立てて、家を聞出さうと少々深入をする、拍子悪く人の庭口へ紛れ込んだのが災難、此方は半狂亂で時刻も分らないが、彼是十二時過だから堪らない。突然、盜賊と喚かれて、わツといつて遁げ出すと、犬に取巻かれて、嚙着くやうに吠え立てられて、面くらつて、はふ／＼の體で遁げ出した、後はもう其方角も分らない。

亭主は今ので怖氣が付いて、聲音を盗んで、浮足で歩き出す。

黍鼓につつか、つちやハツとする、身體がよるけるな。畠へ踏みこむか。きよと／＼して、あつちへよつたり、此方へよつたり、殆んど大酔の體ぢやな。瓦斯燈の火一つなし、六道の辻にでもさまよつとる氣で、はや人心地もなくなつた時だ、ひどく泥濘へ踏まづつて、ぼつたり膝を折つて、ワツといつて泣き出した。

雨が少し歇んで、空の一方の其雲が薄くなつて、星が一ツ、天の底とでもいふのかな、暗い處

にぼんやり、どんよりと光つて居る。

星を仰いで、

あ、あ、難有うござります。

と震聲で拜んだといふよ。あはれな男ぢやあないか。

世の中に頼みにするものはなし、明日の日の目的はなし、ほかにしやうも無い。こゝで、それ死ぬ氣になつて、少し心が落着いた。悪い落着きやうぢやが、ま、其場合では非もないや。

女房もあゝして居て、犬に喰はれるより、一所に死んだ方が増ぢやらう。どれ、といふので立たうとすると、もう腰が立たぬ。

夢中で駈つり廻つてる中は可かつたが、考へて見りや此男だつて、女房と同一に飯も食はず、疲勞方に多少は無いので。

やつとまあ、何うやら、怒うやら、濡れ佛の泥だらけな身體を持ちあげて、よい／＼とあるき出して、手探で歸つて見ると、女房はまだ呼吸が絶えない。

四

語りつぐ折から彼方なる森の中より一頭の獵犬躍り出でつ。矢の如く畦を横ぎりて、此方なる



藪裏の爪先あがりの暗き坂道に飛上るあとより、また七ツばかりの里の子の尾花一束荷ひたるが出で来れり。

續いて身輕に装束したる、遊獵の紳士顯れしが、それと見るより、面を背けて、あらぬ方をば眺めつ。あやしき顔して、囚徒のいま午の飯食ぶるを見たる彼の里の子の天窓搔い撫でて、莞爾と笑み、

「坊主おとなしうなるんだぜ。」  
といひすてに衝と過ぎ去る。あと追ひて里の童も去りけり。

五

看守は溢る、ばかりの笑を湛へて、や、仰向きたる温顔に、あた、かなる小春日和の日の光を受けて目を瞑りたるが、また靜にこそ語り出でたれ。

「謂つて見りや、効性のない、働のない、つまらない、人のなかの蟲のやうな男ではあるけれども、あはれでないことはない、可哀さうでない理窟はない。もうそれこんな男が、出来心で、貧の盗で、お繩を頂いて居るとして見い。何と私が、でっかい眼をあいて、没義道に眼張つて、少し呼吸をついた、やい、不埒な。ちよいと踞つた、それ、立て、やい。え、不届なと、一々慳

突を食はすことが出来ようか。

私も職業だから仕方がないが、ま、なるべくは大目に見て、出来るだけ樂に勤めさしてやりた

いと思ふ道理ぢやあるまいか、うむ。  
そこで私は何時もこつくり、居眠つて居るぢや。一々目廉を立てなけりや、お前達も樂で好いし、私も年紀が年紀なり、かういふ結構なお天氣にや、龜の甲羅を干す心得で、かうやつてそれ野良へ出て居る。ま、お互様といふもんどやよ。

それが、な、はじめつから然ういふ心ではなかつたが、今の談話の其亭主だ。それがお前盜をして、とうく懲役にやられたではなからうか。

さて、何とも方がつかぬから我身ばかりは死なうと思つて、何とかいひくるめて、女房と其處を別れて、見當なしに、大方首をく、松の枝振でも探してあるいたらう、ぶら／＼あるいてる内にフト牛乳の瓶が目についた、ので、そこが親だ。小兒に一口、このいきりの立ちさうなのをと思つたが出来心、此亭主が一寸手を出せば盗ることが出来るやうな處に置いてある瓶だもの、罌は知れてらあな。

手をかけるが早いか、つかまつて、牛乳屋に咎められて、散々あやまる處へ巡查が來合せたと  
はよ、生憎な。



私はもうこのはなしを聞いてから居眠ることにした。何時でも私が居眠るのをお前たちが何故だ、何故だつて聞くから、話して聞かせたやうなもの、いや、おもしろくもない、談話をしてさへ居眠がしたくなる。

何も盗つたといつたつて、一向大したことではない、朝あの牛乳屋が原町の其お華客の門へ乗つけて置いた乳の瓶を盗んだので、盗みおほせた譯でもない、たゞ、一寸盗らうとした處を、運悪く、いや、盗人の爲に運悪くといつちや濟まぬ譯ぢやが、運悪く其節は山の手で乳を盗ることが大層行はれたので、牛乳屋の佐吉といふ、配達ぢや。それが一番正體を見届けてやらうといふので、故つと盗られさうな處へ一瓶乗つけて置いて、蔭へかくれてお前狙つて居た處だつたといふ。誠に間拍子の悪い、いや、かういつちやあ濟まぬことぢやが、なう。

其が其何だといふよ、亭主が女房の頭を抱へて、泣きながら一所に死なうといつた時、そんなになつてゐるが氣丈な女で、

嫌でございます、兒が可愛うございます。

ときつと言つたもんだから、成程と亭主も氣が着いた。女房に兒の可愛いのを教へられたといふでもないが、いつて見りやそんなものだ。

「あゝ、あゝ。」

と看守は欠して、

「また見巡が來たらば起してもらはう。私も職掌だ、免を吃つちやあ當分驚くで、越度のないやうに、お前達が氣をつけてくれ。差配のいひ種ではないが、お互だよ。」

む、何其の女房か。む、女房が何うしたとか、は、は、は、何でも女のことといふと、得て聞きたがるが、いや、いふまい。てんでにまあ、さういふ場合には其女房が何うするとか、あとは甚麼であらうとか、胸に聞いて見ればいい、そして氣に懸つたら、それ、せつせと、おとなしく働いて、そこは政府にもお情がある。一日も早く娑婆へ出て見るが可からう。皆が其氣で働いてくれりや、私は居眠をして居ても氣が樂ぢや。しかし何其の女房のことは、一切私が心得ては居るが、ま、わざつと言ふまい。は、は、は、

と笑つて答へず、肥りた身に太さ象の如き服着けて、身丈のいと小なきが、やがてまた例の如くうつら〜と居眠りぬ。

六

守看りむね  
天麗かに快晴藍の如く、日の光あたらやかに、秣あちこち、ひろくとある野面にならびて、小春日の午の時すぎ、権色の囚衣着けて、竹の子笠被りたる一群の囚徒は、この青き空の下に、白



き枯草かれくさの上に、皆樂みなたのしげに働はたらける、其影宿そのかげやどす小ちひさき池いけの水みづの色いろぞ紫むらさなりける。

八萬六千四百回



「あ、詰らないく、どうやら徐々夜明けらしいが吾が身は眞闇だ。草木も眠る丑満時と謂ふから、草や木でさへ休むと見えるに、吾と來ると片時もほつといふ呼吸がつかない。年が年中働きたりして、何の事もない、張子の虎といふ身で面を振るんだ、眞個にさ、張子だつて風が無い時は休むから、天下恐らく吾ほど働くものはまたとあるまい。それに何だ、眞闇な狭い處へ推込まれて、小さな窓がたつた一ツ、殆んどこりや牢舎の躰だね。馬鹿々々しい。餘計に顔を振ると、最後、板にぶつかつてそれなりにお陀佛だ。串戲ぢやア無い、天下第一の働きものが、何の因果で終身懲役、しかも重禁錮と謂ふ躰だ。怪しからねえ。まあ考へて見るとこんな詰らない事があるもんか。そりや外の者だつて、擗いだり、働いたりしはするが、ありや人のためでない、身の爲で、着たり、食つたりするために、報酬を取つて働くのだ。つまり止むを得ず働くので、それさへ一晝夜の半分以上は、でれりつと遊んで暮す。遊ぶのと、寝るのと食ふのと、これだけを差引くと、働らく時間は何程も無い。未だそれでも足りないでなかには飲むといふ奴が居る。茶を飲

む、酒を飲む、煙草を飲む。それ、奴等が煙を吸つて吐出す間にも、吾は少なくて五六返は面を掉る、それでさへなほ不平があるかして、誰も吾一人十分だと謂ふもののない世の中だ。そんな世の中に何も吾一人あくせく働くにやア當らない。何のこれ吾なんぞ、飲まうぢやア無し、食はうぢや無し、着ようぢやア無しよ、眞のこつたが今まで傍見も觸らないで、動いて居た氣が知れねえ。よさうく、人面白くもない、張子の虎が榮えねえ業だ。馬鹿々々しい。」

天明、一個大形の懸時計の振玉は、怒る考を起しつ、稍躊躇したるが、確に其己に理あることを信するに到りて、はたと其運動を留めたり。

此時計はこれ一商家の勝手元に懸けられたるものにして、今の持主に奉公してより、十五年の長き月日の間、一瞬時の休息をだも與へられざるにも關はらず、持主に對して何等の不平も無く、實直に、勤勉に、其義務を盡したる、無二の忠僕にてありしなり。

時計局に於ける一切の職員は、餘りことの不意なるに、恰も人間が俄然たる山岳の震動に驚く如く、震動の止めるに驚けり。文字盤即ち彼の(エト)の如きは蒼くなりて、

「大變、々々。」

とけた、ましき聲を上げしが、其の局長たる地位に在ることを自から思出すに到りて、漸く威嚴を恢復し、嚴肅なる音調を以て、



「こら、何物が時間を止めた。」  
 と尋問し始めたり。蓋し吾人人類にありては顔が其一個人を代表すると齊しく、時計にありては文字盤が其時計を代表するものならむ。吾人が見て以て時計となす、主なるものは文字盤なり。驚きましたな、何うも、唐突にばつたり留まつたんで、私なんざ、いまだに萬歳樂を唱へて居ます。何だか薩張りません。」

と長劍は答へたり。  
 短劍の謂へる言も亦これに同一かりき。  
 文字盤は言葉を正して、

「では誰だ。鏝穴、汝では無いか。」  
 「何ういたしまして、私ではございませぬ。え、實際私なんざ、おやといふ間も無かつたんです。」

文字盤は数字を擧めて、渠等を胸し、  
 「唯知らないぢやあ濟まん。不埒極まる。長劍汝の業らしいな。」  
 長劍は頭を掉れり。

「飛だことをおつしやいます。局長、私どもの穿議をするより、まあ閣下の胸に聞いて御覽な

さい。こりや何でも、(せんまい)の業らしいございます。」  
 未だ謂ひも果てざるに、腹中より奇聲を發し、  
 「おい、滅多なことをいふな。もし局長、運動を止めたのは私ども内端の連中ぢやありません。何でも表面の奴らしいございますよ。」  
 「何の表面なもんか。内に密んでる、汝達に相違無い。」  
 と互に罪を争ふ時、  
 「吾だよ。」と低聲にて語れるものあり。  
 「誰だい。」  
 「私なんです。」  
 「何、振玉か。」  
 「左様。」と應じたる振玉の落着き澄まして冷かなるに、文字盤は熱くなりて、  
 「荒金め、汝、何だつてなまけるのだ。」  
 渠は憤然として拳あらば一打撃を、振玉に與へむと苛立てり。然るに振玉は自若として、  
 「そりや人のことは何とでもいへます。閣下なんざ年中所作なしで遊んで暮して、其で人前が可といふもんだから、眞個のこと、可月日の下に生れておいでなすつたんで、嘸はや御満足でござ



いませうよ。ふむ、面白くもない、張子の虎だ。」

語聲の恰もおのが身を放棄したる如き、頗る頼母しからざるものなるにぞ、文字盤は渠が一度怒れるよりも、一層深く怪みて、

「一舂汝は何うしたんだ。え、何うかしはしないか。様子が變だな。」

「様子は宛然これ張子の虎でさ。」

「張子の虎が何うしたといふんだ。」

「張子の虎は矢張其の張子なんぞ。」

「をかしなことがかり謂ふ、何が何うしたといふんだい。」

「お察しがないぢやアありませんか。まあ私の身になつても御覽なさいな。一生が間日の目も拜まれない、こんな眞闇な處に居すくまつて、それで休なし、のべつといふ張子の虎だと考へりや、閣下、心細い境遇でさ。一舂何のために働くんだか、私ア自分ながら氣が知れない。え局長、閣下が私なら何うします。」

下

これを聞ける局員の、勞働者總て皆同情を表して頷けり。文字盤も其謂ふ處のともがらも理の

當然なるに、返すべき言葉も無く、少時黙然としたりしが、漸く不平はこれを宥むるといふ、一の方法あるを發見しつ。大に辭色を和らげて、

「そりやもう一々道理だが、さういつたものでもない。其爲に窓といふものがある。明取が出来てるぢやあないか。」

「だつて私は生れてからまだ一返も外を見ようとつて動止んだことはありませんぜ。其上また厭になつた次第はと申せば、え、局長、閣下は二十四時間に私が動きます、其數を御存じですか。」

「そりや、知つてるとも、八萬六千四百回。」

「ね、八萬六千四百回、口でこそ謂ふけれど、これを一ツ二ツ三ツ四ツと勘定して御覽なさい。ちよいとやそつとで出来るわけのもんぢやございませぬ。其を私は其數だけ一々張子の虎ですぜ。恐ろしいぢやアありませんか、あ、思出しても悚然とする。これに目をかけて、月をかけて、年をかけて御覽なさい、嫌になるのも無理ぢやアありますまい。人をつけ、人間が欠伸をする間に私ア頭を六返振ります。わあ、笑ふ間が十返位で、煙草が二十で、酒が六百、勘定ぢやアありませんぜ、みんなこれ頭を振る數なんで、馬鹿々々しい。其で、此末何十年何うしてこゝへ氣が着いちやあ、唯の一返も動かれるもんぢやアありません。」

「なるほど、さういやあ其様なものだ。汝に限らず吾達だつて、左様また考へた日にやあ片時も



活きて居られるもんぢやあ無いが、しかし考へて見るが可、十里歩行かねばならないと思ふと、ソレ一足も踏出さない先から氣が疲れる。同一ことでもこれを隣まで何返も往來すると思つて見ろ、わけのないことぢやあないか。塵積れば山で、設令十里が百里の旅でも、唯先づ、一呼吸にたつた纒かに一足踏出せばそれで可のだ。この一足を續けてさへ居れば、千里歩行しても矢張唯一足だ、千里も一足、何とわけも無いものぢやあないか。汝は八萬六千四百回を十年間、二十年間と大束につもるから始末にいかん。これを一づ、一づ、一づだと思つてさへ遣つて居れば、五十年経つても唯の一つで済む事だ。お互にとても行末の山坂を思つた日にやあ一日も越されやしないよ。え、振玉、大きな固つた仕事があつて、十年懸らなければ出来ないものは、これを微塵に打碎いて、先づ一年ぶりの仕事にする。一年をまた一月に小さくして、一月をまた一日に細かくする、其れを一時間に割つて、一分に切つてト一秒時間に刻んで見ろ。どんな大仕事にもしろさ、これを一秒時間にする、お互の勞力は少ないもので、一秒をもつと碎いて、だんだん細かにして遣つて見ると、吾達は唯遊んで居て、仕事かひとりで出来て、却つて仕事から此方がつりを取るといふ談話になるが何うだい。たとひ何の様な怠惰者でも、こりや一口乗りたいね。これをサ、あべこべに考へて、一秒にはこれで可が、一時間にはこれだけになる、一日にはこの位莫大なものになると、斯う此方で取つた日には、何でも無い仕事でも、しない前から厭になつて、しまひにやあ眩枕であをのけた、そしてうなるよ。ソレかういふ風で嵩じて行くと、返さない借金と同一で、段々利に利がついて、鼠算といふ奴だ、仕事が無暗に大きくなつて山ほどになるとしよつても立てない。そこで轉ろぶと起きられない、こりやあ躓くが最期だ。だから汝も其通り小口から遣るつもりで、何でも後のことを思はないで、たつた一づ、動けばいゝぢやあないか。イヤ部屋が暗いの、狭くて窮屈だのと叱言を謂出したが、今はじまつたことぢやあ無し、初手つから其處に居たんぢやあないか。そりや唯仕事か嫌になつた爲でいろんなことが謂ひたくなるのだ。何うだ、振玉一言もあるまい。」

と文字盤は、平和に、深切に、老人が其孫を諭すが如く教へたり。振玉は苦笑して、

「そりやまあ理窟は理窟ですがね、私にやあ何うも。」

と逡巡の躰なり。他の嘗て振玉に同意を表したる輩は、太く恥ぢて、其明かに渠等が振玉に同意せしことを公言せざりしをば、極めて僥倖なりと思ひてき。

文字盤は微笑みつ、

「何、理窟も何も無い、嘘だと思ふなら、まあ試に動いて見ろ。」

「え、もうすつかり決心をいたしましたので、斷然よしますつもりですからな。」

「さういはないでさ、唯ほんのちよいと一返、眞似ばかりをやつてくれ。」

活きて居られるもんぢやあ無いが、しかし考へて見るが可、十里歩行かねばならないと思ふと、ソレ一足も踏出さない先から氣が疲れる。同一ことでもこれを隣まで何返も往來すると思つて見ろ、わけのないことぢやあないか。塵積れば山で、設令十里が百里の旅でも、唯先づ、一呼吸にたつた纒かに一足踏出せばそれで可のだ。この一足を續けてさへ居れば、千里歩行しても矢張唯一足だ、千里も一足、何とわけも無いものぢやあないか。汝は八萬六千四百回を十年間、二十年間と大束につもるから始末にいかん。これを一づ、一づ、一づだと思つてさへ遣つて居れば、五十年経つても唯の一つで済む事だ。お互にとても行末の山坂を思つた日にやあ一日も越されやしないよ。え、振玉、大きな固つた仕事があつて、十年懸らなければ出来ないものは、これを微塵に打碎いて、先づ一年ぶりの仕事にする。一年をまた一月に小さくして、一月をまた一日に細かくする、其れを一時間に割つて、一分に切つてト一秒時間に刻んで見ろ。どんな大仕事にもしろさ、これを一秒時間にする、お互の勞力は少ないもので、一秒をもつと碎いて、だんだん細かにして遣つて見ると、吾達は唯遊んで居て、仕事かひとりで出来て、却つて仕事から此方がつりを取るといふ談話になるが何うだい。たとひ何の様な怠惰者でも、こりや一口乗りたいね。これをサ、あべこべに考へて、一秒にはこれで可が、一時間にはこれだけになる、一日にはこの位莫大なものになると、斯う此方で取つた日には、何でも無い仕事でも、しない前から厭になつて、しまひにやあ眩枕であをのけた、そしてうなるよ。ソレかういふ風で嵩じて行くと、返さない借金と同一で、段々利に利がついて、鼠算といふ奴だ、仕事が無暗に大きくなつて山ほどになるとしよつても立てない。そこで轉ろぶと起きられない、こりやあ躓くが最期だ。だから汝も其通り小口から遣るつもりで、何でも後のことを思はないで、たつた一づ、動けばいゝぢやあないか。イヤ部屋が暗いの、狭くて窮屈だのと叱言を謂出したが、今はじまつたことぢやあ無し、初手つから其處に居たんぢやあないか。そりや唯仕事か嫌になつた爲でいろんなことが謂ひたくなるのだ。何うだ、振玉一言もあるまい。」

と文字盤は、平和に、深切に、老人が其孫を諭すが如く教へたり。振玉は苦笑して、

「そりやまあ理窟は理窟ですがね、私にやあ何うも。」

と逡巡の躰なり。他の嘗て振玉に同意を表したる輩は、太く恥ぢて、其明かに渠等が振玉に同意せしことを公言せざりしをば、極めて僥倖なりと思ひてき。

文字盤は微笑みつ、

「何、理窟も何も無い、嘘だと思ふなら、まあ試に動いて見ろ。」

「え、もうすつかり決心をいたしましたので、斷然よしますつもりですからな。」

「さういはないでさ、唯ほんのちよいと一返、眞似ばかりをやつてくれ。」



振玉は止を得ず、不承々に一振せり。局員は皆響の應ずるが如くまた俄に動けり。時は則ち一回轉せり。文字盤は頷きて、

「何うだ、振玉、疲れたか。」

振玉は頗る弱りて、

「申戯ぢやアありません、何の一振ぐらゐる、唯居るのも同一でさ。」

「そこだ、む、其處でもう一振遣つてくれ。」

「ま、よ、まけときませう。」

玉は振動を六度せり。其運動の止むとともに、文字盤は聲を懸けて、

「何うだ、草臥たか。」

「否、草臥れるもんですか。何のこれしきに。閣下、なぶつちやあ不可ません。私ア何も六回掉るの何うの、六十回、六百回が斯うのと、そんなことを謂ふのぢやアありません。つまり、何百萬だか行末の方圖がないからいやきになつたんです。」

「そこだ。吾のいふのはそのことだ。な、聞け、譬へ汝は一秒時間に行末の何百萬度を考へようとも、其一秒時間に働くのは、たゞの一回だらうぢやアあるまいか。それはもう此後何十年、何千億萬度、動くか知れんが、ソレ其處だ、これを一秒時間に碎いて見りや、何でも一回だ。」

「たゞ一回だとかう思つて、いつまでも遣れば可からう。」

例證を擧げたる文字盤の爾き諭には、振玉も我を折りて、

「まあ、左様いたして置きませう。」

と躰よく言を濁すにぞ、文字盤は大笑し、

「は、は、は、さあもういゝ加減にだ、をこねな。皆がこんなにして居ると、あのまた、おさんどんが何時までも寝て居るぞ。」

此に於て乎振棒は玉に打振を促せり。局員は今や和合して齒車も、「ぜんまい」も長短の針も廻轉しつ。振玉は嘗てよりは、より多くの熱心と勤勉を以て着々振動を行へり。時に旭光廚房に照射て若返りたる時計の顔は希望を以て輝きぬ。  
憊る時寢着姿のま、廚房に出来る當家の下婢は、寢惚眼を擦りながら、時計を眺めて呟けり。

「おや、まだ十分早くついでる、ほんとにしゃうのない時計だことねえ。」

欠伸してのび打てる、一種異様の其顔は、不平を以て満ちたりき。

十分間は後れこそしたらめ、何とて早きに過ぐべきぞ、あ、渠は未だ寢足らざりしなり。



化銀杏



貸したる二階は二間にして六疊と四疊半、別に五疊餘りの物置ありて、月一圓の極なり。家主は下の中の間の六疊と、奥の五疊との二間に住居ひて、店は八疊ばかり板の間になり居れども、商賣家にあらざれば、晝も一枚蓆をおろして、こゝは使はずに打捨てあり。

往來より突抜けて物置の後の園生まで、土間の通庭になり居りて、其半ばに飲井戸あり。井戸に推並びて勝手あり、横に二個の竈を並べつ。背後に三段ばかり棚を釣りて、こゝに鍋、釜、挿鉢など、勝手道具を載せ置けり。廁は井戸に列して其あはひ遠からず、然も太く濁りたれば、漉して飲用に供し居れり。建てて數十年を経たる古家なれば、掃除は手綺麗に行届き居れども、其處ら煤ぼりて餘りあかるからず、すべて少しく陰氣にして、加賀金澤の市中にてもこのわたりは淺野川の河畔一帶の濕地なり。

園生は、一重の垣を隔てて、畑造りたる裏町の明地に接し、李の木、ぐみの木、柿の木など、五六本の樹立あり。杏脱は大戸を明けて、直ぐ其通庭なる土間の一端にありて、上り口は拭き込みたる板敷なり。これに續ける六疊は、店と奥との中間にて、土地の方言茶の室と呼べり。其茶の間の一方に長火鉢を据ゑて、背に竹細工の茶棚を控へ、九谷焼、赤繪の茶碗、吸子など、體

裁よく置きならべつ。うつむけにしたる二個の湯呑は、夫婦別々の好みにて、對にあらず。

細君は名をお貞と謂ふ、年紀は二十一なれど、二つばかり若やぎたるが、此長火鉢のむかうに坐れり。細面にして鼻筋通り、遠山の眉餘り濃からず。生際少しあがりて、髪はや、薄けれども、色白くして口許緊り、上氣性と見えて唇あれたり。ほの赤き臉の重げに見ゆるが、泣はらしたるとは風情異り、譬へば炬燵に居眠りたるが、うつとりと覺めしもの如く、涼しき眼の中曇を帯びて、見るに倅晴やかならず、暗雲二帯眉宇をかすめて、渠は何をか物思へる。

根上りに結ひたる圓鬘の鬢頬に亂れて、下メばかり帯もメめず、田舎の夏の風俗とて、素肌に紺縮の浴衣を纏ひつ。あながち身だしなみの悪きにあらず。

教育のある婦人にあらねど、ものの本など好みて讀めば、文書く術も拙からで、はた裁縫の業に長けたり。

他の遊藝は知らずと謂ふ、三味線は其好きの道にて、時ありては爪弾の、忍ぶ戀路の音を立つれど、夫は學校の教授たる、職務上の遠慮ありとて、公に弾くことを禁じたれば、留守の間を見計らひ、細棹の塵を拂ひて、愼ましげに音メをなすのみ。

お貞は今思出したらむが如く煙管を取りて、覺束無げに一服吸ひつ。渠は煙草を嗜むにあらねど、憂を忘れ草といふに頼りて、飲習はむとぞ務むるなる、深く吸ひ



たれば思はず咽せて、落すが如く煙管を棄て、湯呑に煎茶をうつしけるが、餘り沸れるまゝ其冷むるを待てり。

時に履物の音高く家に入來るものあるにぞ、お貞は少し慌だしく、急に其方を見向ける時、表の戸をかたりとあけて、濡手拭をぶら提げつゝ、衝と入りたる少年あり。

お貞は見るより、

「芳さんかえ。」

「奥様、唯今。」

と下駄を脱ぐ。

「大層、おめかしだね。」

「ふむ。」

と笑ひ捨てて少年は亂暴に二階に上るを、お貞は秋波以て追懸けつゝ、

「芳ちゃん！」

「何？」

と顧みたり。

「まあ、此處へ來て、些少お話しなね。お祖母様はいま晝寢をして在らつしやるよ。騒々しいね

え。」

「さうかい。」

と下りて來て、長火鉢の前に突立ち、

「あゝ、喉が渴く。」

と呟きながら、湯呑に冷したりし茶を見るより、無遠慮に手に取りて、

「頂戴。」

とばかりぐつと飲みぬ。

「あら！ 酷いのね、此人は。折角冷して置いたものを。」

故と怨すれば少年は微笑みて、

「餘つてるよ、奥様はけちだねえ。」

と湯呑を返せり。お貞は手に取りて中を覗き、

「何だ、何も残しやアしない。」

と底の方に残りたるを、藥のやうに仰ぎ飲みつ。

「まあ、芳さんお坐んな、而して何故人を、奥様々々呼ぶの、嫌なこつた。」

「だつて、圓鬚に結つてるもの、銀杏返の時は姉様だけれど、圓鬚の時や奥様だ。」



お貞はハツとせし風情にて、少年の顔を瞻りしが、腫ぼつたき眼に思ひを籠め、

「堪忍おしよ。それはもう芳さんが言はないでも、私は此通り髪も濃くないもんだから、自分でも束ねて居たいと思ふがね、旦那が不可ツて言ふから仕様がないのよ。」

「だから矢張奥様ぢやあ無いか。」

と少年は平氣なり。お貞はしをれて怨めしげに、

「だつて、他の者なら可いけれど、芳さんには奥様ツて謂はれると、何だか他人がましいので、頼母しくなくなるわ。せめて「お貞さん」とでも謂つておくれだと嬉しいけれど。」

とためいきして、力なげなるものいひなり。少年は無雜作に、

「ぢやあ、お貞さんか。」

と言懸けて、

「何だか友達の様に見えるねえ。」

「だから矢張、姉さんが可いぢやあないかえ。」

「でも圓鬚に結つてるもの、银杏返だと亡なつた姉様にそつくりだから、姉様だと思ふけれど、

圓鬚ぢやあ僕は嫌だ。」

と少年は素氣なし。

「ぢやあ全然あかの他人なの？」

「なに左様でもないけれど。……」

少年は言淀みぬ。お貞は襟を搔合せ、浴衣の上前を引張りながら、

「それだから昨日も髪を結はない前に、如彼に芳さんにあやまつたものを。邪慳ぢやあないかね。可よ、旦那が何といつても、叱られても大事ないよ。私や直引毀して、結直して見せようわね。」

お貞は顔の色尋常ならざりき。少年は少し弱りて、

「それでなくツてさへ、先達のやうな騒がはじまるものを、そんなことをしようもんなら、其こそだ。僕アまた駈出して行かにやあならない。」

「眞個に、あの時は。ま、何うしようと思つたわ。」

芳さんは駈出してしまつて二晩もお歸りでないし、おばあさんはまた大變に御心配遊ばして何

うしたら可からうとおつしやるし、旦那は旦那でももの言はないで、黙つて考へ込んでばかり居

るしね、私はもう、面目ないやら、恥かしいやら、申譯がないやらで、ぼうツとしてしまつたよ。

後で聞くと何だつさ、眞蒼になつて寝て居たとき。



芳様の選音が聞えたので、はッと気が着いて駆出したが、其まで何うして居たんだか、まるで夢のやうで、分らなかつたよ。」

少年は頻りに頷き、

「僕はまた髻がさ、(水上さん)て呼ぶから、何だと思つて二階から覗くと、姉様は突伏して泣いてるし、髻は壇階子の下口に突立つて、憤然とした顔色で、(直ぐと明けて貰ひたい。)と失敬なことを謂ふぢやあ無いか。だから僕は不愉快で堪らないから、其から其まんまで、家を出て、何處か可い家があつたらと思つたけれど、探す時は無いもんだ。それから友達達の處へ泊つて、牛を奢つてね、トランプをして遊んで居たんだ。僕あ一番強いんだぜ。滅茶々に負かして悪體を吐いて遣ると、大變に怒つてね、とうとう喧嘩をしちまつたもんだから、翌晩は其處に泊ること出来ないので、仕方が無いから歸つて來たんだ。」

お貞は聞きつゝ、睨む眞似して、

「憎らしいねえ。人の氣も知らないで、お友達とトランプも無いもんだね。氣が違やあしないかと、私や自分でさう思つた位なのにさ。」

「でも僕あ歸つた時、(芳さん!)てつて奥から出て來た、あの時の顔にや吃驚したよ。暮合ではあるし、亡なつた姉さんの幽霊かと思つた。」

「いやな!芳さんだ。恐いことね。」

お貞は身震ひして横を向きぬ。少年は微笑みたり。

「何だ、臆病な。晝ぢやあ無いか。」

「でもそんなことをお言ひだと、晩に手水に行かれやしないや。」

「其様に臆病な癖にして、昨夜も髻と二人連で、怪談で聞きに行つたぢやあ無いか。」

お貞はまじめに辯解して、

「はい、ですから切前に歸りました。切前は茶番だの、落語だの、そりや何んなにかおもしろいよ。」

「それぢやもう髻の御機嫌は直つたんだね。」

三

「別に直つたといふでもないけれど、まあ如彼ものさ。あれでもね、おばあさんには大變氣の毒がつてね、(お年寄がやうく)落着なされたものを、またお轉宅は大抵ぢやアあるまいから、其内可い處があつたら、御都合次第お引越しなざるが可し、また一月でも、二月でも、家においでになつても差支へはございせんから)ツて、其ツ切になつてるのよ。其代ね、私にや、(芳さんと



談話をすることは決してならない)ツて、固くいひつけたわ。矢張疑ぐつて居るらしいよ。」

少年は火箸を手にして、ぐいぐい灰に突立てながら、不平なる顔色にて、

「一體疑ぐるツて何だらう。僕のおばあさんにもね、姉様、髯が、(お孫さんも出世前の身體だから、云々が着いてはなりません。私は、私で、内の貞に氣を着けますから、あなたもその處おぬかりなく。)ツさ。内證で言つたさうだ。變ぢやないか、え、姉様、何を疑ぐツて居るんだらう。何か僕と、姉様と、不道德な關係があるとでも言ふことなんかね、其だと失敬極まるぢやあ無いか、え、姉様。」

と詰り問ふに、お貞は、

「あゝ。」

と生返事、胸に手を置き、差俯向く。

少年は安からぬ思ひやしけむ。

「ぢやあ何だね、此間あの騒ぎのあつた前に、二人で奥に談話をして居た時、髯が戸外から歸つて来たので、姉様は、あわアくつて駈出したが、その故なの？一體氣が小さいから不可いよ。何時に限らずだ、人が、がらりと戸を開けると、何だか大變なことでも見付かつた様に、どきまぎして、ものをいふにも呼吸をはずまして、可訝いだらうぢやないか。先刻僕の歸つた時も、戸を

あけると、吃驚して、何だかおどくしておいでだつたぜ。此間の時だつても左様だ。髯に向つて、(入らつしやいまし)自分の亭主を迎へるとつて、(入らつしやいまし)なんて、言ふ奴があるものか。何だつてさう氣が小さくツて、物驚きをするんだなあ。それだから疑ぐられるんだ。不可ねえ。」

お貞は淋しげなる微笑を含み、

「左様いつてながら芳さんも彼の時は矢張そゝツかしく、二階へ駈け上つたぢやあないかね。」

「そりや何だ、僕は何も恐いことはないけれど、あの髯が嫌だからだ。何だか蟲が好かなくツて、見ると癩に障るつちやあない、僕あもう大嫌だ。」

と臆面もなく言うて退けつ。渠は少年の血氣にまかせて、後前見ずにいひたるが、さすがに其妻の前なるに心着きけむ、お貞の色をうかゞひたり。

お貞は氣に懸けたる状もなく、却つて同意を表する如く、勢なげに歎息して、

「誰が見てもちがひはないねえ。私だつて矢張嫌だわ。だがね、芳ちゃん、何故好かないの。」

少年はお貞の言の吾が意を得たるに元氣づきて、聲の調子を高めたり。

「他にね、斯うといつて、まだ此家へ来て、そんなに間もないこつたから、何處に何うと謂ふ取



留めたこともないけれど、唯ね、髻の様子がね、亡なつた姉様の亭主に肖て居るからね、その故だらうと思ふんだ。」

「而して、不可いお方だったの。」

少年はそゝろに往時を追懐すらむ、慨然としたりけるが、

「不可い處の騒ぢやない、姉様を殺した奴だもの。」

お貞は太く感ぜし状にて、

「まあ。」

と其うるみたる眼を睜りぬ。

「酷い人ね、何だつてまた姉様を殺したんだらうね。芳さんのお姉様なら、何様にか優しい、佳い人だつたらうのにさ。」

「そりや、眞實に僕を可愛がつてくれたツチャあないよ。今着て居る衣服なんか、臺なしになつて居けれど、姉様が故と縫つて寄來したもんだから、大事にして着て居るんだ。」

「其せるで似合ふのかねえ。」

とお貞は今更の如く少年の可憐なる状ぞ瞻られける。水上芳之助は年紀十六、其いふ處、行ふ處、無邪氣なれどもあどけなからず。辛苦のうちに生たちて浮世を知る状見えつ。もののいひ

ぶりはきくして、齡のわりには大人びたり。

四

要なければ茲には省く。少年はお蓮といへりし渠の姉が、少き時配偶を誤りたるため、放蕩にして輕薄なる、其夫判事なにかしのために虐遇され、精神的に殺されて入水して果てたりし、一條の慘話を物語りつ。語は簡に、意は深く、最もものに同情を表して、動かされ易きお貞をして、悲痛の涙に咽ばしめたり。

語を繼ぎて少年言ふ。

「姉様も矢張酷いめにあはされるから、其で髻が嫌なんだらう。」

折からぶつくと湯の沸返りて、ぱつと立ちたる湯氣に驚き、少年は慌しく鐵瓶の蓋を外し、お貞は身を斜になりて、茶棚より銅の水差を取下して急がはしく水を注しつ。

「いゝえ、違ふよ。私のはまた全く芳さんの姉さんとは反對で、あんまり深切にされるから、もう嫌で、嫌で、ならないんだわ。」

少年は太く怪み、

「そんな事つちやアあるもんでない。何だつて優しくされて、其で嫌だといふがあるものか。」



「まあさ、お聞きなね。深切だといへば深切だが、どちらかといへば執着いのだわ。かいつまんで話すがね、一寸聞賃をあげるから。」

と菓子皿を取出して、盛りたる羊羹に楊枝を添へ、

「一ッおあがり、いまお茶を入替へよう。」

と吸子の茶殻を、こぼしにあげ、

「芳ちゃんだから話すんだよ。誰にも言つちや不可いよ。實は私の父親は、中年から少し氣が違つたやうになつて、とう／＼それでおなくなりなすつたがね、親のことをいふやうだけれど、母様は少し了簡違ひをして、父親が病氣のあひだに、私には叔父さんだ、弟ごと關着いたの。」

するとお祖父さんのお計らひで、私が乳放れをするとすぐに二人とも追出して、御自分で私を育てて、十三の時までお達者だつたが、あゝ、十四の春だつた。中風でお惱みなすつてから、動くことも出来なくおなりで、家は廣し、四方は明地で、穴のやうな處に住んでたもんだから、火事なんぞの心配はないのだけれど、盜賊にでも入られたら、それこそ何うすることもならないのよ。お金子も少々はあつたさうだし。

雇ひの婆さんは居たけれど、耳は遠いし、そんなことの助けにやならず、祖父さんの看病も私一人では覺束なし、確な後見をと言つた處で、また後見なんていふものは、あとでよく間違が出

来るものだから、其よりか、一層私に……といふので、親類中で相談を極めて、とう／＼あてがつたのが今の旦那なの。

其頃ちやうど高等中學校を卒業したので、ま、宅へ來てから、東京へ出て、大學へ入らうといふ相談でね、もと／＼内の緊りにもなつて貰はなきやあならないといふのでさ、わざと年の違つたのを貰つたもんだから、旦那は二十九で、私は十四。」

お貞は今吸子に湯をばささむとして、鐵瓶に手を懸けたる、片手を指折りて數へ見つ。

「十五の違だね。もつとも晩學だとかいふので、大抵なら二十五六で、學士になるのが多いつてね。」

「無論さ。」

と少年は傾聴しながら喙を容れたり。

お貞は煎茶を汲出だして、先づ少年に與へつ、

「何だか知らないけれど、御婚禮をした時分は、嬉しくもなく、恐くもなく、まるで夢中で、何とも思やしなかつたが、實はおぢいさんと二人ばかりで、他所の人の居ない方が、御膳を頂く時やなんか、私や氣が置けなくて可かつたわ。

變に氣が詰まつて、他人の内へ泊にでも行つたやうで、窮屈で、つまらなくツて、思つて見れ



ば其時分から旦那が嫌ひだったかも知れないよ。でも大方甘やかされた癖で、我儘の方が勝つたのであらうと思ふ。

其中お祖父さんも安心をなすつたせるか、大層気分も好くなるし、いよゝ旦那が東京へたつといふので、祝つてた、したお酒の座で、ちつと飲やうが多かつたのかもしれないよ。旦那が出發をした其おひるすぎに、お祖父様は果敢なくおなりなすつたのよ。私やもう其時は……とお貞は聲をうるましたり。

五

「それからといふものは、私はまるで氣ぬげがしたやうで、内の中でも一番薄暗い、三疊の室へ入つちやあ、何ういふものだかね、隅の方へちやんと坐つて、壁の方を向いて、しくしく泣くのが癖になつてね、長い間治らなかつたの。さうかうするうち兒が出来たわ。可笑いぢやないかねえ。」

お貞は苦々しげに打笑みたり。

「妙なものがころがり出してしまつてさ、翌年の十月のことなのよ。」  
と言懸けてお貞はもの案じ顔に見えたりしが、

「さうゝ、芳ちゃん、まだ其前にね。旦那がさ、東京へ行つて三月めから、毎月々々一枚づつ、月の朔日には屹と寫眞を寫してね、缺かさず私に送つて寄來すんだよ。まあ、御深切様ぢやないかね。其たんびに手紙がついてて、(いや今月は少し瘦せた)の、(今度は少し眼が悪い)の、(何うだ先月と合はして見い、些少あ肥つて見えよう)なんて、言書が着いてたわ。」

私やお祖父さんのことばかり考へて、別に何にも良人の事は思はないもんだから、一寸見たばかりで、すんゝ葛籠の裡へしまひこんで打棄つといたわ。すると、何時のことだツけか、何かの拍子、お友達にめつかつてね、

(まあ!お貞さん。旦那様は飛んだ御深切なお方だねえ。)サ酷く揶揄つたもんだらうぢやあないかえ。

其も其筈だね、寫眞の裏に一葉々々、お墨附があつてよ。年、月、日、西岡時彦寫之、お貞殿へさ。

私もつい口惜紛れに、(寫眞の儀はお見合せ下されたく、あまりゝ人につけても)ツさ。何があまりゝだらう、可笑いね。さういつて遣ると、それツきりおやめになつたが、十四五枚もあつた寫眞を、また見られちやあ困ると思つたがね、人にも遣られず、焼くことも出來ずさ、仕方がないから、一纏めにして、お持佛様の奥へ容れて置いてよ。毎日拜んだから可いではない



かね。」

先刻に干したる湯香の中へ、吸子の茶の濃くなれるを、細く長くうつつしこみて、ぐつと一口飲

みたるが、あまり苦かりしにや湯をさしたり。

少年は唯黙して聞きぬ。

お貞は口をうるほして、

「兒が出来、もう其しく泣いてばかり居る癖はなくなつて、小兒にばかり氣を取られて、他に何にも考へることも、思ふこともなくつて、ま、五歳六歳の時は知らず、其しばらくの間ほど、苦勞のなかつた時はないよ。

すると、其夏の初の頃、戶外にがらりと腕車が留つて、入つて来た男があつたの。沓脱に突立つて、案内もしないから、寝かし着けて居た坊やを置いて、私が上り口に出て行つて、

(誰方)といつて、ふいと見ると驚いたが、よくよく見ると旦那なのよ。旦那は旦那だが、見違へるほど瘠せて居て、ま、其も可いが妙な恰好さ。

大きな眼鏡のね、黒磨で以て、眉毛から眼へかけて、頬ツペたが半分隠れようといふ黒眼鏡を懸けて、希代さね、何のためだらう。其上あのそれ呼吸器とかいふものを口へ押つけてさ、おまけに鬚を生やして居るぢやあ無いか。それで高帽子で、羽織がといふと、縞の透綾を黒に染返した

のに、五三の何か縫着紋で、少し丈不足といふのを着て、お召が、阿波縮で、淺葱の唐縮緬の兵兒帯をメめてたわ。

何うだい、芳さん、私も思はず莞爾したよ、これは歸つて来たのが嬉しいのより、一層其恰好が可笑かつたせるなのよ。

病氣で歸つたといふこつたから、私も心配をして、看病をしたがね、胃病だといふので、一寸は快くならない。一月も二月も、さうさ、彼是三月ばかりもぶら／＼して、段々瘠せるもんだから、坊やは居るし、私もつい心細くなつて、そつと夜出掛けちやあお百度を踏んだのよ。するとね、其事が分つたかして、

(お貞、そんなに吾を治したいか)つて、私の顔を瞻めるからね。何の氣なしで、(はい、あなたがよくなつて下さいませねば、何うしませう、私どもは路頭に立たなければなりません。)と眞實の處をいつたのよ。

さあ怒つたの、怒らないのぢやあない。(それでは手前、活計のために夫婦になつたか。そんな水臭い奴とは知らなんだ。)と顔の色まで變へるから、私は弱つたの、何のぢやない、何うしようかと思つたわ。」



「何故一所に死ぬとは言つてくれない。愛情といふものは、そんな淡々しいものではない。ツッていふのさ。向うから左様出られちやあ、此方で何とも言ひやうが無いわ。」

女郎や藝妓ぢやあるまいしさ、そんな殺文句が謂はれるものかね。でも、旦那の怒りやうがひどいので、まあ、散々あやまつてさ。坊やがすがひで、先づそれツきりで治まつたがね、私や其時、あゝ、執念深い人だと思つて、ぞつとして、それからいふものは、何だか重荷を背負つたやうで、今でも肩身が狭いやうなの。

あとでね、あのそら先刻いつた黒眼鏡ね、(烏蜻蛉見たやうに、をかしいぢやありませんか。)と、病氣が治つてから聞いたことがあつたよ。さうするとね、東京はからツ風で塵埃が酷いから、眼を悪くせまいための砂除だつていふの、勉強盛なら洋燈をカツカと、ともして寝ない人さへあるんだのに、さう身體ばかり庇つてちやあ、何にも出来やしないと想つたけれど、まさかそんなことをいへたものでもなし、呼吸器も肺病の薬といふので懸けるんだツて。それからね、其髯がまた妙なのさ。」

とお貞は少年の面を見て、

「衛生髯だとさ、おほ、。分るかえ？芳さん。」

「何のこつた、衛生髯ツたつて分らないよ。」

「其はね。」

となほ微笑みながら、

「斯うなのよ。何でも人間の身體に附屬したものは、爪であらうが、垢であらうが、要らないものは一つもないとね、其中でも往來の塵埃なんぞに、肺病の蟲がまざつて、鼻ななかへ飛込むのを、髯がね、つまり玄關番見たやうなもので、喰留めて入れないんだツさ。見得でも何でもないけれど、身體のために生じたと、さういつたよ。だから衛生髯だわね。おほ、。お貞は片手を口にあてつ。少年も噴出したしぬ。」

「いくら衛生のためだつて、あの髯だけは廢止ば可いなあ。まるで(ちよいとこさ)に肖てるものを、髯があるから尙そつくりだ。」

お貞は眉を打撃めて、

「嫌だよ、芳さんは。(ちよいとこさ)は餘りだわ。でも(ちよいとこさ)と言へば此間、小橋の上で、あの(ちよいとこさ)の館屋に逢つたの。丁ど其時だ。櫻に中の字の徽章の着いた學校の生徒が三人連で、向うから行き違つて、一件を見ると聲を揃へて、



(やあ、西岡先生。)と大笑をして行き過ぎたが、何のこつた知らんと、當座は氣が着かずに居たつげがね。何だとさ、學校ぢやあ、皆がもう良人に、(ちよいとこさ)と謂ふ渾名を付けて、蔭ぢやあ、さうとほか言はないさうだよ。」

少年は頭を掉れり。

「何の、蔭でいふくらるなら優しいけれど、髯がね、あの學校の雇になつて、はじめて教場へ出た時に、誰だつげか、(先生、先生の御姓名は?)と聞いたんだつて。するとね、ちやうど、後れて溜から入つて来た、遠藤ツて、そら知つてるだらう。僕の處へもよく遊びに来る、肩のあがつた、武者修行のやうな男。」

「あゝ、あゝ、鐵扇でものをいふ人かえ。」

「うむ、彼奴さ、彼奴がさ。髯の傍へついと出て、席から名を尋ねた學生に向つて、(おい、君、此先生か。此先生なら左様だ、名は(チヨイトコサ)だ。)と謂つたので、組一統がわツといつて笑つたつて、里見がいつか話したつげ。」

お貞は溜いきをもらしたり。

「嫌になつちまふ!ぢや、まるでこのつげから安く踏まれて、馬鹿にされ切つて居たんだね。」

「でもなかにや如彼見えても、なか／＼學問が出来るんだつて、さういつてる者もあるんだ。何

しろ、教場へ出て來ると、禮式もないで、突然、ポウルドに問題を書出して、

(何番、これを。)

といつたきり椅子にかゝつて、かう、少しうつむいて、腕をついて、黙つて居るツて。呼ばれた番號の奴は災難だ。大きに下稽古なんかして行かなからうものなら、面くらつて、(先生私には出來ません。)といつて見ても返事をしない。其ま、うつちやつて置くもんだから、しまひにやあ泣聲で、(私には出來ません、先生々々。)と呼ぶと、顔も動さなけりや、見向きもしないで、(遣つて試るです。)といふツきりで、取附島も何にもないと。それでも遣つて見ても出來さうもない奴は、立つたり、居たり、ポウルドの前へ出ようとして中辰をしたり、愚圖々々迷つている間に、柝が鳴つて、時間が濟むと、先生は其ままでファイと行つてしまふんだつて。そんな時あ問題を一つ見たばかりで、一時間まる遊び。」

七

「だから、西岡は何でも一方に超然として、考へて居ることがあるんだらう。えらい!といふ者もあるよ。」

お貞は「何の。」といふ顔色。



「考へてるツて、大方内のことばかり考へてて、何をしても手が附かないで居るんだらう。聞いて御覽、芳さんが来てからは、また考へやうが一層きびしいに相違ないから。何だつて、また彼の位、嫉妬深い人もないもんだね。」

前にも談した通り、旦那はね、病氣で歸省をしてから、それなり大學へは行かないで、唯ぶらぶらして居たもんだから、澤山ないお金子も坐食の體でなくなるし、とうとう先に居た家を賣つて、去々年この家へ引越したの。

其でもまあ方々から口があつて、皆な相當で、悪くもなくつて、中でも新瀉縣だつた、師範學校のね芳さん、校長にされたのよ。校長は可いけれど、私は何だか一所に居るのが嫌だから、金澤に残ることにして、旦那ばかり、任地へ行くやうにと言ふ相談をしたが不可なくつて、とうとう新瀉くんだりまで、引張り出されたがね。何ういふものか、嫌で、嫌で、片時も居た、まらなくつてよ。金澤へ歸りたいで、例の持病で、氣が滅入つちやあ泣いてばかり。

旦那が學校から歸つて來ても、出迎もせず俯向いちやあ泣いてるもんだから、

(あ、またか)となさけなさうに言つちやあ、しをれて書齋へ入つて行つたの。別に、つらあてといふんぢやあ決してなかつたんだけれど、眞個に歸りたかつたんだもの。

旦那もとうとう我を折つて(それぢやあ歸るが可い)といふお許しが出ると、直ぐに元氣づい

て、はきくして、五日ばかり御膳も頂かれなかつたものが、急に下婢を呼んで、(直ぐ腕車夫を見ておいで)さ、其が夜の十時すぎだから恐しいぢやあないかえ。何だか狂人じみてるねえ。

旦那を残し、坊やは其時分五歳でね、それを連れて金澤へ歸ると、さつぱりして其居心の可かつたつちやあない。坊もまた大變に喜んだのさ。

其がといふと、坊やも乳兒の時から父親にやあ少とも馴染まないで、少しものごころが着いて來ると、顔を見ちや泣出してね。草履を穿いて、ちよこく戸外へ遊びに出るやうになると、情ないぢやあないかえ。家へ入らうとしちやあ、何時でもさ、外戸の隙からそつと透見をして、小さな口で、(母様、父様、家に居るの?)と聞くんだよ。

(あ、)と返事をする、其まゝ家へ入らないで、ものの欲くなつた時分でも、また遊びに行つてしまつて、父様居ない、といふと、いそぐ入つて來ちやあ、私が針仕事をして居る肩へつかまつて。」

と聲に力を籠めたりけるが、追愛の情の堪へ難かりけむ、ぶる／＼と身を震はし、見る／＼面の色激して、突然長火鉢の上に蔽はれ懸り、眞白き雪の腕もて、少年の頸を搔抱き、「こんな風に。」

とものぐるはしく、眞面目になりたる少年を、惚々と打まもり、



「私の顔を覗き込んだら、(母様)ツッて、(母様)ツッて呼んでよ。」  
お貞は太く激しをれり。

「而してね、(父様が居ないと可いねえ。)ツッて、何時でも、さう言つたわ。」

言懸けてうつつむく時、弛き前髪の垂れけるにぞ、うるさげに搔上ぐるとて、漸く少年にからみたる、其腕を解きけるが、なほ渠が手を握りつ、

「其様時ばかりぢやあないの、私が何かくさくさすると、可哀相に兒にあたつて、叱咤ツッて、押入へ入れて置く。あとで旦那が留守になると、自分でそツと押入から出て来てね、そツと拔足かなんかで、私のそばへ寄つて来ちやあ、肩越に顔を覗いて、(母様、父様が居ないと可いねえ)ツッさ。五歳や六歳で死んで行く兒は、眞個に賢いのね。女の兒はまた格別情愛があるものだ。だからもう世の中がつまらなくツッて、つまらなくツッて、仕様がなかつたのを、兒のせいで紛れて居たがね、去年(じふてりや)で亡くなつてからは、私やもう死んでしまひたくツッて堪らなかつたけれど、旦那が馬鹿におとなしくツッて、くわツと喧嘩することがないものだから、身投げに駆出す機がなくツッて、ついぐづぐで生きてたが、芳ちゃん、お前に逢つてから、私や死にたくなくなつたよ。」

と、ちつと其手をしめたるトタンに靴音高く戸を開けたり。

お貞はいかに驚きしぞ、戸のあくともろとも器械の如く刎ね上りて、夢中に上り口に出迎へつ。蒼くなりて瞳を据ゑたる、杏脱の處に立ちたるは、洋服扮装の紳士なり。頤細く、顔圓く、大きさ過ぎたる鼻の下に、賤しげなる八字髭の上唇を蔽はむばかり、濃く茂れるを貯へたるが、面との配合を過れり。眼はいと小さく、毗垂れて、あるかなきかを怪むばかり、殊に眉毛の形亂れて、墨をなすりたる如くなるに、額には幾條の深く刻める皺あれば、實際よりは老けて見ゆべき、年紀は五十の前後ならむ、其顔に眼鏡を懸け、黒の高帽子を被りたるは、これぞ(ちよいと(こさ)といふ動物にて、うはさせし人の影なりける。

良夫と誤り、良夫と見て、胸は早鐘を撞く如き、お貞は其良人ならざるに腹立ちけむ、面を赤め、瞳を据ゑて、屹と其面を瞻りたる、來客は帽を脱して、恭しく一禮し、左手に提げたる草靴の中より、小き旗を取出して、臆面もなくお貞の前に差出しつ。

「日本大勝利、萬歳。」

と謂ひたるのみ、顔の筋をも動かさず、(ちよいと(こさ)は反身になり、澄し返りて控へたり。渠が斯の如くなす時は、二厘三厘思ひくくに、其掌に投げ遣るべき金澤市中の通者となりを



れる僥倖なる漢なりき。

「ちよいとこ、ちよいとこ、ちよいとこ。」

と渠は、もと異様な節を附し兩手を掉りて躍りながら、數年來金澤市内三百餘町に館を賣りつゝ往來して、十萬の人一般に、よく其面を認められたるが、征清のことありしより、渠は活計の趣向を變へつ。即ち先の如くにして軒毎を見舞ひあるき、伶俐に米鹽の料を稼ぐなりけり。

渠は常にもいはず、極めて生眞面目にして、人の其笑へるをだに見しものもあらざれども、式の如き白癡者なれば、侮慢は常に嘲笑となる、世に最も賤まるゝ者は時としては滑稽の材となりて、金澤の人士は一分時の笑の代にとて、渠に二三厘を拂ふなり。

お貞は漸く胸を撫でて、冷かに舊の座に直りつ。代價は見てのお戻りなる、この滑稽劇を見物しながら、いまだ木戸錢を拂はざるにぞ、(ちよいとこ)は身動きだもせで、其まゝ其處に突立ち居れり。

良ありてお貞は心着きけむ、長火鉢の引出を明けて、渠に與ふべき小錢を探すに、少年は傍より、

「姉さん、湯錢のつりがあるよ、おい。」

と板敷に投出せば、(ちよいとこ)は手に取りて、高帽子を冠ると齊しく、威儀を正して出行

きたり。

九

出行く(ちよいとこ)を見送りて、二人は思はず眼を合しつ。

「なるほど肖て居るねえ。」

とお貞は推出すが如くに言ふ。少年は其には關せず。

「まあ、それから何うしたの？」

渠は聞くことに實の入りけむ、語る人を促せり。

「さあ其新鴻から歸つた當座は、坊やも——名は環といつたよ——環も元氣づいて、いそぐして、嬉しさうだし、私も日本晴がしたやうな心持で、病氣も何にもあつたもんぢやあないわ。野へ行く、山へ行くで、方々外出をしてね、大層氣が浮いて可い心持。

出来るもんなら何時までも旦那が居ないで、環と二人ツきり暮したかつたわ。

だがねえ、芳さん、浮世はまゝにならないものとは詮じ詰めたことを言つたんだね。二三度旦那から手紙を寄越して、(奉公人ばかりぢや、緊が出来ない、病氣が快くなつたら直ぐ来てくれ。)と頼むやうにいつて來ても、何の、彼のツて、行かないもんだから、お聞きよ、まあ、何うだら



うね。行つてから三月も経たない内に、辭職をして歸つて来て、(なるほどお前なんざ、とても住めない、新潟は水が悪い)ツさ。まあ!

するとまた環がね、何ういふものか、はきくしない、嫌にいぢけツちまつて、悪く人の顔色を見て、私の十四五の時見たやうに、隅の方へ引込んぢやあ、うぢくするから、私もつい氣が滅入つて、痲癩が起るたんびに、罪もないものを……」

と涙を浮め、お貞はがツくり俯向きたり。

「其癖、旦那は、環々ツて、まあ、何様に可愛がつたらう。頭へ手なんざ思ひも寄らない、睨める眞似をしたこともなかつたのに、却つて私の方が痲癩を起しちや、(母様)と傍へ來るのを、(え、も、うるさいねえ、)といつて突飛ばして遣ると、旦那が、(咎もないものを何故そんなことをする)てツて、私を叱るとね、(母様を叱つては嫌よ、御免なさい)と庇つてくれるの。而して、(あんな母様は不可喃、此方へ來い)と旦那が手でも引かうもんなら、其こそ大變、わツといつて泣出したの。

(あ、あ、)と旦那が大息をして、ふいと戸外へ出てしまふと、後で、そつと私の顔を見ちやあ、さもく何うも懐しさうに、莞爾と笑ふ。其また愛くるしさツちやあない。私も思はず莞爾して、引ツたくるやうに膝へのせて、しつかり抱しめて頬をおツつけると、嬉しさうに笑ツちやあ、(父

様が居ないと可い)と、それまたお株を言ふぢやあないかえ。

だもんだから、つい私もね、何だか旦那が嫌になつたわ。でも或時、

(お貞、吾も環にや血を分けたもんだがなあ。)とさも情なさうに言つたのには、私も堪らなく氣の毒だつたよ。

前世の敵同士でもあつたものか、芳さん、環がじふてりやでなくなる時も、私がやる水は、かぶりつくやうにして飲みながら、旦那が薬を飲ませようとすると、ついと横を向いて、頭を掉つて、私にしがみついて、懐へ顔をかくして、いやくをしたもんだから、つひぞ荒い言をいつたこともない旦那が、何と思つたか血相を變へて、

(不孝者!)といつて、握拳で突然環をぶたうとしたから、私も吃となつて、片膝立てて、

(何をやるんです!)と摺寄つたわ。其時の形相の凄じさは、ま、何の位であつたらうと、自分でも思ひ遣られるよ。言憎いことだけれど、眞實にもう旦那を喰殺して遣りたかつたわね。今でも旦那を環の敵だと思ふもの。彼の父親さへ居なけりや、何だつて環が死ぬものかね、死にやあしないわ、私ばかりの兒だつたら。」

お貞はしばらく黙したりき。良あり思出したらむかの如く、  
「旦那は其ま、崩折れて、男泣きに泣いたわね。」



私やもう泣くことも忘れたやうだつた。え、芳さん、環がなくなつてから、また二三度も方へい、役に着いたけれども、金澤なら可いが、皆な遠所なので、私は何ういふものか遠所へ行くと頻に金澤が戀しくなつて、歸りたい、一心でね、濟まないことだとは思つて見ても、我慢がし切れないのを、無理に堪へると、持病が起つて、わけもないことに泣きたくなつたり、飛んだことに腹が立つたりして、まるで夢中になるもんだから、仕方なしに歸つて來ると、旦那も後からまた歸る、何でも私をば一人で手放して置く譯にやゆかないと見えて、始終一所に居たがるわ。

だもんだから何處も良い處には行かれないで、金澤ぢや、あんなつまらない學校へ、腰辨當といふしがない役よ。」

と一人冷かに笑うたり。

十

「何もそんなに氣を揉まなくつても、よささうなものを。旦那はね、まるで留守のことが氣に懸るために出世が出来ないのだ、といつても可いわ。」

そんなに私を思つてくれるもんだから、夜遊はせず、眞個のこつたよ、夫婦になつてから以來、

一晩も宅を明けたことなしさ。學校がひければ、ちやんともう、道寄もしないで歸つて來る。尤も無口の人だから、口ぢや何ともいはないけれど、何時もむづかしい顔を見せたことはなし、地體がくすぶつた何しろ、(ちよいとこさ)といふのなもの。それだが、眼が小さいから些少あ彼でも愛嬌があるよ。荒い口をきいたことなし、すりや私だつて、嫌だ、嫌だとはいふもの、何處がといつちやあ返事が出來ない。けれども嫌だから仕様がないわ。

それだから私も、なに言ふことに逆らはず、良人は矢張良人だから、嫌だつても良人だから、良人のやうに謹んで事へて居るもの。さう疑ぐるには及ばないぢやあないかね。芳さん、芳さんの姉様がひどくされたやうでも困るけれど、男はちつたあ男らしく、偶には出歩行でもしないとね、男に意氣地がないやうで、女房の方でも頼母しくなくなるのよ。

其を旦那と來た日にやあ、ちよいとの間でも家に居て、私の番をして居たがるんだわ。其も私が行届かない故だらうと、氣を着けちやあ居るし、其上もう私は旦那の犠牲だとあきらめてる。分らないながらも女の道なんてことも聞いてるから、浮氣らしい眞似もしないけれど、芳さん、あの人の弱點だね。其がために出世も出來ないなんといつた日にや、私や一層可哀相だよ。あはれだよ。

何の密夫の七人ぐらゐ、疾くにも出來ないぢやあなかつたが……」



といひかけしがお貞はみづから其言過しを恥ぢたる色あり。

「これは話さ。」

と口輕に言消して、

「何も見張つて居たからたつて、しやうのあるもんぢやあないわね。」

お貞は面晴々しく、しをれし姿きりとなりて、其音調も氣競ひたり。

「しかしね、芳さん、世の中は何といふ無理なものだらう。唯式三獻をしたばかりで、夫だの、妻だのツて、妙なものが出来上つてさ。女の身體はまるで男のものになつて、何をいはれてもはいはいつて、従はないと、イヤ、不貞腐だの、女の道を知らないのと、世間で種々なことをいふよ。

折角お祖父さんが御丹精で、人並に育つたものを、唯で我ものにしてしまつて、誰も難有がりもしないぢやないか。

其で居て婦人はいつも下手に就いて、無理も御道理にして通さねばならないといふ、そんな勘定に合はないことツちやあ、あるもんぢやない。何處かへ行かうといつたつて、良人がならないといへば、唯、起てといへば、唯、寢ろといはれりや其も、唯、だわ。

人間一人を縦にしようが、横にしようが、自分の好きなまゝにして置きながら、まだ不足で、譬

へば芳さんと談話をするにはならぬといはれりや、矢張り快く落着いて談話も出来ないだらうぢやないかね。

一體操を守れたの、良人に従へだのといふ、掟かなんか知らないが、さういつたやうなことを極めたのは、誰だと、まあ、お思ひだえ。

一遍婚禮をすりや疵者だの、離縁るのは女の恥だのツて、人の身體を自由にさせないで、死ぬよりつらい思ひをしても、一生嫌な者の傍についてなくツちやあならないといふのは、何ういふ理窟だらう、わからないぢやないかね。

まさか神様や、佛様のおつげがあつたといふ譯でもあるまいかね。もとく人間がさういふことを拵へたのなら、誰だつて同一人間なもの、何密夫をしても可い、駢落をしても可いと、言出した處で、それが通つて、世間がみんなさうなれば、却つて貞女だの、節婦だの、といふものが、爪はじきをされようも知れないわ。

旦那は、また、何の徳があつて、私を自由にするんだらう。すつかり自分のものにしてしまつて、私の身體を縛つたらうね。食べさして置く故だといへば、私や一人で針仕事をして、くらかねることもないわ。ねえ、芳さん、芳さんてばさ。」

少年は太くこの答に窮して、一言もなく聞きたりけり。



お貞はなほも語勢強く。

「眞個に蟲のいゝ談話ぢやないかね、それとも私の方から、良人になつて下さいって、頼んで良人にしたものなら、そりや何様ことでも我慢が出来るし、些少も不足のあるもんぢやあ無いが、私と旦那なんざ、え、芳さん、夫にした妻ではなくって、妻にした良人だもの。何も私が小さくなつて、いふことを背いて縮んで居る義理もなし、操を立てるにも及ばないぢやあ無いか。

芳さんとだつて左様だわ。何もなかをよくしたからとつて、不思議なことはないぢやあ無いかね。此間騒ぎが持上つて、芳さんがツレ駈出した、あの時でも、旦那がいろ／＼むづかしいからね、(はい、芳さんとは姉弟分になりました。何ういふ縁だか知らないけれど、私が銀杏返に結つて居ますと、亡なつた姉様に背てるつて、彼の兒も大層姉おもひだと見えまして、姉様々々ツて慕つてくれますもんですから、私もつい可愛くなります。と無理だとは言はれないつもりで言つたけれど、(他人で、姉弟といふがあるものか)ツて、眞底から了簡しないの。傍に居た伯父さんも、伯母さんも、矢張おんなじやうなことを言つて、(ふむ、そんなことで世の中が通るものか。言やうもあらうのに、ナニ姉弟分だ。)と斯うさ。口惜しいぢやあないかねえ。芳さん、たと

ひ芳さんを抱いて寝たからたつて、二人さへ潔白なら、其で可いちやあないか、旦那が何と言つたつて、私やちつとも構やしないわ。」

お貞は恚謂へりしまで、血色勝れて、元氣よく、いと心強く見えたりしが、急に語調の打沈み

「しかし斯うはいふものの、芳さん世の中といふものがね、それぢやあ合點しないとさ。たとひ芳さんと私とが、何様に潔白であつたからつても、世間ぢやさうとは思つてくれず、(へむ、腹合せの姉弟だ。)と一萬石に極つちまふ！旦那が悪いといふでもなく、私と芳さんが悪いのでもなく、唯悪いのは世間だよ。

どんなに二人が潔白で、心は雪のやうに清くツてもね、泥足で踏みにじつて、世間で汚くしてしまふんだわ。

雪といへば御覽な、冬になつて雪が降ると、此處の家なんざ、裏の地面が畠だからね、木戸があかなくツて困るんだよ。理窟を言へば同一で、垣根にあるだけの雪ならば、無理に推せば開くけれど、すつとむかうの畠から一面に降りつゞいて、其力が同一になつて、表からおすのたもの。何うして、何といはれても、世間にやあ口が開かないのよ。

男の腕なら知らないこと、女なんざ其を無理にこじあげようとすると、呼吸切がしてしまふの。



でも芳さんは士官になるといふから、今に大將にでもおなりの時は、其力でいくらかも世間を負かしてしまつて、何にも言はさないやうに出来もしようけれど、今といつちやあ唯た二人で、何うすることもならないよ。

其とも神様や佛様が、私たちの手傳をして、力を添へて下さりや可いけれど、そんな願はかなはないわね。

婆々じみるツて芳さんはお笑ひだが、芳さんなどは其思遣があるまいけれど、可愛い兒でも亡くして御覽、そりやおのづと後生のことも思はれるよ。

あれは、えらい僧正だつて、旦那の勧める説教を聞きはじめてから、方々へ參詣つたり、教を聞いたりするんだがね。なるほどと思ふことばかり、それでも世の中に逆らつて、それで、御利益があるツてことは、些少も聞かしたくあくれないものを。

戸を推ツつけてる雪のやうな、力の強い世の中に逆らつて行かうとすると、そりや弱い方が殺されツちまふわ。さうすりやもう死ぬより他はないぢやないかね。

私ももうく死んでしまひたいと思ふけれど、それがまたさうも行かないものだし、このごろぢや芳さんといふ可愛いものが出来たからね、私や死ぬことは嫌になつたわ。眞個さ！自分の兒が可愛いとか、芳さんと斯うやつて談話をするのが嬉しいとか、何でも樂みなことさへありや、

たとひ辛くツても、我慢が出来るよ。何うせ、私は意氣地なしで、世間に負けて居るからね、そりや旦那は大事にもする、病氣が出るほど嫌な人でも、世間にや勝たれないから、たとひ旦那が思ひ切つて、縁を切らうといつてもね、どんな腹いせでも旦那にさせて、私や、あやまつて出て行かない。」  
と齒をくひしめてすゝり泣きつ。

十二

お貞は幾年來獨り思ひ、獨り惱みて、鬱積せる胸中の煩悶の、其一片をだに嘗て洩せしことあらざりしを、いま打明くることなれば、順序も、次第も前後して、亂れ且つ整はざるにも心着か

で、再び語り續けたり。  
「いつちや女の愚癡だがね。私はさつきいつたやうに、世の中といふものがあつて、自分ばかりぢやないからと、斷念めて、旦那に事へては居るけれど、一日に幾度となく、もうふツく嫌になることがあるわ。

芳さんも知つておいでだ。つい此間のことだつて、晩方旦那の友達が來たので、私も其日は朝ツから、鹽梅が悪くツて、奥の室に寝て居た處へ、推懸けたもんだから、外に別に部屋はなし、



こゝへ出て坐つて居たの。

お客がまた私の大嫌な人で、旦那とは合口だもんだから、愉快さうに話してたツけが、私は頭痛がして居た處へ、其聲を聞くとなほ鹽梅が悪くなつて、胸は痛む、横腹は筋張るね、おひく薄暗くはなつて来る。暑いといふので燈火はつけずさ。陰氣になつて、いろんなことを考へ出して、つい堪らなくなつたから、横にならうと思つても、直ぐ背後に居るんだもの、立膝も出来なから、臺所へ行つて板の間にでもと思つたが、彼處にや蚊が酷いし、仕方がないから戸外へ出て、軒下にしゃがんで泣いてた處へ、丁どお前さんが来ておくれで、二階へ来いとおひひだから、そつと上ると、まあ、おとしよりが御深切に、胸を押して下すつたので、私やもう難有くツて、嬉しくツて、心ちや手を合せて拜んだわ。

おかげでやつと胸が開きさうになつて、ほつと呼吸をついた處へ、

(貞は其處に參つてをりませうな)と、壇階子の下へ来て、わざ／＼旦那が呼んだぢやあないかね。

私や餘りくさ／＼したから、返事もしないで黙つて居ると、おばあさんがお聞きつけなすツて、(階下へおいで、ね、ね、さうしないと悪い)ツて、皆なもうちやんと推量して、やさしく言つて下さるんだもの。

(此處に居たうございます!)と、おばあ様の膝に縋りついたの。

下ではなほ呼ぶもんだから、おばあさんが私のかはりに返事をなすツて、

(可いから、可いから)と、低聲でおつしやつてね、背を撫でて下さるもんだから、仕方なしに下りて行くと、お客はもう歸つて居てね、嫌な眼で睨まれたよ。

空いてる室がないもんだから、さういふ時には困つちまふ。アレ悪く取つちやあ困るわね。

何も芳さんに二階を貸して置いて、斯ういつちやあわるいけれど、はじめツから此の家は嫌ひなの。

水は悪いし、流元なんざ湿地で、いつでもじく／＼して、心持が悪いつちやあない。雪どけの時分になると、庭が一杯水になるわ。それから春から夏へかけては李の樹が、毛蟲で一杯。

其に宅中陰氣でね、明けて置くと往來から奥の室まで見透しだし、こゝいら場末だもんだから、いや、彼處の宅は何うしたの、斯うしたのと、近所中で眼を着けて、晩のお茶まで知つてるぢやあないかね。大嫌な猫がまた五六疋、野良猫が多いので、のそ／＼入つて、づう／＼しく上り込んで、追つてもにげるやうな優しいんぢやない。

隣の小猫はまた小猫で、それ井戸は隣と二軒で使ふもんだから、あすこの隔から入つて来ちやあ、疊でも、板の間でも、ニヤア／＼鳴いて歩行くわ。



隣の猫のこつたから、あのまた女房が大抵ぢやないのだからね、(家の猫を)なんて言はれるが嫌さに、打つわけには固よりゆかず、二三度干物でも遣つたものなら、可いことにして、まつはつて、からむも可いけれど、芳さん、ありや猫の疱瘡とでもいふのか不知。からだぢう一杯のときもので、一々膿をもつて、まるで、毛が抜けて、肉があらはれてね、汚なくつて手もつけられないよ。其がさ、昨夜も蚊帳の中へ入込んで、寝て居た足をなめたのよ。何の因果だか、もうも猫にまで取着かれる。」

と投ぐるが如く言ひすてつ。苦笑して呶きたり。

「ほんとうに泣より笑だねえ。」

十三

お貞の言途絶えたる時、先刻より一言も、ものいはで渠が物語を味ひつゝ、是非の分別にさまよへりし如き芳之助の、何思ひけむ呵々と笑ひ出して、

「はゝゝ、姉様は陰辨慶だ。」

お貞は意外なる顔色にて、

「芳さん、何が陰辨慶だね。」

「だつて其様に決心をして居ながら、一體僕の分らないと謂ふのはね、人ががらりと戸を明けると、眼に着くほどびつくりして、どきり！する様子が確に見えるのは、何ういふものだらう。髯の留守に僕と談話でもして居る處へ唐突に戸外があけば、いま姉様がいつた世間の何とかで、吃驚しないにも限らないが、斯うして見るに、何にも其時にや限らないやうだ。何時でも左様だから可笑ぢやないか。それに姉様のは口でいふと反對で、髯の前ぢやおどくして、何だか無暗に小さくなつて、一言ものをいはれても、はッと呼吸のつまるやうに、おびえ切つて居る癖に。今僕に話すやうぢや、酸いも、甘いも、知つて居て、旦那を三錢とも思つてやしない。僕が二厘の湯銭の剩錢で、(ちよいとこさ)を追返したよりは、なほ酷く安くしてゐるんだ。其癖、世間ぢや、(西村の奥様は感心だ。今時の人のやうでない。まるで嫁にきたてのやうに、旦那様を大事にする。婦人は如彼行かなければ嘘だ。貞女の鑑だ。しかし西村には惜しいものだ。)なんとさう言つてゐるぞ。さうすりや世間も恐しくはなからうに、何だつて、あんなにびく／＼するのかなあ。だから姉様は陰辨慶だ。」

と罪もなくけなしたるを、お貞は聞きつゝ、微笑みたりしが、不圖立ちて店に出で行き、往來の左右を視め、舊の座に歸りて四邊を向し、また板敷に伸上りて、裏庭より勝手などを、巨細に見て座に就きつ。



「其はね、芳さん、斯うなのよ。」

といふ聲もハヤふるへたり。

「芳さんだと思つて話すのだから、さう思つて聞いておくれ。」

私はね、可い可い。其つもりで聞いておくれ。私はね、何時頃かといふ確なことは知らないけれど、いろんな事が重なり／＼してね、旦那が、旦那が、何うにかして。

死んでくれりやい。死んでくれりやい。死ねばい。死ねばい。

とさう思ふやうになつたんだよ。あ、罪の深い、呪詛ふのも同一だ。親の敵でもあることか、人並より私を思つてくれるものを、(死んでくれりやい)と思ふのは、何うした心得違ひだらうと、自分で自分を叱つて見ても、矢張何うしてもさう思ふの。

其念が段々嵩じて、朝から晩まで、寝てからも同一ことを考へて、何うしても其了簡がなほらないで、後暗いことはないけれど、何に着け、彼に着け、一寸の間も其念が離れやしない。始終其ばかりが氣にかゝつて、何をしても手に着かないしね、ぢつと考へこんで居る時なんぞ、なほのこと、何にも思はないで其事ばかり。あ、人の妻の身で、何たる恐しい了簡だらうと、心の鬼に責められちやあ、片時も氣がやすまらないで、始終胸がどき／＼する。

其がといふと、私の胸にあることを、人に見付かりやしまいかと、左様思ふから恐怖んだよ。

わけても、旦那に顔を見られるたびに、あの眼が、何だか腹の中まで見透すやうで、おど／＼しずみや居られない。(貞)ツて一聲呼ばれると、直ぐその、あとの句が、(お前、吾の死ぬのが待遠いだらう。)とかう来るだらうと思ふから、はつとしないぢや居られないわね。其で何ぞ外のことを言はれると、ほつと氣が休まつて、其嬉しさつちやないもんだから、用でも、何でも、いそいそする。

其れにかうやつて、こゝへ坐つて、一人でものを考へてる時は、頭の中、ぐる／＼／＼、(死ねば可い)といふ、鬼か、蛇か、何ともいはれない可恐ものが、私の眼にも見えるやうに、眼前に駈まはつて居るもんだから、自分ながら恐しくツて、観音様を念じて居るの。そこへがらりと戸を開けられちやあ、何うして慌てずに居られよう。(あ、めッかつた。)と、もう死んだ氣になつちまふ!

其が心配で、心配で、何うぞして忘れたいと思ふから、けもないことにわあ／＼騒いだり、笑つたり、他所めには、さも面白さうに見えようけれど、自分ぢや泣きたいよ。あとではなほさら氣がめいッて、唯しよんぼりと考へ込むと、また、いつもの(死ねばい)が見えるやうなの。

恐しくツて堪まらないから、何うぞ此念がなくなります様にと、観音様に願つても、罪が深いせなのか、段々強くなるばかり。



氣のせるか知らないけれど、旦那は日に／＼血色が悪くなつて、次第に弱つて行く様子、こりや思ひが届くのかと考へると、私やもう居ても起つても堪らない。

だから旦那が煩ひでもすると、ハツと思つて、こりや何うでも治さないと、私が呪詛殺すのだと、もう／＼左ほどでもない病氣でも、夜の目も寝ないで介抱するが、お醫者様のお薬でも、私の手から飲ませると、却つて毒になるやうで、何でも半日ばかりの間は、今にも藥の毒がまはつて、血でも吐きやしないか不知と、何うして其間の心配といふものは！でも其でもやつぱり考へることといつたら、ちつとも違はない、(死ねば可い。)で、早くなほつて欲しいのは、實は(死ねば可い。)と思ふからだよ。

ねえ、芳さん分つたらう。もう胸が一杯で、口も利かれやしないから、後生だ、推量しておくれ。も、私や、私はもう芳さん何うしたら可いんだねえ。」

と身を震はしたるいぢらしさ！

お貞がこの表情に、少年は太く動かされつ。思はず暗涙を催したり。

「あ、姉様は可哀さうだねえ。僕が、僕が、僕が、何うかしてあげようから、姉さん死んぢやあ不可いよ。」

お貞は聞きて嬉しげに少年の手をぢつと取りて、

「嬉しいねえ。何の自害なんかするもんかね、世間と、旦那として私をこんなにいぢめるもの。いぢめ殺されて負けちや卑怯よ。意氣地が無いわ。可いよ、そんな心配は要らないよ。私や面あてにでも、生きて居る。たとひ此上幾十倍のつらい悲しいことがあつても、屹と堪へて死にやあしないわ。と心強くはいつて見ても、死なれないのが因果なのだねえ。」

ほろりとして見る少年の眼にも涙を湛へたり。時に二階より老女の聲。

「芳や、歸つたの。」

「あれ、おばあさんが。」

「唯、唯今。」

#### 十四

二段ばかり少年は壇階子を昇り懸けて、唯顧みて驚きぬ。時彦は歸宅して、はや上口の處に立てり。

我が座を立ちしと同時ならむ。と思ふも見るもまたくま、さそくの機轉、下を覗きて、

「もう、奥様、何時です。」

「唯。」



とお貞は起ちたるが、不意に顛倒して、起ちつ、居つ。うろく四邊を見廻す間に、時彦は土間に立ちたるまゝ、肅然として帯の間より、懷中時計を取出し、丁寧に打視めて、少年を仰ぎ見むともせず、

「五十九分前六時です。」

「憚様。」

と少年は聲高く二階に上れり。

時彦は時計を納めつ。立ちも上らず、坐りも果てざる、妻に向ひて、沈める音調、

「貞、床を取つてくれ、気分が悪いぢや。貞、床をとつてくれ、気分が悪いぢや。」

面は死灰の如くなりき。

十五

時彦は其時よりまた起たず、肺結核の患者は夏を過ぎて病勢募り、秋の末つ方に到りては、恢復の望絶果てぬ。其間お貞が盡したる看護の深切は、實際隣人を動かすに足るものなりき。

渠は良人の容體の危篤に陥りしより、殆ど一月ばかりの間帯を解きて寝しことあらず、分けて此頃に到りては、一七日未だ嘗て瞼を合さず、渠は茶を断ちて神に祈れり。鹽を断ちて佛に請へ

り。然れども時彦を嫌惡の極、其死の速かならむことを欲する念は、良人に藥を勧むる時も、其疼痛の局部を擦る隙も、須臾も念頭を去りやらず。甚しい哉其念の深く刻めるや、おのが幾年の壽命を縮め、身を以て神佛の贄に供へて、合掌し、瞑目して、良人の本復を祈る時も、其死を欲するの念は依然として信仰の靈を妨げたり。

良人の衰弱は日に著けきに、こは皆おのが一念よりぞと、深更四隣静まりて、天地沈々、病者の爲に洋燈を廢して行燈にかへたる影暗く、隙間も風もあらざるにぞ、そよとも動かぬ灯影にすかして、其寂たること死せるが如き、病者の面をそと視めて、お貞は顔を背けつ、頤深く襟に埋めば、時彦の死を欲する念、こゝぞと熾に燃立ちて、殆ど我を制する能はず。そがなすま、に委し置けば、奇異なる幻影眼前にちらつき、燧と火花の散る如く、良人の膚を犯す毎に、太く絶え、細く續き、長く幽けき呻吟聲の、お貞の耳を貫くにぞ、あれよくとばかりに自ら恐れ、自ら悼み、且つ泣き、且つ怒り、且つ悔いて、殆ど其身を忘るゝ時、

「お貞。」

と一聲、時彦は、鬱し沈める音調もて、枕も上げて名を呼びぬ。

この一聲を聞くとともに、一桶の水を浴びたる如く、全身の血は冷却して、お貞は、  
「唯々。」



と戦きたり。

時彦はいとも静に、

「お前、此頃から茶を断つたな。」

「否、何も貴下、其様なことを。」

と幽かにいひて胸を壓へぬ。

時彦は頤のあたりまで、夜着の襟深く、仰向に枕して、眼細く天井を仰ぎながら、

「鹽断もしてゐるやうだ。一昨日あたりから飯も食べないが、一體何ういふ了簡ぢや。」

(貴下を直したいために)といはむは、渠の良心の許さざりけむ、差俯向きてお貞は黙しぬ。

「あかりが暗い、搔立てるが可い。お前が酷く瘡せつこけて、さうしよんぼりとしてゐる處は、何う見ても幽霊のやうぢや、行燈が暗い故だらう。な。」

「はい。」

お貞は、深夜幽霊の名を聞きて、ちりけもとより寒さを感じつ。身震ひしながら、少しく居寄りて、燈心の火を搔立てたり。

「其様に身體を弱らせて何うしようといふ了簡なんか。うむ、お貞。」

根深く問ふに包みおほせず、お貞はいとも小さき聲にて、

「よく御存じでございます。」

「む、お前のすることは、一々吾や知つとるぞ。」

「え。」

とお貞はすり退りぬ。

「茶断、鹽断までしてくれるのに、吾は何故早く死なんのかな。」

お貞は聞きて興覺顔なり。

時彦の語氣は落着けり。

「疾く死ねば可いと思つて居つて、何故そんな眞似をするんだな。」

と聲に笑ひを含めて謂へり。お貞は殆ど狂せむとせり。

病者はなほも和かに、

「何、さう驚くにや及ばない。昨日今日にはじまつたことではないが、お貞、お前は思つたより遙に恐しい女だな。彼は憎い、憎い奴だから殺したいといふことなら、吾も了簡のしやうがある

が、(死んでくれりや可い。)は實に残酷だ。人を殺せば自分も死なねばならぬといふ先づ世の中に

定規があるから、我身を投出して、つまり自分が死んで懸つて、而して其憎い奴を殺すのぢや。

誰一人生命を惜まぬものはない、生きて居たいといふのが人間第一の目的ぢやから、其生命を打



棄てて懸るものは、もう望を絶つたもので、こりや、憐むべきものである。

お前のはさうぢやあない。(死んでくれりや可い)と思ふので、つまり精神的に人を殺して、何の報も受けないで、白日青天、嫌な者が自分の思ひで死んでしまつた後は、其こそ自由自在の身ぢやでの、仕たい三昧、一人で勝手に榮耀をして、世を愉快く送らうとか、好きな芳之助と好いとをしようとか、怪しからんことを思つて居る、つまり希望といふものがお前にあるのだ。

人の死ぬのを祈りながら、あと／＼の樂みを思つて居る、そんな太い奴があるもんか。

吾は屹と許さんぞ。

さう／＼好きなまねをお前にされて、吾も男だ、指を啣へて死にはしない。

と何時も思つて居たんだが、もう此肺病には勝たれない、否、つまり、お前に負けたのだ。

して見れば、お貞、お前が呪詛殺すんだと、吾がさう思つても、仕方があるまい。

吾は何の道助からないと、初手ツから斷念めてるが、お貞、お前の望が叶うて、後で天下晴に樂まれるのは、吾は何うしても斷念められない。

謂ふと何だか、女々しいやうだが、報のない罪をし遂げて、あとで樂をしようといふ、蟲の可いことは決して無い。また然うさせるやうな吾でも無い。

お貞、謝罪をしちやあ可かんぞ。お前は何も謝罪をすることもなし、吾も別に謝罪を聞く必要

も認めんぢや。悪かつたというて謝罪をすれば其で済む、謝罪を聞けば了簡すると、そんな氣樂なことを思ふと、吾のいふことが分るまいでな。何でもしたことはない、それ相當の報酬といふものが、多くもなく、少なくもなく、ちやうど可いほどあるものだ、然う思つてろ！可いか、お貞、……お貞。」

と少し急ぎ込みて、絶え入るばかりに咽びつ、暫時苦痛を忍びしが、がら／＼と血を吐きたり。

何時恚ることのある際には、一刀浴びたる如く、蒼くなりて縊り寄りし、お貞は身動だもなし得ざりき。

病者は自ら胸を抱きて、眼を瞑ること良久しかりし、一際聲の嘎びつ、

「斯う謂へばな、親を蹴殺した罪人でも、一應は言譯をすることが出来るものと、お前は無念に思ふであらうが、法廷で論ずる罪は、囚徒が責任を負つてゐるのだ。

今お前が言譯をして、今日から何んな優しい氣にならうとも、とても助からない吾に取つては、何の利益も無いことで、死んでしまへば、それ、お前は日本晴で、可いことをして樂むんぢや。

然ううまくは屹とさせない。言譯がましいことを謂ふな。聞くやうな吾でもなし。またお前だつて然うだ。人殺よりなほひどい、(死んでくれれば可い)と思ふほどの度胸のある婦人でないか。



しつかりとしろ！うむ、お貞。」

お貞は屹と顔を上げて、

「はい、決して申譯はいたしません。」

といと潔よく言放てる、兩の瞳の曇は晴れつ。旭光一射霜を拂ひて、水仙忽ち凜とせり。

病者は心地好げに頷きぬ。

「可し、よく聞け、お貞。人の死ぬのを一日待に待ち殺して、あとでよい眼を見ようといふは、ずるいことだ。考へて見ろ。お前は今までに人情の上から吾に數へ切れない借があらう。其をな、其負債をな。今吾に返すんだ。吾は何うしても取らうといふのだ。」

いと恐しき聲にもおぢず、お貞は一膝乗出して、看病疲れに繕はざる、亂れし衣紋を繕ひながら、胸を張りて、面を差向け、

「旦那、何うして返すんです。」

「離縁しよう。いまこゝで、此場から離縁しよう。死に懸つて居る吾を見棄てて、芳之助と手を曳いて、温泉へでも湯治に行け。だがな、お前は家附の娘だから、出て行くことが出来ぬと謂へば、ナニ出て行くには及ばんから、床ずれがして寝返りも出来ない、この吾を、芳之助と二人で負つて行つて、姨捨山へ捨てるんだ。さ、どちらでも構はない。唯、(人の妻たる者が、死に懸つ

てる良人を見棄てた。)と斯ういふことが世間へ知れて、世の中の者がみんな其氣でお前に附合へば、それで可い、それで可い。些少は負債が返せるのだ。

しかし、これはお前には出来ぬこつた。お前は世間體といふものを知つてゐるから、平生、吾が健全な時でも、そんな事は嘸にも出さないほどだ。其が出来くるなら、もう疾くに離別してまつたに違ひない。うむ、お貞、何うだ、それとも見棄てて、離縁が出来るか。」

お貞は一思案にも及ばずして、

「唯、そんなことは出来ません。」

病者は然もこそと思へる状なり。

「其ではお貞、お前の念ひで死なないうちに、……吾を殺せ。」  
と静にいふ。

「え、貴下を！」

「うむ、吾を。お貞、するい根性を出さないで、表向に吾を殺して、公然、良人殺しの罪人になるのだ。お貞、良人殺の罪人になるのだ。うむお貞。

吾を見棄てるか、吾を殺すか、うむ、何方にするな。何でも負債を返さないでは、餘り冥利が悪いで無いか。いや、ないか處でない！さうしなけりや許さんのだ。うむ、お貞、何方にする、



殺さないよ、離縁にする！」

「いと厳かに命じける。お貞は決する色ありて、

「貴下、そ、そんなことを、私にいつてもい、ほどのことがあるんですか。」

聲ふるはして屹と問ひぬ。

「應、ある。」

と確乎として、謂ふ時病者は傲然たりき。

お貞は彼の女が時々神經に異變を來して、頭恰も破るゝが如く、足はわななき、手はふるへ、満面蒼くなりながら、身火烈々身體を燒きて、恍として、茫として、殆ど無意識に、されど深長なる意味ありて存する如く、満身の氣を眼にこめて、其瞳をも動かさず、ぢつと人を目詰むれば、他をして身の毛をよだたすことある、其時と同一容體にて、目まじろぎもせず、死せるが如き時彦の顔を瞻りしが、俄然、崩折れて、ぶるゝと身震ひして、飛着く如く良人に縋りて、血を吐く一聲夜陰を貫き、

「殺します！旦那、私はもう……」

とわつとばかりに泣出しざま、擲たれたらむかの如く、障子とともに僵れ出でて、衝と行き、勝手許の暗を探りて、渠は得物を手にしたり。

時彦はじめの如く顔の半ばに夜具を被ぎ、仰向に寝て天井を眺めたるまゝ、此方を見向かむともなさずして、いとも靜に、冷かに、着物の袖も動かさざりき。

諸君、他日もし北陸に旅行して、次手ありて金澤を過りたまはむ時、好事の方々心あらば、通りがかりの市人に就きて、化銀杏の旅店？と問はれよ。老となく、少となく、皆直ちに首肯して、其道筋を教へ申さむ。すなはち行きて一泊して、就褥の後に御注意あれ。

間廣き旅店の客少なく、夜半の鐘聲森として、凄風一陣身に染む時、長き廊下の最端に、蹇然たる足音あり寂寞を破り近着き來りて、黒きもの颯とうつる障子の外なる幻影の、諸君の寢息を覗ふあらむ。其時聲を立てられな。もし咳をだにしたまはば、怪しき幻影は直ちに去るべし。忍びて様子をうかがひ給はば、すつと障子をあくると共に、銀杏返の背向に、あとあし下りに入り來りて、諸君の枕邊に近づくべし。其瞬時眞白なる細き面影を二見して、思はず悚然とし給はむか。トタンに件の幽靈は行燈の火を吹消して、暗中を走る蹇音、遠く、遠く、遠く、遠く、遠く、長き廊下の盡頭に至りて、其まゝ、ハタと留むべきなり。

夜はいよゝ更けて、風寒きに、怪者の再來を慮りて、諸君は一夜を待明かさむ。

明くるを待ちて主翁に會し、就きて昨夜の奇怪を問はれよ。主翁は黙して語らざるべし。再び聞かれよ、強ひられよ、なほ強ひられよ。主翁は拒むこと能はずして、愁然として其實を語るべ



きなり。

聞くのみにてはあき足らざらんか、主翁に請ひて一室に行け。密閉したる暗室内に俯向き伏したる銀杏返の、其背と、裳の動かずして、恰もなきがらの如くなるを、ソト戸の透より見るを得べし。これ蓋し狂者の舉動なればとて、公判廷より許されし、良人を殺せし貞婦にして、旅店の主翁は其伯父なり。

されど室内に立入りて、其面を見むとせらるゝとも、主翁は頑として肯ぜざるべし。諸君涙あらば強ふるなかれ。いかんとなれば、狂せるお貞は爾來世の人に良人殺しの面を見られむを恥ぢて、長くこの暗室内に自ら其身を封じたるものなればなり。渠は恐懼て日光を見ず、もし強ひて戸を開きて光明其膚に一注せば、渠は立處に絶して萬事休まむ。

光を厭ふこと斯の如し。されば深更一縷の燈火をもお貞は恐れて吹消し去るなり。

渠は爾く活きながら暗中に葬り去られつ。良人を殺せし妻ながら、諸君請ふ恕せられよ。敢て日光をあびせて以てこの憐むべき貞婦を射殺すなかれ。然れども其姿をのみ見て面を見ざる、諸君は嗚ぞ本意なからむ。然りながら、諸君より十層二十層、なほ幾十層、こゝに本意なき少年あり。渠は活きたるお貞よりも寧ろ其姉の幽霊を見むと欲して、猶且つ爾かするを得ざるものをや。

一之卷



墓参 彫刻師 紅白 學校 秀花 將棊

墓 参

十一の時母みまかり給ひつ。年紀十四の春のはじめ、其の命日に當りし日なりき。活計の忙しきに、たゞ懐しく思ふのみ、御身代りてものせよといふ、父の言葉身に染みつゝも、予は墓参にとて立出でぬ。

蒼空には風の聲、野面に蝶の飛交ふにて、纔に風もありと見ゆ。春興轉た酣なれば、人さまさまに浮かれいでて、市をはなれ、坂を攀ぢ、日暮の丘の眺望あたり、扇が原、題目堂、鳶が峰の此處彼處、一群々々落合ひて、筵を擴げ、氈を敷き、割籠を開き、吸筒を傾けなどして、老若男女の集へる上に、鳶は颯と翼をのして、靜に打舞ふ輪の中に、湖も見え、川も見え、橋見え、里見え、城見えて、市街も眼下に見え渡る、其麗かさに引替へて、ひとむら樹立松杉の鬱蒼として生茂れる、あゝ、墓原の春寒さよ。

唯見れば母の墳墓の、誰が悪戯にや傍なる松の根に倒されて、臺石ばかり残りたり。こは其時に限りしならず。舊此處に何とかいひし臨濟宗の巨刹ありしが、何時の頃か亡び果て



て、今は唯そのなごりの鐘撞堂に、一杵の撞木懸れるのみ。寺領なりける墓地を開きて、染井或は谷中の如く、土地の埋葬地としたりしなるが、固より墓守る僧もなく、春の山、秋の山、をりをり茶店を營むばかり、一軒家もあらざるに、町人が遊山の場とは、別に隔ての垣もなく、松杉の其の樹立にて、境をなせるに過ぎざれば、わるあがきする里の兒、醉漢などの侵入りて、墓石をおしこかし、印の小松の枝をなぎ、卒塔婆を抜き棄てなどするが、墓あらしとて數々あり。然らぬだに、手向の水も涸れがちや、去にし月捧げたる、花の枯れしも果敢なきに、恚う荒れ果てし草葉の蔭の、母の亡骸も年経れば、あとも留めずならむかと、はやくも涙さしぐみぬ。庭の隅なる茶の木の蔭に、蛙の墓を築きし手に、其の墓石を搔抱き、舊の處に直し据ゑむと、幼心に力も料らず、押せばとて、曳けばとて、如何して動くべき。

むねのせまりて切なきに、といきして打仰ぐ、樹間の天は藍の如く、ひらりくと風の影、日脚傾く塔婆にうつりて、哄とさめめく笑聲、遠近に聞ゆるにぞ、心なき人たちよ、と覺えず眉の動きしが、詮術もなく首垂れつゝ、然るにても打棄て去なむが口惜く、効あらじと知りながら、再び犇と取絶り、傍目も觸らで力を籠めたる、肩に手を置き背後より、

「あなた、お待ち遊ばせ。あの……」  
と聲優しく、ふと呼びかくる者あるにぞ、振仰ぎ、見返れば、襲着したる妙なる姿、すらりと

したるが立ちたりき。其美しさ氣高さに、まおもてより見るを得ず、唯眞白なる耳朶より、襟脚にかけ、頬にかけ、二筋、三筋、はらくと、後毛の亂れかゝりたる横顔を、密と見たるのみ、はなじろみぬ。

渠は片頬に微笑みながら、

「今ね、誰かに然ういつて、お墓を直さしてあげますからね、……お可哀相に、」

といひかけつゝ、其瞬間一點の、一事の胸にあることなく、無心なりし予が面を、ちつと視めて、面を背向け、

「それではね、待つておいでなさいませよ。」  
と行きかけて、また見返りぬ。

### 彫刻師

貧しきを心に留めず、氣まゝに註文を打棄て置くを、名人上手と謂ふべくば、彫刻師なりし予が父も、名工の一として世に數へられ給ひなむ。

「長常さんはこちらですか。」  
と細工場の格子に訪なふ人あり。跪きて迎ふるとて、予は其顔を見て驚きぬ。來客は調子高に、



「おや此家のか。」

とまづいへり。

をさなきわれは、ものをもいはず、慌しく引返し、細工盤に打向へる、父の許に駈け行きて、

「父上、あの、過日來話した、あの、母上の。あの、あの、

と口早に急込むにぞ、父は皺みたる額をあげ、

「あの、何だ。」

「え、母上のお墓を直して、あの、直してくれましたね、其人が來ましたよ。」

父は聞くより色動けり。

「や、何、それは。早く、これ、何だ。汝、早く此方へといはんかい。」

奥深からぬ住居なれば、早くも彼方にて、聞着けけむ。

「御免なさいよ。」

と打笑みながら、客は此方に入來れり。無愛想なる父の珍しくも歡び迎へて、

「これは、これは。」

「はい、はじめまして。」

「いや、よくおいでなさいました。え、何かはや悴がそ、つかしうございますので、まことに

失禮。先達ては、また何うも難有いお志で、佛も嘸喜びましたことであらうと、……はい。何が貴方、左様なお情を蒙りながら、何故お姓名を承はらないと、散々叱言をいひました。根つから世間知らずで、とつともう役たゝず、まことに不念な、行届きませぬ、お住所も分りませぬば、御禮にも出られませず、残念に存じましたに、まあ、よくおいで下されました。悴や、おわびを申さぬか。」

と懇に謝したるを、迷惑げに打消したり。

「然う御丁寧では痛み入ります。別に私があつていたしたといふでもなし、家のお嬢様が何です、あたりが酷く亂暴だったので、何處かあの墓原の方へ一人で氣を抜きに去らつしやつたんださうです。すると御子様ですか。お墓につかまつて、泣きさうにしておいでなすつたのを見て、お可哀相でならないから、汝行つて直して上げて、とおつしやるので。え、友的にえ男と私と二人でね、昇いでせましたばかりなんで、深切な御當人はお嬢さまなんです。何ね、飛んだ其氣の優しいお嬢だもんですから、歸つてからも何うも母上様がおありでないやうだ、そりやもうお召物のやうすでも能く知れる、お可哀相に何處の方だらうつて噂をして居りました。何ですかい、矢張そのおつかさんがおいでなさいませぬですかね。」

父はもろくも打濕りぬ。



「はい、これが十一になります時、二十九で亡くなりました。誠にはや、不心得な奴でな、は、は、腹が立つてなりません。お嬢様とおつしやれば、お若からうに、御奇特な。何とも、お禮の申しやうもございません。」

と再び頭を下げるに、壯俊は手をあげて、

「それでは、私が御挨拶をうけるやうで、却つて何です、もうこれだけにいたしませう。時に今日あがりしたのは、實は其お嬢様の御使なんです、何うも、慫うなつて見ると、恩に被せますやうで、些と申しにくくなつたやうですが、何ですか、先々月からお頼み申して置きました、あの指輪とやらですが、まだお出来にはなりますまいかね。時計屋の深水です。」

父は驚き、

「え、それぢや貴方は。」

「はい、店のものです。何時も小僧を寄越しますが、今日は一寸次手がございました、私に參つて、よくお願い申してくれと、こんなことで。え、決して御催促はいたしません、お間にはどうぞお心がけなすつて下さい。はい、不思議な御縁です決して恩にや被せませんが、何ですな、一番恩に被て、はやく拵へて下さると、なほ結構ですな、は、。と笑うて歸りける。」

## 紅 白

指環は日を経て出来あがりぬ。父は傍にわれを招きて、

「新次、お待兼の指環が出来たぜ。お前を可哀さうだといつてくれる、深水の娘の註文だ。念入りでやらかしたか。」

と打傾きく、細工ぶりを、とみかうみて、

「うまいな、こりや、近來の大出来。我ながらよくしたものだ。新次、お前なんざ、其年紀で、其明い目を持つて居ても、こりやとても見えめえな。手放して人に與るなあ、何だか惜しくつてならないが、あつらへものだ、持つて行け。そしてな、長常銘を鑿りました、と大威張で渡して來い。」

予はいそくして出で行きぬ。

學校より一ツ此方なる辻の角に、唐物店とむかひあひて、間口こそは劣りたれ、奥行深き、時計屋の、行歸に見る店ながら、取分け其日はもの珍しく、また懐しく、たふとく覺えて、直ぐには店に入りかねたり。

小路へそれて電信の柱に凭りて、硝子越に、其方を透してためらひしが、折よく前の日の使の



人、奥の方より出で来しにぞ、衝と進み近づきて、

「お誂への指環が。あの……」

「あゝ然うですか、」

と軽く受けて、土間なる椅子を指さしつゝ、

「おかけなさい。一寸、これ何や、奥へ行つて、金や、お嬢様に申して来な。」

小僧は良ありて引返し、

「ぢや、直ぐこつちからお廻りなすつて、すつとお通りなさいまし。」

と中戸をあけて導きぬ。通庭の突當に、二戸前の藏ならびたり。壁暗く、柱明るく、高き破風

口より日影さして、譬へむ方なき奥床しさ。

勝手を働く一人の下婢の珍しげに瞻るに、顔見らるゝ心地して、予は足早にぞ通り過ぎたる。

一室なる火鉢の傍に、其人ぞ居たりける。煩ひやしたまひし、着瘦の肩薄寒げに、襟懸けたる半

纏着て、今日は後毛のうるさきまで、咽喉を掠めてこぼれかゝり、重き頭を結へたる、顛卷の切

置蒼なれば、顔少しく蒼みて見えぬ。

座蒲團を此方に進むるさへ、たゆげに手首の細りたるが、笑顔を向けてものやさしく、

「お使柄恐れ入りますこと。」

「あの、大變おそくなつて、と然う申しました。」

「いえ、ついねえ、待遠いので、おせかし申して、お忙しうござんせうのに。」

いひつゝ、渠は掌に、吉野紙の包をひらきて、黄金の無垢の指環を据ゑ、そと打返して視めしが、

「綺麗だこと。まあ勿體ないやうですなえ。母様、

「どれ。」

と人柄のよき母様も、火鉢ごしに瞳を寄せ、

「何うもねえ。これぢやなるほど一寸やそつとぢや出来ない道理だよ。そして何かい、此お兒か

い。」

女は黙して頷きぬ。

「學校へおいでと見えます。まあ、折角御勉強なさいましよ。ちつと遊びにおいでだとい、ね。

おあひては無いけれど、庭も廣しさ、花がるたでもしませう。母様がおいでなさらなくつて、ま

あ何んなにお寂しからう。」

と溢るゝばかりの情の言葉、胸せまるほど嬉しくて、はきくものも得いはざりき。やがて歸

らむとしたりし時、白と紅と牡丹の形の打物を、清らかなる紙に捻りて、予がふところに推し入

れながら、



「父上によくお禮をおつしやつて下さいましよ。まことに結構に出来ました。そしてね、あなた。」と背後より裳を軽く拂きつゝ、する／＼と送り出でしが、(宜しく)とばかりいひすてて、彼方向きたまひし後姿、丈は予よりも高かりき。

### 學校

學校なる會話の時間は、ミリヤアド受持てり。

ミリヤアドは、年紀少き米國の美人なりし。ものいひ活々と、風采雄々しく、然も心の優しきが、四五年我國に住み馴れたれば、(お早う)(左様なら)なども、差支へず云ひならへり。二三外國の宣教師と、郷里の有志者と相料りて、布教の一種の手段として、英文と漢文を兼ね教ふる、英和學校といふを私立したるに、日々渠は出で來るなり。

學生はわがクラスにては、十名に過ぎざりき。全校を算ふるとも、百よりは多からざるべし。然は今こそあれ、其頃は外國人を見れば直ちにこれを異人と稱へつゝ、人か、あらぬかの如く、忌み、且つ卑みたる折なるに、殊に地方のことなれば、多少其道に心懸あるものも、憚りて、校に登るもの少なかりしを、予は予が父を信任したる、なにかしの勧誘に因りて、去年より教場に列りたるなり。

學生の中に年紀の長けたるは、三十四五なるも少なからず、最も少きも十八九、二十を越さぬが稀なれば、予のをさなきが珍しとか。

ミリヤアドは愛で親み、時としては予を遇するに、殆ど幼稚園の生徒をもてすることありき。課業果てて後ミリヤアドは、白墨持ちし手の指を、手中もて拭ひつゝ、衝と予が卓子のうしろに來ぬ。友はみなどや／＼と控所に立去りて、居残りたるは、予と、いま一人、富の市といふ盲目なり。

渠は唯會話の時間のみ列るなり。固より眼の盲ひたるものの、書を以て學ぶこと能はざれども、會話は其記憶によりて、多少得ることのあるべければ、いかなる目的のありてにや、切に入校を望みしを、校長には異議のありたれど、宣教師等のもと布教のために設けたる學校なればとて、遂に渠を許せしよし。雨の日も、風の日も、渠は缺席したりしことなく、目の見えぬに心他に觸れざれば、會話は組に伍して人に劣らず、予と成績を争ひ居るなり。

渠は年紀のころ二十八九、身の丈小さく肩瘦せたり。額少しく生えあがりて、五分刈の頭髮柔かに、眉薄く、鼻高く、唇白く、頤こけて、細長き顔の身體とはふさはしからず大なるに、白痘痕みち／＼たり。

親しく語りたることもあらねど、予ははじめより渠に對して、嫌惡の念を抱くことを、いかに



ともすること能はず。いはゆる蟲のすかぬにや、顔を見るだに疎ましかりき。

二人のみ残れるに、ミリヤアドは靴の音、裳の音軽く背後に来つ。恰も其前の一時間は、漢籍の講讀にて、文章軌範卷之五の、送王秀才序……韓文公とある處、開きたるまゝにして、テエブルの上にありたるを、予が肩越に瞻りけるが、ふと私怪隱居者、とある、私の字をば、美しく白き人指もて指さしつ、

「上杉様、私？」

予は微笑みて頷きたり。ミリヤアドはまた、乃知の處をさして、

「これ、乃の字……でせう。」

予はまた頷きぬ。ミリヤアドは得意になりて、建中ノ初、天子といふをば、

「それから天、子、旨いでせう。クラスの方、皆な覺えがわるい。私、じやうずに覺えました。」

と渠は嬉しげに微笑みたり。予は其得意を殺ぎやらむと、頭を掉りて、

「いけません。」

「まあ、いけません？」

と打撃みぬ。

秀

富の市は盲ひたる目に此方を見向きて、たゞにや〜と笑ひ居れり。

「天、子、と讀んぢやいけません。天子、天子様。」

ミリヤアドは打傾き、

「天子様、……天子様、あ、みかどのこと？」

「然うですとも。だから、天子でツちや違ひます。」

「はい、はい、お師匠様、何卒叱らないで教へて下さいまし。」

と手の甲以て涙を擦る眞似をしながら、ミリヤアドの酔興さよ。予が坐りたる同じ椅子に、窮屈らしく腰掛くる。袴のひださら〜と、右の袂に觸る、時、妙なる薰瀝と散りたり。

近々と予が面をのぞくやうに瞻りながら、

「お師匠様。」

また呼びかけて、傍にありたるノートの表紙に、其手にしたる鉛筆もて、何か落書をはじむる

にぞ、睨まねして、

「いけませんでば。」



「あら、叱らないで下さいまし。恐いお師匠様ねえ。」

「お師匠様もないもんです。」

「い、え、お師匠様、お師匠様、可愛らしいお師匠様、これは(力)の字？」

と鉛筆もて遂に(?)の字を書きつけぬ。

「違ひます。こゝは、力、と読むの。」

「あゝ、ちから、力——神様の——」

頷くを見また頷ける、ミリヤアドなほ飽かたで、あちこち漢字をあさりつゝ、王秀才の秀といふ

字を、とかくしてさがしあてたり。

「この字？」

「秀。」

「秀？」

「秀るとも讀むんです。」

「ひいづる？」

「まさること、勝つこと。」

「人に？」

「然うです。」

と答ふる顔を、屹と見たる、ミリヤアドは衝と立ちあがり、聲の調子も凛として、

「あなた、何故それを忘れました。わるい人、此頃は下稽古をして來ません。あなた一番年紀が

若い、そして一番よく出來ます。けれども、いまに負けてしまひませう、人にまけてはなりません。

「秀、秀。」

と肅として、師の威のそなはる立姿、思はず頭を垂るゝ時、ミリヤアドは足早に外の方にこそ

出きたれ。

「戒ひしと胸に中りて、さは人目にも見ゆるや。此頃はさてわれながら、いかで慙くまでも思

ふ。

指環をとゞけに行きしより、十日あまり早や過ぎぬ。其時渠にあひながら、胸に餘れる感謝の

情の、よいひつづくすべくはあらずとも、一言の挨拶は言はでかなはぬ儀なりしを、怪しきまで

口澁りて、彼方よりのものを言はるゝにさへ、抄々しくは答もせざりし。さげしまれずや、卑まれ

ずや、と益もなきことをのみ、思ひ續けて、寢つ、覺めつ。

堪へ難きまで懐しく、見たく、遊びに行きたきを、いはれしことの誠ならば、機よし遊びに來

れよと、など使して給はざる。要もなき身を何託つけに推して此方より行かるべき。忘れられし



か、棄てられしかと、終夜終日なやめばぞ。

悄然として掌に面を蔽ひて俯向きたる、耳許に口を寄せて、

「君、やられたね。」

と冷かに笑ふが如きは盲人なりき。

打僵したくも思ひしが、さする元氣もおとろへき。ものをもいはで歸途に就き、學校の門を出でむとする時、外にぞみたる婦人あり。數多き生徒の中に、人をもとむる状なりしが、予が姿を一目見るより、つか／＼と近づきて、

「貴下だ、貴下だ。もし、あのお秀様がおつしやいました、花を折つてあげますから、すぐお歸途に入らつしやいて。」

こは嘗て見しことある、深水の家の下婢なりき。

### 花

去にし年、母上病あらたまりて、ものを見ることをも得したまはざりしほどのことなりき。

寒さ烈しき頃なりしかば、奥の間なる三疊に、南枕に臥し給ひ、祖母あり、父あり、醫師あり、予といとけなき弟と、居坐ひ正しくかしくまりて、互に面を見つるほど、寂として身動もしたま

はざりし母上の、靜に雙の目を眠りしま、兩手を空にさしのべつ。また枕頭なる疊の上を、ものを取るさまをして、搔さすり搔さすりしたまひしを、父の見て差寄りて、いかにせし、欲し求むるものありやと、耳近ういはれしに、空にも、地にも美しく妙なる花の香はしき、紅なるが、紫なるが、白きがいろ／＼咲満ちたり、二人の兒等に手折りて取らせむ。見たまへ此處にも、あれ、かしこにも、と紅梅の苔綻ぶ狀に、結びたる唇とけて、うつとりと、かすかに微笑みたまひしかば、あはれ、いまはのうつ／＼にも、さまでに兒等のいとしきかと、予と弟とを引寄せつ、祖母のひたと泣きたまひしを、日を經、月を經、年經れども、なほまのあたり見る如く肝に銘じて覺えたり。

嬉しきかな。花折りくれし秀の心の、母の情に劣らじを。一枝は母に參らせて、兒の幸あるを見せまつらむ。一枝は父に、他は祖母に、残れる花は弟に半ば分ちて與へむと、深水の奥を辭して出で、心せはしく中戸をあけて、戸外に出でむとしたる時、

「清や、母様がね、お前御苦勞だが、一寸、八百屋まで。」

用を命ずる聲のする。この後數々來給はむに、心やすだてなるこそよけれ。貴少も遠慮したまふまじ、此方にも行儀見せて、送迎はなさじものをと、母親のいひたれば、秀も送りては出ざりし。予も其まゝに去らむとせしが、聲のするより思はずも戸に手をかけたる身を捻向け、唯見れ



ば今日も例の如く鬢の後毛數ふるばかり、横顔白くこぼれたり。

風にも堪へじといとほしかりし、前の日のさまには似て、病に勝ちたる姿雄々しく、全幅の風采の優しう見えて凛々しげなる、恐しき敵にではあはむ時、其袂にて庇はれなば、救はれ得べし、と頼母しく、うつかりと立ちたるを、ふと見返られて、耳許ぞ熱くなりぬる。

「またね、」

といふ聲聞流して、勢よく戸外に出で、店なる人に黙禮して、通を家路へ五歩ばかり、足ばやに行きかゝる、とむかひより、杖を持てさぐりながら、歩きつきの、然までには覺束なき状も見えて、彼の富の市來懸りたり。

擦違ふを遣りすこし、立どまりて見送れば、富の市はつかく〜と深水の店に入り行きしが、「は。」

とばかり茶の山高の帽の縁に手をかけたるのみ、脱ぎて挨拶なさむともせで、其ま、今予が出來れる、中戸をあけて入り行きぬ。

買物ならば店にてせむ、奥に入りしは知己よ。固より渠は盲人といへども、置く霜に足駄を印して、夜寒の景に敘せらるべき、さる境遇のものにあらず。資産ある家の長子にして、親もなほ世にあるが、十六の時激烈なる、天然痘にかゝりしたため、目の盲ひたるものよし、予は人傳に

聞きて知れり。

よしそれはともかくも、渠は何の要ありて、深水の家に出入るや、店のものに對したる其舉動を見ても知る、懇なるなかにあらではと、こゝろよからず感じてき。

渠には聊かかゝはりなく、何等の恨あるにあらず。先刻に學校にてミリヤアドに戒められて情れし時、一言いひたる言とて、機が機なり、わが耳の僻みと思へばそれまでなる、其を取りいでいふことかは。嘲る如く聞きたりしも、實は慰めくれむとて、いひかけたらむも知れざるを、何とてさまでに富の市の御身にこゝろよからざると、もし人の問はむには、予は其答に窮せしならむ。因果は神のみ知るものなり。

將 碁

がばり、がばり、がばり、がばり、白山米がばりがばりの、聲にまじりてなまぬるく、帽子焼ぢや、帽子焼ぢや、お腹の薬の帽子焼ぢや、子供衆買ひな、と呼びかはす、白山米や、帽子焼ぢや、夜商人の口々に、往きかふ納涼の客を呼ぶ。通りの夜店の賑ひも、十時を過ぐれば人まばらに、其夜は一天搔曇り、まだ一滴も落ちざれど、乾の方なる遠山には、はや一驟雨かゝりけむ、涼風さつとおろし來て、露店のはだか火漸次に消え、四角あたりの眞くらきに、瓦斯燈の火影長くさ



して、絞りの浴衣一人行き、二人行き、一人行き、一人行きつゝ、ひつそとなりぬ。  
秀は此時、金と銀と數十個の懐中時計を納めたる、硝子蓋の函の後に出来りて、肩少しく見ゆるまで、函越に顔をさしだし、椅子にかゝりて店のものと、さきよりの打語りたる、予を手真似して招きよせぬ。

「新ちゃん、まかしてあげませう。」

其處に置きたる將棋盤と、秀の顔とを見くらべながら、

「またね。」

「またツて、お厭なの。」

「厭ぢやないけれど……だつて弱いんだもの。僕に勝つこはありやしない。降参をしてしまふが可いや。」

「おほ、何かいつて在らつしやるのね。昨夜も二度までお負けだつたぢやありませんか。」

「そりや、歩三枚では負けることもなくつてさ。何だつて、ずつと段が違ふんだもの。勝つたつて、負けたつて、張合も何もありません、ほんのおあひてをして居るんだ。」

「あら、あんな事をいつて、憎らしいよ。まあ、何でもようござんすからさ。よう、新ちゃん。」  
と早や駒をぞ整へたる。

店より若い者口を出し、

「大層疑つてますね、お秀さん。はさみ將棋のうちは新ちゃんの方から御催促のやうだつたけが、此頃ぢやあなたの方で、セツついて在らつしやる。大分あぶらがのつて來たと見えますね。」  
と打笑ふ。

「あ、眞個だよ。何故だか、ひどくおもしろいの。」

「まあ、結構でございます。折角御修業なさいまし。は、は、」  
とて新聞を読むなりけり。

「さあ、新ちゃん、金ですか、歩ですか。」

「や、いよゝはじめの。まるであかんぼのあしらひだ。何だか先生になつて教へるやうな氣がするからね、こんなことは眞劍でなけりやおもしろくないものを。」

とこのごろはやなつかしみて、殊更に渠を婦人といふ遠慮も少しく薄らぎたるなり。秀はわざとらしく怨めしげに、

「ようございます。澤山そんなことを、おつしやるが可い。私や意地になつて、何うしてもにがしませんよ。而して、そんなに、強いことをおつしやるなら、斯うしませうね。新ちゃんがお負だつたらば、お手について三つおじぎをするの。可うござんすか。」



「それだと、勝つたら何うするの。」  
「さうするとね、私が天狗様の羽團扇といふ、傳授ごを教へますよ。」  
「天狗の羽團扇ツて？」

「それはね、かうやつて、かういふ工合に、ね、駒をならべるの。而して新ちやんが、左からでも、右からでも、ちうくたこかいなど、かう算へてね、御自分の好きな駒を一つ覚えて置くの。さうするとね、私がちやんとあてて、此でせうといふのが、不思議に當るんです。」  
「そんなことをいつて、あたるか不知、」

「まあ、ちよいと覚えててごらん遊ばせ。え、え、可うござんすか。それではと……これ、ね、そら、御覽なさい。不思議でせう。ですから天狗様の羽團扇ツていふの。」

七ツハツの幼兒を、あやすが如き言の調子に、予もまきこまれて、たわいなく、  
「妙だねえ。もう一度やつてごらんなさい。可いかい。よし覺えた。」

「幾度してもおんなじことよ。左の上の方から三ツめ。香車でせう。もう外れつこはございません、ねえ、友さん。」

戸外より見えざるやう、彼の函を小楯に取りて、店とは別に隔りたる、奥の通路になりをれる、疊二疊敷きたる處に、彼方の洋燈の光をうけて、照返す一面の大姿見かゝりたるため、あかるけ

れば灯も置かで、秀と二人坐りたるなり。

「ねえ、友さん。」

と秀の呼ぶに、店のものは函の彼方より、

「あいく、然やうでござい。」

と大きく答ふ。秀は打笑み、

「これにはね、ちやんとたねがあるんですよ。友さんも知つてるわねえ。」

「え、そりやもうたねのないことは御法度ですから、あるにやありますが、まことに輕少なもので。」

「でも不思議ぢやありませんか。」

「然やう、天下恐らく此位不思議なことはございせん。」

「可いよ。まあ新聞を御折角。さ、新ちやん、お負けなさいますと三ツおじぎ。ようござんすか。お勝ちだつたら、をしへてあげます。」

「さきへ、たねをあかしてか、つたつて可いくらるなものだ。おや、お世話様、僕の分までおならべだが、兩駒をはずしただけか。何、これでか、らうなんて、氣が強いなあ。」  
「いまぢや、もう歩三枚なんてわけに、ゆくものですか。」



と歩をつく。

「来たな。」

「まづこれをね。」

「さあ。」

「かうやつてト新ちやんですよ。」

二手三手差合ふ折から、店頭みせさきに登音あしおとして、

「今晚は。」

といふ聲の、袂たもとが如く胸むねに響ひびき、汗出あせづるまで身みに感かんず。富とみの市いちハヤあがり込みて、二つ三つ店みせのものに、ものいひかはすが聞きゆるなり。

一夜ひとよおき、二夜ふたよおき、三日みっかとは缺かかすことなく、予このときの此處こゝに来こる毎ごとに、此方こなたおくる、か、渠早かわはせまか、前後ぜんごして、富とみの市いちと、秀ひでの前に、かく落合おちあはざることに、いまに到いたるまで一たびもあらざるなく、ために二人ふたりしてすることの、何時いつも其それに妨さまたげられて、予よは遺憾いかんなきことを得えざりしなり。さらでも不快ふくわいなる盲人まうじんなるをや。予よは其聲そのこゑを聞きくと齊ひとしく、むら／＼と癩癩かんしゃくおこ起りて、胸むねのうづくと思おもはれき。

「新ちやん、何をうつかりするの。」

秀ひでのいふに心着こころきて、あらぬ駒こまを進すすむる處ところへ、富とみの市いちは入來いりきたりて、かれとわれとの間まをへだて、盤ばんの一方いっぽうに座ざを取りしが、直すぐに口くちをさしはさみて、

「何なにうしました／＼。あ、なるほど中飛車なかつしやで、むかうの手てからは桂馬けいばがあがつて、ふむ。と一々いっくく問糺とんじゆし、おのが記憶おぼに將棊しょうぎを描えがきて明あきらかに盤面ばんめんを知り得うるなり。

かくのごときこと例れいなるに、予よはうるささにもものいはねど、秀ひでは一々いっくく深切しんせつに、兩方りやうほうの駒こまの進退しんたいを、落おちもなくいひ知らしつ。

俄にはに嬉うれしげに叫さけび出いだせり。

「お、嬉しい。飛車手ひしやて、王手やうて、ね、ね、新ちやん。」

とあふる、如ごとき笑あみを含くみて手てを拍うちぬ。

予よは大業おほげふに驚おどろきたり。

「え！こりや弱よわつたな。かうするんぢやなかつたツけ、かうするんぢやなかつたツけ。一寸ちよつと一手ひとて待つて下さい。」

「不可いけません。かけつこですもの。三ッみつお辭儀じぎを遊あそばすんだわ。」

「つい傍見わきみをしたんだからさ、」

「そりや新ちやんがお悪いんだもの、待つたなんか卑怯ひけつですよ。」



「困るなあ〜。お辭儀をさせられちや大變だ。女にお辭儀なんて僕は、……不可いなあ。」  
「ですから然ういつたではありませんか。あまりお威張りなすつて憎らしいんだもの。嬉しいね  
え。」

「ちよつ口惜い！」

先刻より苦笑したる富の市は、予を卑みたる語氣をもて、

「へ、へ、飛車で勝負をしまし。何を然う弱るんだ。そして何、歩を一個あひとうてば、  
理窟もなにもありやせん。其を知らんやうな將棊でもないに。」

「え。」

「君はへつらふね。は、は、は、何時でも然うだ。まるで段の違ふ將棊なくせに、秀さんがつまり  
さうになると、わざと駒をあけてにがしたり、わかり切つて居るものを、それ今のやうに好んで  
手落をして弱つて見せたり、は、は、負けておもしろがるとは妙な人だ。年紀もゆかないに。は  
は、何でも秀さんの喜ぶのが嬉しいと見えるね。は、は、は、お殿様のおあひて將棊だ。君は秀  
様におべつかをして居るのだ、如才のない。」

全身の血は頭にのぼりて、耳ぐわつと鳴るとぞ覺えし。

十分時の後は家に歸りて、あふぎ倒れて、わつと泣きぬ。盲目の言皆中れり。亡き母上よ、許

させ給へ。さる兒は産ませたまはじを。



二之卷



莓  
神婢  
はなれ駒  
留針  
影法師  
山鳩

莓

ネツキスト、ネツキスト、ネツキストと、ミリヤアドがや、口早に、順々質問を言送る、清き聲を聞きながら、夢地を辿る心地也。時々隣席の學友より、不意に注意を請くるにぞ、其都度はツと我に返りて、さて慌しく其問に應ぜむとするに、質問の何なりしかを、うかく聞漏し居るなれば、更に答ふる術を知らず。心臆して問ひも返さず、唯面のみ赤うなり、黙して俯向くこと頻なりし。

其日は學期の試験なるに、殊にこの一致教會に屬したる、東京の中央會堂より、宣教師一名、牧師一名、並に隨行員兩名、折から巡教の途次わが校に立寄りて、生徒の成績を見むがため、此時教場に臨みたるなり。

豫め其通牒ありたることなれば、ミリヤアドは師の情として、生徒に晴を取らせたく、且つみづからも教師等に、おのが生徒の出來榮を、誇らむする意もありたるより、二週間ばかり以前より、あはれ成績の好かれかすと、組の者一統に、繰返し々其旨をぞ含ませたる。



特別に予を其家に招きつゝ、好き兒ぞ、かまへて仕損ずな、いと年少き御身の榮は、珍客に對するわが派手なり。あしき事にあらざれば、聊の私は、神も許したまふべしとて、今日われに試むべき、幾條の問題を、あらかじめ打明かしぬ。

記憶力は人に譲らじを、殊に一冊の會話篇より、難易取交ぜ抜き出して教へられたることなれば、心易くそらんじて、ものの數ともせざりしに、富の市に罵られて、口惜さ、恥かしさの苦悶の枕に眠らざりし、昨夜の今日のことなるより、我にもあらで茫然と、あらぬことのみ思ひ續け、今おのが身のいかなる場所、何の時にあるかさへ、打忘れたるほどなれば、然は見苦しくも失敗して、はじめより一ツとして答へ得たるはなかりしなり。

頭重く、耳鳴りて、胸苦しき身を持て餘し、氣を取直す力も失せて、再び眠らぬ夢をぞ視たる。卓子の上を、ことごとく、三ツ四ツ忙しくたぐ音して、妙なる薰の腦を刺すに、ふと心着きて、面を上ぐれば、ミリヤアド立ち居たり。名を呼ぶに應ぜざることの、度重りに、渠は堪へで、予が前に來りしならむ。手にせる鉛筆の軸を返して、卓子を打ちて、驚かせしなり。

予を見たる目に怨を帯び、激せる顔を颯とあかめ、  
「何をして、何をして！」

と低聲に強く戒めぬ。客の臨める席なれば、仍なくは得も叱らず、少しく聲をふるはせつも、

一句の英語を予に語りぬ。蓋し國語に譯すべきなり。

予は其激したるを見てあわてたれば、さまで難解き語にもあらざりしを、行詰りて、(我に與へよ)といふまでは解せしが、語の題なる物品の名を、いかにもして譯する能はず。恐怖と、慚愧の眼を以て、ミリヤアドの顔を瞻りしに、女教師は聲をひそめて、

「赤いもの、小さい、小さい。」

と口早に教へてき。うたてき予をば憐みたる、渠が心を汲み知りぬ。

あせるに耳の熱くなるのみ、なほ答へかねて黙するにぞ、いひ効なしとやミリヤアドの、もろともに急き込みつゝ、

「小さい、美しい、赤いもの、赤いもの。」

(これほどの)と其形を示して、胸なるぼたんをつまさぐれり。人知れじとてしたらむが、來客も學生も齊しく此方に瞳を灌ぎて、なかには笑を含むもあるに、ミリヤアドはおもはゆげに、密とあたりをぞ眊したる。

予はおぼえずも聲を放ちて、

「根がけの珠。」

と我ながら調子はづれに答へたり。同時に、哄と笑聲起りぬ。



「ネツキスト！」

と一聲鋭く、ミリヤアドは間を送りて、屹と予を見たる目の中に一滴の涙を湛へたり。予はふた、び仰ぎ得ざりき。

隣席なる富の市は、すましかへりて、

「莓を下さい！」

とそを譯しつ。(すとろべりい)の語なりしよ。

神 婢

「こら、新次、起きんか、お前の處へお客様だ。」

「誰です、父上、遊びに来たのなら断りませう。」

「む、起きるのが大儀かの。いや、其まんまで逢つたら可からう。油断のならねえ、おい、新姐が一人尋ねて来たんだ。は、乃公はまたおれの處へ来たのかと思つたら、大當はづれよ。は、は、は。」

と元氣よき高笑、兒の病をば慰めむとて、然は氣あつかひしたまふなるべし。

予は半ば起返りぬ。

「え、女ツて誰でせう。」

「む、何よ、の、あの何の人さ。お前が學校へ行くはじめに、朋達がそれ耶蘇へ入つたが分らねえとかいつて、毎日道に待伏をして、苛めるつて、弱つて居たつけの。其時分から袖の下へ庇つちや、家まで送つて来てくれた、それあの束髪に結つた別嬪だ。な、白襟で。武家方の女中が御維新になつたといふ身の、凛とした、嫌味の無い。」

「あ、父上、それぢやミリヤアドの家に居る操さんといふ女でせう。」

「さうかな、まあそんな者だらう。何でも構ふことは無い、寝たま、お目に懸るとするさ。」

良ありて枕頭に來りたるは、果して其人、操なりき。日曜學校の教師なれば、人あつかひはよく馴れたり。見るよりなつかしう笑ひかけて、はやわが額に手を加へ、忽ち眉を打撃めぬ。

「新さん、熱がございますね。お頭痛が？不可ませんねえ。學校へもおいでぢや無いさうだし、ミリヤアドがね、大變案じて居るのよ。御病氣は？」

「風邪だつて、」

操は頷き、

「ぢあ、まあ、ね。ですが夏の風邪はしつこうございますつさ。お醫者様は？」  
「大したことはないツて言ひます。」



「でも、折角お大事になさらずにツちや不可ませんよ。学校もおくれますわ。」  
「僕は最う学校には行きません。」

操は豫て期したる如く、

「さあ、其事でね。實はミリヤアドの代に、私がお怨みに来たんだけれど、御病氣だから堪忍してあげませう。」

といひかけて微笑みながら、

「ミリヤアドもね、新さん、学校をひいたのよ。何故ツて、何故ツて、新さん、あなたが餘りだからですわ。ミリヤアドが如彼見えても、宛然子どもなんですからね。こんど来た宣教師に、ひどく新さんのことを御自慢でね、ま、さんざ、お弟子の惚氣をいつたの。而して御目に懸けませう、御覽なさいでもつて、試験場へ連出して、こゝでといふ處で新さん、ま、貴下あの日は何うしたといふんですね、私が聞いててさへ口惜かつたわ。何をうっかりして在らつしやつたんだか知らないけれど、ちつとも身に染みて下さらないでさ、ものをいつても聞きつけもしないでせう。堪らなくなつたと見えて、傍へ行くと、貴下がまたひどくとちつてさ。どぎまぎなさるんだものを、見て居ても、可哀相で私もはあ／＼思つて居たわ。ミリヤアドがまた夢中になつて、そつと遠廻に教へたでせう。御自分は氣が上ずつてから人に聞えないつもりでも、皆な聞いて居ま

すわね。それでなくツてさへ自分より年上の生徒にものをいはれると、いつでも恥かしかつて、紅くなる方ですもの。依怙最眞で、しかもねえ、試験といふのに教師の方から教へたんぢや、あとで顔があらはされますものですか。あの日歸つてから、新さん、貴下が折角の志を汲んで勉強をして下さらないツて一日泣いて居ましたつけがね、でも、何うぞ、あの日は貴下が病氣だつたのであつてくれればいゝ、ほんとにあんなにもがお出来なさらなくなつたんなら何うしようツて、さういつちや案じて居ますよ。」

操の手は逸早く予が口を蔽ひたれば、折から茶を汲みて來合せたまひし、父はさりとも心着か

で、  
「新次、吸子ごと置いとくぞ。え、お愛想もございません。澁茶でもおあがんさい。」

と無頓着に言ひすてて、はや座を立たんとしたりしに、操は開きて、席を正して、

「貴下が新様の父上でございますか。染々御挨拶もいたしません。あの、大層なお細工のお上手だつて、豫々人から承ります。早速でございますが、簪を一本打つて頂くわけには参りますまいか。」

まめだちていひたるに、父はいぶかしきおも、ちなりしが、極めてまじめに、

「へい、耶穌も簪をさしますか。」



「まあ。」

「また、御眞眞に。」

と父は立ちぬ。操はといきつきて羞ぢたる色あり。

「まあ、新さん飛んだことをいつて、貴下をお泣かせ申してさ。間の悪い處へ父上がお出遊ばしたもんだから、つい場合を繕はうと思つて、心にも無いお世辭をいつて、あ、私、極が悪いわ。可うござんす、屹と打つて頂ますから。で、ね、ミリヤアドが自分で見舞に來たいんだけれど、どつちかといへば叱つてあげる筈なのを、此方から出かけて行く譯にはゆかないから、おまへ行つて見舞つて來て、而して新さんには、私が大層怒つて居るから、あやまつてまた遊びにおいでなさいと、然ういつて來て呉れるツて、ミリヤアドの言葉なの。そんなに貴下のことを思つて居るのですからね、學校のことはともかくも、會堂へはあひかはらず入らつしやいよ、よ、可うござんすか。あれ男の癖に。」

枕の上につぶしたる、予が背を優しく搔いなでつ、

「新さん、御覽なさい、ね、ね、これを、貴下にあげますツさ。」

早や黄昏の一室の内に、赤く、小さく、美しく、人の情のほの見ゆる、莓を裝りたる一個の籠、添へたるミリヤアドの手紙にいふ——愛らしき學生よ、心して、再び此名を忘れなせそ——

### はなれ駒

橋の袂に屯したる一群の少年は、十六七を頭として六歳七歳八歳ばかりなるまで、棒を取り、礫を握り、或は砂利を掴みなどして、何をか口々に罵りつ、予が近寄るを待構ふ。

渠等は例の如く會堂より予が歸途に就くを要せるなり。

近隣なる竹馬の朋の、嘗て小學にありし時、席を同じうしたるやから、皆予が外人の教を受け基督教の會堂に通ふをば、忌み、且つ憎むこと一方ならず、面に唾せむ勢もて、影を望めば後を追ひ、姿を視れば路を塞ぎ、嘲罵の果は棒ちぎりの害を加ふること常なるより、予も深く注意せしが、一月ばかり引籠りて、久しく外に出でざりしかば、忘るゝともなく油断して、料らず渠等に出あひしなり。

予は進みかねてためらひき。

其と見るより口々に、

「腰拔やい、腰拔やい、新次の、新次の礫やい、此處まで來て見ろ上杉やい、耶穌の新次の、馬鹿の、間拔の、弱蟲やい。」

言馴れたれば、唱歌の如く、いつもの文句を一同に節を付けてぞ囃しける。耳馴れては居たれ



ども、さりとは口惜く、腕力あらばと思ふのみ。橋のこなたに立すくみて睨へ詰めたる横合の油屋小路といへるより、わつとばかりに呐喊を擧げて、ばら／＼と七八人、驚破と見る間に突あたりて、どんと無體に突飛しぬ。

予はたじ／＼とよろめきつゝ、こは後よりまはりしぞ、前なる敵と引挟みていかなる憂目を見せむも知れじと、はつと思へる眼を遮り、危ふくも鼻頭を掠めて、木もて造れる持遊びの薙刀の刃の閃きしを、纜にはづして身を交し、右手に掴みて力まかせに八ツばかりの兒の持ちたりける、其薙刀をひつたくなれば、聲を揚げて泣出せり。

「やあ、三ちゃんを、泣かした／＼。」

「なぐツちまへ磔め。」

「畜生。」

と聲鋭く、誰にかありけむ、いと長き竹棹以て、滅多なぐりに打おろすを、目も眩れながら思はず、眉間のあたりに受留めたる獲物はもろくもホツキと折れたり。

物と氣落せる前後よりひた／＼と寄せ合せて、左右を圍みて取巻きつゝ、じり／＼と詰寄るにぞ、手も足もぐる／＼と呪詛の繩に縛られて、しめつけらるゝ心地して身動もせで突立つたる、舌硬ばり、唾かわき、拳を握りてわな、きつも、助欲しくて見返りたる、元來し方に鱗爪の音、

人こそありけれ、ミリヤアドが、三歳駒の逞しきに、横鞍にぞ乗つたりける。裳の裾長く踵を埋めて、垂れて地摺になるばかり、薄色の日曜服、川風に颯と靡き、たをやかなる身の軽く、雲に乗るかと思ふ響、もの静にぞ打つたりける。

「やあ、女唐めだ、女唐が来た、來やがつた／＼。」

少年等の聲々や、予は忽ちにあびせられぬ、拳のあられ、砂の雨。剩さへ丸太に足をすくはれて、横だふれになつたる身は、冷き衣に包まれて、温き手に抱かれぬ。ミリヤアドの汗を絞りて、さも悲げに呼ぶ聲せしが、俄に凄じきものおとして、や、ありてひつそとなりぬ。

眼をひらけば蝙蝠一羽、橋の欄干より衝とあらはれて、ひらく／＼と柳にかくれ、瀬の色白く、蛇籠暗き、此方の岸を五人七人、をめき叫んで疾走する、むかひの岸なる放れ駒の砂煙を立ててかけゆくを、川を隔てて追懸け行く、川上なる山の端に、薄月出でて暗かりき。

### 留針

ミリヤアドの送別は、其住居にて、いと内端に、世を憚りて開かれき。先の日、予が少年等に苦められしを救はんとて、當時乗りすてたる渠の乗馬の、雨の如くなりし礫に驚かされしを、取鎮むべきミリヤアドの手は、予を庇ふため塞りたれば、した、か狂ひて離れ去る時、端なくも一



人の小兒の、遁後れたるを蹴放して、憂ふべき怪我を被らせぬ。

被害者の親は善き人にて、さまで苦情を言はざりしかど、外教を憎む者の、然るべき制裁を加へむなど、團體を造りて騒ぎたれば、然らぬだに心弱きミリヤアドの、おのが不注意を悔い恨み、人の不幸を哀傷して、一室に閉籠りて、掌に面を蔽ひては卓子にうつむきて、神に祈を捧ぐるのみ。食の細るまでわびたるにぞ、恚て久しからむには、其健康もいかなるべき。且や、心なき怨を受けて非難の衝にあつた、身の上も憂慮はしく、郷黨の怒解けざれば、布教の上にも害あらむ。かた／＼身を退くこそ萬全の策なるべけれど、人のすゝめにミリヤアドの、さはとて旅装を整へて、前日来逗留したる、宣教師の一行が、東都に引返すに連立ちて、上京すべく定めしなれば、世の聞えを憚りて、慎ましげにたたむとせしなり。

客はいと多かりし。

年來布教に盡瘁せし其には何の効もなきに、せめては名残を惜まれむを、胸狭き人々のために、幾分か、否、豈幾分のみならむや、市民に對する教會の徳望は殆ど地におつるばかりなりなど、座の一方に嘯くありて、憐むべきミリヤアドを難する者少なからず。

さらぬは不運を弔するのみ、渠を祝するものあらざるにぞ、ミリヤアドも悄乎として客に肩身の狭げなりし、失意の身には誰がせしぞや。

「この起は予なるものを、と予はものいふさへ控目に、唯人顔の胸されき。

富の市もまた座にありしが、一言をも交さざる、予をいかにして聞着けむ。

「や、君。」

といひながら嘯く如く空を仰ぎ、

「近頃は何うして居ますね、時計屋へも來ないやうぢやが、は、は、は、何うだね、ちと私が家へ遊びに來なさらんか。金曜日は午後から隙だからね。」

予はき、もあへず席をはづしつ。ミリヤアドが化粧の室の冷たき椅子にたふれかゝりて、(金曜日)は隙だからね、と繰返しつ、切齒をしたる、蟲齒の急にうづき出でて、忍びがたくなやみにき。

「おや、新さん。」

外の方より、操はつか／＼と入來れり。入るより予が狀を見て取りて、

「何うしたの、え、何かお氣に入らないことがあつたんぢやないの。ミリヤアドが尋ねて居ました。彼の方も可哀相ですよ。せめて新さんが機嫌のいゝ顔を見せて、快くたたしてあげて下さいな、ね、此方へ入らつしやい。お嫌、何故？え、齒が疼むの、そりや不可ませんね、あ、嗽をなさると可い、水を持つて來てあげませう。」

氣輕に出でて行く、引違へてミリヤアド入り來りぬ。



「齒が疼むツて。さう？」

其身も疼むかの如く、眉根を寄せて身震ひしながら、髪にさしたる留針を抜き取りて、予が頤に手をかけつゝ、むかひの壁にかゝりたる姿見を仰がせて、

「口を、口を。」

といたはりいふ。

「あ……」

とばかり指の先もて、疼痛を示して齒を開きぬ。

「甘いものをたべるから、坊や、世話をやかすこと。」

ミリヤアドは呟きて、水の如き腫を寄せ、眉根を皺めて顰みつゝ、針の尖もて齒のうろを危げに穿りくれしが、

「治りませう、大丈夫。」

と微笑みながら、桃色の絹の手巾に、針の尖をつと通して押拭へるを、予が着たる、衣ものの襟に縫着けたり。

「あげませう、これ、また疼む時。」

齒はいえぬ。されども胸のいたかりけり。

「さあ、新さん。」

時に操は硝子杯を手にして、引返し、背後より肩越に、差寄する水を含む時、渠は予が肩に兩手をかけて、斜に彼方に推向けつゝ、

「あなた。」

といひて目を合せぬ。

ミリヤアドは面をそむけて、衝とのきさまに差のばしたる、寶石輝く右手の指に、予は唇を觸れたりき、鴉毒をあふぐ時、仙薬を嘗むる時、いつれか其時のおもひに似たる。

### 影法師

唯散步とのみいひこしらへ、十一時すぎ十二時頃、もの狂はしく家を出でて、深水の前を二度三度行返りして來らでは、寝られぬ病に罹りたり。

去ぬる夜、富の市に胸の秘ごとを發かれしより、獨り恥ぢて氣の咎むれば、再び行かむが面伏なるに、分けて學びの道すさびて、學校も退きたるを、富の市の口よりして、秀に、はた其母に、いひつけたらむと思ふにぞ、ますくわれは怯氣つきぬ。

店に人目のありと思へば、宵の内は其居まはりにも足を運ぶことをせず、初夜すぎ人の寝ねて



のちを、然は密にぞ通ひしなる。

はじめのうちは予が父も、もの好とのみ見許せしが、雨降りても、風吹きても、缺かさず出づるに疑ひかゝりて、果は夜遊を禁じたまへり。

時刻來れば胸苦しく、起居に我身を持餘しつも、心を悶えて忍びしが、ミリヤアドに別れてよりは、いかにしても堪へずなりぬ。

父は風邪ひきて早寝をせし、寝いきをはかりて外に出でて、唯見れば月のありともなく、またあらずとも思はれざる、時雨あがりの空一面に灰汁を流せる如くなり。折から動物の形したる、一團の黒雲のむらゝと湧き出でしが、濡れたる地に影を映して、恐しと思ふ間に、塵も留めず消去りき。こは我門を出でたる時なり。

覺束なくも行きくつて彼の大通の四角に懸れる時、眞闇なる人家の軒下より颯と音たてて、宙に飛びて、予が足許に落ちたるものあり。立停るに、ものあらで、一足二足行くさきへ、またさらゝと、さらゝと予を導くとする如く、三間ばかりともなひしが、怪しとも怪しきに、耳傾くれば山おろしの、そよゝと渡るにぞ、さては木の葉よと心着くに、其音は忽ちやみて、毛筋も動かす風死にぬ。

あまりあたりの寂なるに、人は咎めねど下駄の音の重く響くを憚りて、脱ぎて、手に提げて、

素足となりけり。

左よ、右よ、此度はまた左よ、歩行の順、正しく胸に覺えつゝ、兩側の家の墨繪に似たる、町中を辿りくつて、やがて深水の店近き、少しく此方に歩をやすめぬ。

や、心の落着くに、不圖時間を考ふれば、密に家を出でしより、幾時ばかり過ぎたりけむ、思へば久しき心地のするに、予は太く驚きぬ。

急ぎ再び歩を移して、さきにもいへりし深水のむかひの唐物店の前に着く。

時に一天墨を流して、いつのほどにか、我が姿の見分かざるまで闇となりぬ。ト見れば背後なる瓦斯燈の、近くは一尺、末廣がりに十間ばかり、彼方にては町の幅一杯に、遠くなるほど蔓りて、軒を越し、屋根に這ひ、遙か彼方の通のはづれの、酒屋の藏を蔽うたる、姫が松の梢にて、朦朧として消え失する、一道の火影によりて、莫大なる影法師のや、其長さに達するまで、さやかにぞ描き出されたる。歩を進むるに従ひて、頭は殆ど我居る方より半町餘も隔りたる、其松の木に登るまで、凄まじく、長うなるに、悚然としてかほをそむけし、深水の二階の四間の障子に、赤黒き火影燈と射す。啊呀と一足退れるトタン、障子の上下一杯に、大なる人の天窓と、鼻と、唇と、横に向きたる顔の影の、さとうつりてぞ見えたりける。

富の市よ！と思ふと同時に、げらゝと高笑の、左右の耳へ二ツの口もて兩方より推込むやう



に聞えしにぞ、あとさけびたるあとは覺えず。臥床にわれは心づきぬ。外にはどうく〜と凄まじき大雨坤軸を降り静めて、恰も瀧を落すが如く、寢着は絞るが如くなりき。汗か、あらぬか、雫や、否や。

### 山鳩

十二月十日、ミリヤアドより手紙來れり。予に東京に來れといふ。嘗て別を惜みし時、然はわれ彼の地に着きて後、身の振方落着きて、居に安んずるものならば、直ちに汝を招くべきに、笈を荷ひて後より來よ。成業の曉までは、食を別けても扶助せむなど、細々言を交へたる、其約を違へずして、今かく報知をぞ寄せしなりける。

少年の血氣盛にて、功名心の燃ゆる頃の、予はいかにしてかたゆたふべき、固より父も許したり。其日にも發程むとせしが、心引かるゝは秀なりき。

將棊のことありしより、心ばかりは寢覺にも通ひたれど、其横顔を見ざること、三月四月に早やなりぬ。わけて、幻か夢かを分たす。恐しかりし夜の影法師より、夜毎にあくがれし足も留みぬ。たゞ懐しさはかはらぬを、都にのぼり果てむには、幾年を経てかまた逢はるべき。あはれ叱らるればそれまでよ、一たび名残を惜までやはと、思ふ心の切なるより、きまりの悪さも打忘れ、

東都へ遊學すといふをかこつけに、疎かりし足を激ましつゝ、消入るばかりの思ひにて、行くこととは行きたれど、なほたやすくは入りかねて、半時餘もためらひしが、一足づゝ小蔭を出でて、次第に深水の前に近づき、店なる洋燈の光のうちに、わが顔見えつと、ぎよつとして、衝と行きすぎて立戻れる、身は宙にある何かの手以て、引立てらるゝやうに覺えて、啊呀、心着けば予は既に椅子に腰かけて俯向き居たり。

親しさは變らざりき。

友吉は見るよりも、仰山なる聲を擧げぬ。

「よう……これは妙？不思議、奇的烈といふお入來だ。新ちゃん、恐しいお見限でございましたね。何うしてお見えなさらなだらう、御病氣か不知、それとも學校がおいそがしいか不知、とまづはじめの内はおうはさで、なかごろはお案じて、此頃ぢやお奥でもつて怨んで居ますぜ。可い所へいらつしやいましたよ。今ね、ちやうど秀さんも母さんも、お女中連不殘湯に行きました。いまにお歸だからお待ちなさい。ほんとうに留守の内だから可うございました。

何でも今度いらつしやつたら、さんくゝ怨みをいふ、と秀さんが大意氣込でお出ですからね、突然ぶつからうもんなら面くらつておしまひなざる處、友吉が一番御眞効といふので裏切つてしやべります。まあ落着いて何でも其のうまく言譯の出来るやうに今の内考へてお置きなさいま



し。可うございますか。

お待ちなさい、それとも先んずれば人を制すで、かうやつてト函のうらへ隠れて居て、友さん唯今と来る處を、ばあゝ、といつて驚かしは何うでせう。え、新ちゃん、しばらく逢はないで居て、久しぶりで顔を合すのに、たゞちや榮えますまい。

何か一趣向ありさうなもんですね。お待ちなさい。ばあも馬鹿げてはおもしろからず、ト仰向に寝て居るも變なものだし、入らつしやい！と此方からいつて見るか。それも道化て居て、新ちゃんではあまりが悪いな、お待ちなさい、いや、かうこじれちや思案にあたはず、さすがの友的大弱。何ぞおもしろいこともありませんか。」と新聞を取り上げて、三の面を覗きながら、

「はゝゝゝ、ゐざりが駈け出すといふ標題がある。ちと御覽なさいまし。」

とんくくと二つ三つ下駄の齒の雪を打あてて、入口に落す音、中戸を開くる響するに、予は新聞もてわが顔の隠るゝやうにぞ讀み居たる。

時計函の背後より、

「唯今。」

と懸けたる聲、引緊むる如く身に沁みぬ。

「そりやこそ。」

友吉は仰山に、

「秀さん、新ちゃんが。」

「やっ！」

堪らずあげたる熱き顔を、秀は見るとより莞爾と笑みしが、軽く會釋して奥に入りぬ。

「あれだ。」

友吉は首をすくめ、

「ね、新ちゃん、だから私がさういつたんでさ。おい、金どん、一寸奥へ行つて斥候といふのを一番、是非こりや敵を知つた上でないと、謀計のめぐらしやうがない。おいく……金どんく……これ！」

「おつとしよ。」

小僧は居睡りたるが、しやちこばつて、背のびをして、裾は膝までまくしあがり、諸脛長く踏揃へて藪から棒に突立ちけり。

友吉は呆れ顔、

「何だ、そりや、おい、金。」

と背をひとつくらはせば、ぐしやりと坐りて、



「へい。」

といふ。氣のなき返事に欠伸をませて目やにを搔いたるをかしさに、思はず笑を催す時、  
「友さん。」

とまた呼びかけながら、秀は奥より立出づる。

「店のね、皆が湯に行つておいでなさいって、母上様が。寒いから、ゆつくりね。」

友吉は頭をさげ、

「それでは、お頼み申しませうか。」

「あ、店には私が居てあげようから。而してもう片付けてね。」

「はい、では、然ういたしませう、金どん。」

「お嬢様、え、何ですか。はい、お歸んなさい。」

「何だ、これ、寢惚けなさんな。」

二人は店の洋燈を消し、臺洋燈のみ一つ残して、椅子をひき込め、火鉢をいけ、硝子戸をはたとさして、手つ取ばやに片付けつ、

「ぢや、行つて参ります。」

「さあ〜。」

と出だし遣りつ。

頭を斜に火鉢に凭りて、指以て縁を叩き居たる、予の前に、中腰になりたる秀の、火簀に兩手をかざしつ、微笑む顔を視めしが、や、含みたる音調もて、

「新ちゃん、しばらくね。」

といひたるが、懐しかりしといふ心の籠りしやうにぞ聞えたる。秀はまた、

「もしかすると御病氣で、こんどお目に懸る時は瘦せてでもおいでぢやないかと、皆でお案じ申してね。今も道々母様とさういつて來たの。美津もねえ。」

「おや、新ちゃん。入らつしやいませ。御機嫌よう、お嬢様。」

「美津かい、かまはないで、さあ〜、暖かにして寢ないと悪いよ。」

「いえ、もうたいしたことではございません。」

「でもさ。」

「ありがたう存じます。あの、おゆつくり。」

「お大事に。」

「はい。」

と立つ。



「風邪なの。」

「急にお寒い故なのでせう。あ、新ちゃん、お寒くはございませんか。」

「いゝえ。」

「まあ、おあたり遊ばせよ。父上様は？」

「息災です。」

顔と顔との其のあはひの、あまり近きにいきぐるしく、おもきものにてわが頭をおさるゝやうに心に感じ、ふと横むきて片隅の冷たき板戸を望むとて、一羽山鳩の翼をひろげて、嘴を開きたるを飾りつけたる、一個大形の柱時計を、今日新らしくみいだしぬ。こは先の日にはなかりしものなり。

「おもしろい時計があるのね。」

「さう、新ちゃんはまだ知らなかつたのね。來らつしやつたらお見せ申さうと思つて待つてたの。あの鳩がね、時間の前になると、ひとりでに鳴きますからおもしろうござんすよ。」

「鳴きますつて、あの鳩が。」

「え、と、まだ時間にはならないのかねえ。二十分、まだ十一時にまがあるのね。それでは、と秀は立ちて、むかうむきに時計に對し、

「聞いておいでなさいましよ、ようござんすか。」

手をふるれば、文字盤の長劍動きて、

「あら！」

鳩は鳴けり。

予は衝と秀に立寄りたり。

「不思議だ。其木で拵へたのが鳴くのか不知。」

頻に頭を傾けて、予は其の聲を異なりとせり。

「ほかに何んな鳥も居やしませんよ。」

「だつて可笑いな。」

「そりや器械ですもの、ぜんまいで、ちゃんと、かう鳴くやうに、しかけをしてあるんですつて。」

「ぢや、もう一度鳴かして。……」

「それではね、あなた背後むいて、目をつぶつておいでなさいよ。」

「何故ね。」

秀は然も、ものありげに、

「さうでないと二度めには鳴きません。」



「變だ。かう……」

「さうやつて、さうやつて。可うござんすか、目をおつぶりなすつて？」

いひつゝ、忍音に笑ひしが、鳩はまたしばなきぬ。

「はてな。」

「新ちゃん、おもしろうござんせう。妙ね。」

「妙ぢやないや、分つた。口でいふんだ、鳩の眞似をするんぢやないか。」

「私ですツて？」

「少し含聲で……似てるものを。」

「酷いねえ。私は何うしてあんなに旨く眞似られますものですか。」

「それだつても、はじめの時はあつちを向いて居てお鳴かせだし、こんだは目を塞がせて鳴かしたんだもの。」

「それは何も私の方で眞似をするんぢやありませんけれど、鳩がね、然うしないと、鳴くのがいやだつて、いふんですもの。」

「なに、あんな木でこさへたものが。」

「でも聲を出すくらゐですから。」

「そんなら鳩に、然う貴女から、目を塞がないで鳴けとおつしやい。さうすりや、ほんとなのか、嘘なのか、確な處が分るんだ。」

秀は頷きて時計に向ひ、

「鳩や、新ちゃんがね、お前をおうたぐり遊ばすから、可いかい、其まんまで鳴いておくれ、よ、後生だから。」

鳩はまた鳴きぬ。鳴く時、秀はうつむきて故に其口許をば兩袖をもて打蔽ひぬ。

「あら！またあんな怪しいことを。僕はイヤだ。」

「ほ、ほ、何故え？鳴いたではありませんか。」

「だつて口を隠したから怪しい、やつぱり自分で眞似たんだ。」

眞顔になれば、ゑみ傾け、

「これはね、口のうちに呪文をいふの。何して術でもつかはなけりや木の鳩が鳴きますものか。」

「そりや呪文なら可いけれど、自分でいふんだから仕やうがない。何てツても、もういけない、誰がほんとにするものか。」

「あれ疑り深い、まあ。ぢや、ちやうど一分経つと鳴きますやうに針をまはして置いてね、私がすわりますから。あなた私の口をお壓へなすつていらつしやいな。」



「可いかい。」

「可うござんすとも。」

「かまはないの。」

「さ。」

熾ゆるが如きわが耳に、冷たき秀の鬢觸れて、後毛のぬれたるが、左の頬を掠むる時、わが胸は渠が肩にておされぬ。襟あしの白きことよ。掌は其温かき唇を早や蔽うたり。雪は戸越に降りしきる。

三之卷